古くて新しい数学、『神の数学』(Hidden secret named Japanese Mathematics) の内容を紹介する
（すべては『古神道』から現れた自然の持つ「数の理」である）

≪『神の数学』、それは人類に与えられた「古く、かつ新しい数学」（宇宙普遍の真実数学）であり、『意識（心）の数学』である事を知って欲しい。それを知り自然に問いかければ『宇宙の秘密』、『神の知』は自ら姿を現し、我々に語りかけてくれるのである。西洋科学文明のはざ間で心のささえをなくし、自信を失った日本の若者達よ、古の「数の理」に立ち戻り、その声を聞いて欲しい、それにより再び心に力が漲り、また明日への確かな希望が湧くであろう≫。

Try to study, and you will have another bright tomorrow.. . Don, t disapppoint yourself and boost your spirit by knowing **"kamino suugaku**(Hidden secret of old Japanese Mathematics)" !!. Free your mind 、 and you will find the unknown new world so easily. Every time you come to this home page. You will discover some new naturer secret that humann race don,t know yet.

If you come to my home page ten times , You will discover 10 more natures secret that nobody known yet..
If you try 100 times., you will surely find 100 new nature secret of God...
Never say ."I .doubt it".., It is holy Bible written in figures. and it contains the complete and eternaj truth .
You wil soon find it is written by Got,s hand. It is a true story found in the great Japanese "Koshintou(old shintou)".

＜NEWS＞

① 私が 20 年間唱えていた「宇宙は 9 次元世界であり、科学者が言うような 10 次元の世界ではない」との説ははやっと日の目を見た ようである。すべては「神の数学」の図表に開示されている数による真実答である。 See→ 朝日新聞 2008 年 1 月 16 日の記事

② 私の捧持している古神道の祝詞「ひふみ‥天地の数歌」と全く同じ数の展開図が古代インドの最古の宗教文献（今から 3000 年前） である「ウェダー」に記されてあり、それは特に「ウエダーサークル」と呼ばれ,さまざまな不思議な性質を持っと言われている ものである。この事実こそ、まさに「古代の数の理」の実在証言そのものである。

See→「ひと目でわかるインドの数学」‥牧野 武文著、白夜書房刊（2008 年 2 月 27 日発行）

③ 最近また不思議な記事に遭遇した。それは３万年前の遺物、「エメラルド・タブレット」に印されている言葉である。そこには「次元界は１次元界から９次元界まである、そこには９つの宇宙があってそれぞれに１つの宇宙意識が入っている」と。それはまさに「神の数学」の図が描いているものと完全な一致である。…See→「まもなく世界は５次元に移行する」127ｐ中丸薫著より。09,6.15 追記。

④　私が約 20 年間、ひそかに心に秘めておいた人類歴史上稀なる「神の法陣」の図解が今回名古屋在住のある編集者により文字として打ち出された。それは古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」のまばゆいばかりの真実性をもって「10 進法」の不整合とその誤りを誰にでも分かる形で描き出しているものである。すべては数が語る真実であり、数で語られている「宇宙普遍の真実」である。

まさに、古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」は永遠に栄えて止まない「宇宙の真理」を開示しているものであり、未だ人類の知らない自然の超物理、超数理の存在を高らかに歌っているものである。それは同時に超古代の日本には現代を凌ぐ大文明が存在していた又とない証拠であり、その遥かなる「オーパーツ」と言えるものである。（証例…「ひふみ…天地の数歌」「カタカムナ古文献」「神の数学」等）（「オーパーツ」とはそれを産出した時代や文化のレベルからは到底考えられない場違いな高度の知的及び工芸的産物のこと）

あなた方、学の鼻高さんは笑うであろう、しかし、あなた方の学は単なる西洋文明のコピーに過ぎず、ただただ正しいものである、間違いのないものであると刷り込まれただけのものであり、蓋然的なものに過ぎないものと言っても過言ではない。

その証拠に自然に対して融和性というものが無く、自然と相対してもまったく会話が不能なことからも判るはずである。

要するに自然と共通する規範(ネイチャー・スタンダード)をまったく持たず独りよがりの知をもって悦に入っている状態なのである。その事実は「数」と会話を交わしてみるとよく解かる。ただし、現代数学手法で数と相対しても会話は成立しない、何故ならば現代数学における「数」の処理法、その計算法は自然の持つ「数の処理法」とまったく異なるものであるからである。ほんの少しだけ思考を変えて見るだけでよく、ほんの２～３ヶの新しい数の処理を覚えればすべてが解決するのである、それもすべて数の実証つき、すなわち、数の真実物語が一緒に提示されるものである。しかも如何なる学者でも決して反駁出来ない形をもってである。
しかしなが、誰もそのことには気がつくこともなく、ただただ自然は難しい、解明不能と溜息をつき悩んでいるのである。

私は声を大にして叫びたい、一旦古(いにしえ)の心に帰れと。すべての自然万象は古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」が封じていた古代の「天地の理」に従い、粛々と動いているのであると…。それは大いなる自然の定めであり、永劫の自然の真理法則なのである。それは如何に我々が知を揮って解こうとしても、まさに蟷螂に斧であり、いかんともし難いものである。

そろそろこのあたりで西洋科学文明からの脱却を計り、古の祝詞が語る自然に即した道を歩むべきではないのか。もし、これからの日本の将来を見据えて、そこにいささかの不安を感じるならばである。（22、3、追筆）

確か謎の書、「ひふみ神示」には「ひふみ…」は八通りの読み方があると示されているがまさにその通りである。「神の数学」では基本的な読み方は八通りであるが、それを展開させ更なる真実の道の数十通りがしずしずと現れてきるのである。
その基本になる８通りの読み方とはあなた方誰でも知っているものである、たとえ小学生あたりでさえも。しかし残念ながらその本当のあるべき事実は誰も知らない、その正しい姿、その正しい由緒由来をまったく誰も知らず、真実は隠されたままで数千年の間なおざりにされて来

たのである。だから今まで誰も開くことは叶わず、ただただ身をひそめ蟄居の状態にあったのである。

知自慢の方々よ、探すがよい。しかし申し上げておく、100年経ってもその片鱗さえも見い出すことは出来ないであろうと。

何故なら現代知ではまったく歯が立たず、ただ無常に流れて止まないだけであるからである。しかし、「神の数学」を覗けば、あなたはその事実を掴む事が出来、すべてを了解するのである。そのあたりは下にある数の内容により十分に理解でき、なるほど言う通りであり、無理もないことであるとおのずから頷ずき、合点がいくはずである。

私はかねてから申し上げている「ひふみ神示」は先触れの預言書であり、その経綸の本体はこの「神の数学」であると…。

なぜならば、「ひふみ神示」は現代の学では解けぬが「神の数学」では十分に紐解け、理解可能だからである。そこ「ひふみ神示」には記されているではないか、＜「ひふみ神示」は経綸の計画書じゃ＞、＜束ねの神は、束ねの人は後からぢや。あとから出るぞ＞、＜少しの時の早し遅しはあるなれど、いずれは神示通りに出てくるぞ＞…と。

更には、＜算盤のケタ違う算盤(計算仕組みの異なる計算)でいくらはじいても出来はせんぞ＞、＜「片輪車(現代知)でトンテントンテン、骨折り損のくたびれもうけばかり、いつまでしているぞ＞、＜学の世は済みたぞ、学者は閉口するぞ＞等々とその始末の細目さえも。

また、＜これまでは「いろは」でありたが、いよいよひ一二三の力加わるぞ＞、＜「いろは」は易しいが「一二三」は新しいから荒事もするからその覚悟致されよ＞。＜今度の戦いは神力と学力のとどめの戦いぞ、…＞。＜日本はお土(古い数の学)があがる、外国はお土（現代西洋科学）がさがる…＞、＜三千年地に潜りての経綸…＞、＜そなたは学に囚われているぞ、科学を超えて神の学に生きてくだされよ＞等々これからら起こるであろう一切のことから、我々人類のあるべきまことの結末さえも教えているのである。

「ひふみ神示」は言う、すべての自然の裏には奥義祝詞の「ひふみ…天地の数歌」が潜んでいることを知るべしと。

本来、それほど祝詞「ひふみ…天地の数歌」は偉大で古今無比の力を持つ聖なる存在であり、天地さえも左右する由緒ある言葉であったのであるが、今の今では完全に無視され、こけにされ挙句の果てには棄て去られているのである。

今の神官でさえ祝詞「一二三…天地の数歌」を奉ることも忘れ、唱えることさえもしないのであるから無理からぬことではあろう。まことに悲しい現実であり、心を裂かれるばかりのやるせない気持ちである。神示しっかり読めばわかるであろう、＜字の命(数字の本質)開くは南無「ひふみ」、「ひふみ」ぞ、神々様お喜びぞ＞…と。

しかもその由来出生、その経歴等何も知らぬ神道神官達はただただ怠惰に溺れるだけであり、一切の真実のかけらさえ訊ねようともしなかったのである。その挙句の果てが今の神、及び民から完全に見放された神道の姿であり、すぐそこまで迫っている没落の予感でもある。 ＜数学幻視考№11「ひふみ神示」より＞　（22、3　追記）

見るがいい、そこにはまたいろいろあるではないか、「神力と学力のとのいよいよの力くらべぢゃ」、「九の道(神の数学の九進法)をはよう開いてくれよ」、「ひふみの秘密出てひらき鳴る」、「学も神力ぞ。神ざぞ。学が人間の知恵と思っていると飛んでもないことになるぞ」…。「あの世とこの世を合わせて真実の世となるのぞ、あの世ばかりでも片輪、この世ばかりでも

片輪、まこと成就せんぞ。あの世とこの世は合わせ鏡…」。「今の裏のやりかたひっくり返して表のやり方にすれば、それでよいのじゃ」、「神示読めよ、ひふみ世界にうつせよ、早ううつせよ、人間の知のみでは世界はよくならん」…。「モト(母答=計算仕組み)を正さねばならん。間に合わないことになるぞ…」。「今度の御用は九の花咲かすことぢゃ、真理に九の花咲くのであるぞ…」「道開く理は九ぞ、根っこの理ぞ」「九の道は神の理ぞ」「五十になっても六十になってもひふみ(９の道)・イロハから手習いさせるぞ…」。「この道(九の道)広めて金儲けしょうとする人間たくさん出てくるから皆気つけてくれよ」。「世界中金の草鞋で探しても九九（九の道）より他判らん」、「世界の何処探しても、今では九九よりほかに、神のマコトの道知らすところ無いのざぞ」「この神示心で読みてくれよ、九エ (九の道)を出して読みてくれよ、病も治るぞ、草木も花咲くのざぞ」「やがては二二に九の花咲かすのざぞ、見事二二に九の火が鎮まって、世界を治めるのざぞ。」「九歳（１～９）は神界の元の年ぞ、神始めの年と申せよ」「三千年の昔に返すと申してあろうが、今度九の花は真理に咲かすのみぞ」「道開くは十八(九九)の極みぞ」「祝詞の心(九九)はじめの開き字にあらわれるぞ」「今開く字の理なりて、九の花の一次にドット咲く所、神代より生きし生き神引き合うぞ」「秘継ぐ数字は大神、絶対開く元神は九神の理」「五十意図初めの光り(九理)知りて、尊き御世とぞなりふる、まことの神の筆なるぞ心しめて読む時ぞ」「よろずのものひふみと満ち、つづき鳴り成る、ひらく大道、真理の出でそむ中心に、マコト動きて元津神栄ゆ、元津神は真理、真愛、大歓喜の大道ぞ」。

ちょっと見ても「神の数学」の理そのものがこのように「ひふみ神示」の中に万遍なく姿を現し、しかも、すべては覚えがあり、心に引っ掛かるものばかりなのである。何と言うことか、！！。（22、3　追記）

なかんずく私が惹かれたのは次の文言である、「千年行なってもどうにもならぬ道理じゃ、同じ山に登ったり降ったりご苦労のこと、馬鹿の散歩と申すもの。悔い改めよと申してあろう…。平面の上でいくら動いてももがいても平面行為で有限ぞ。立体に入らねばならん…。立体から複立体、複々立体と進まねばならん。一から二に、二から三にと次々に進めねばならん。進めば進むほど、始めに帰るぞ、神にいたるぞ」[天人同士の文字は数字が多いぞ、…日本の古(九)語がまことの言葉ぞ、言霊ぞ、数霊とともに弥栄ゆく仕組み」。確かに「神の数学」には平面、立体、超立体などの図の説明が飛び交い、囁き結び合っているのは誰にも判るはずである。

最初はある人に是非にと頼まれていやいやながら始めた解読であったが、この項に触れた途端に飛び上がって驚いた、何故なら、これはまさに「神の数学」の真髄にある内容そのものだったからである。それから「ひふみ神示」は常に傍らに置いている。当時古本屋で求めた「ひふみ原書」には今から七年前の平成十七年購入と書かれてある。懐かしい思い出の一コマである。（22、3　追記）

心ある者は是非学んで心の奥に止めて置いて戴きたい。それらすべては古神道の祝詞「ひふみ…」にからまる由緒のあるものであり、驚くべき宇宙普遍の哲科学を内蔵しているものである。疑いを持つ方はサンプル資料を是非手元に取り寄せて一読し確かめてみるべきである。それを知れば貴方は間違いなく椅子から転げ落ちること必定であり、いっぺんで心の持ち方が180 度変わるはずである。

それはまた、現代知を一変させる魁（さきがけ）となるものであり、「日本の知」の素晴らしさを世界に轟かすものでもある。

すべては古神道の祝詞が発信元であり、それは我々日本民族の祖達が持っていた類の無い「宇

宙自然の超真実」を遠い子孫に伝えるためのやんごとのない伝道知ともいうべきものである。すべての知は数により伝えられ、数によって語られているものである。

数が人間知以上の超知を語れるなんて、そんなことはあり得ないと宣う方々よ、是非、諸資料を一見の上、じっくりと検証し、あらためてよく考えることである。それによりすべては明らかになり、身が竦(すく)む思いがするはずである。今、どうした訳か、経済の過度期と共に**知の過度期**も出現しているのであるが誰もそのことには気がつくものはいなく、太平楽の限りである。これからは知で一歩先んずる、それが最も大切であり、必要なことでもある。それは個人はもとより、国にとっても最重要課題となるものだからである。

とにかく、今の日本人は考えることが苦手、下手である、それも暗記、記憶力が大事とした戦後の学校教育の弊害の表れであり、今の世の中では最早役にたたないことに気がついて欲しい。なぜならば、今は各自の机の上にはパソコンがあり、自由自在に世界中の現在、過去の知識を瞬時に何時でも手にすることができるからである。少しでも自分で考え纏め上げるる、そしてそれを身につけていろいろな形で応用発展させる、要するに「固定的な知識の量」よりも持てる知識をどのように活用して「新たな流動的な知」を見出し、それを増幅して形をつくりあげるか、それがこれからの主題であろう。それが今後５年、10 年後には大きな力を生み日本という国を益々発展させることになるのである。何を学んだか等は最早古いのであり、理解力ではなく、創造力が必要とされるのである。すなわち、これからは「何が出来るか」、「何が生み出せるのか」が求められることになるのは間違いないことである。

今の日本には理解型の秀才は大勢いるようであるが、、概して彼等は想像力、創造力に乏しく従って文明の発展、知の開発には余り役には立ってはいない。これはやはり社会のあり方、教育のあり方によるものであり、将来の日本にとっては大変な瑕疵となるものであろう。

そのあたりを考えると「神の数学」には人類の未だ知らない第一級の叡智、、人類の未来に役立つ「自然の知」がゴロゴロと転がっているのである。それらは人間知のように三流。五流のいかさま臭いものではなく、すべては永遠な姿を持つ超一流のものである。また、それらはただただ数を追い、洞察力を膨らませて数と語り合うことですべてを悟り、知ることが出来るものでもある。しかも、数学的には「足し算」と「引き算」さえ出来れば十分で、中学生並みの計算能力があれば十分である。ただあとは熱意とイマジネーション、そして妄想的なビジョンをどれだけ描き出せるけるかである。　**妄想とは悪いイメージに聞こえるが、それは正しくは**現実には無い生き生きとした生きた空想,超発想を意味するものである。すなわち「神の数学」は考える力、学ぼうとする意欲を引き出すためには大いに役立つものであり、一つの生涯学習につながるものである。

（2009,6,30 記載）

あなた方の誇らしい知、すなわち「現代科学知」は永遠なものではない、なぜなら、100 年もたたずに時とともにコロコロ変わってきているからである。しかし、ここにある「神の知」は永劫不変であり、それを学んだ場合不思議にも心は無限の広がりと大きな度量を得ることが出来るのである。まるでそれは宇宙の心(意識)と合い感応するかのようにである。

知識自慢の学者達に「大法螺もいい加減にせい」、「ひとの心を弄ぶな」等のお

叱りをうけそうである。確かに今のまま、すなわち現代常識世界の中では形勢不利100%は間違いない。そこで考えた、こちらはこちらで一つの「超知の世界)」、すなわち「神の数学」の世界への入場者を募り、賛同可能な御仁だけをご案内申し上げようと。そこで案内に従って心ある方々は自然の持つ真実哲理を楽しみ、かつ玄妙なる自然数の語りと共にあるフアンタジックな「数世界のロジック」を考察検証しながら大いなる感動を覚えて戴だきたいと願うのである。そこは厄い、悩み、不幸などの禍々しいものは決して立ち入りが叶わぬ「神の世界」であり、絶対無比の「神の理の領域世界」でもある。

同時にここは「神の数学」の門陣であり、関所でもある、よってここに大変易しい「神の数学」の問題を掲示し、衆覧に供することにしたい。そして、それを解いた方々だけが中に入り自由気ままに「神の数秘の花園」の探索を楽しみ、大いなる「数の囁くロジック」、そして「数の真実の叫び」を直観的に味わい、無限の感動に浸って戴くつもりである。　要するに、現代数学の熱狂的な信者には絶対に解けない、だから決して入ることは出来ないという大変論及的な難問題である。しかし、実際には他愛も無い子供にでも解ける至極簡単な問題と言ってもいいものでもあり、素直な心、共鳴する心だけがすべてを解き放ち、数の神髄にタッチ可能と言うことである。年齢、数学知の多少、専門知等は一切必要はない、ありのままの素直な心と強い熱意、そして直観があればそれでで十分である。

さあ、これらは小、中学生にはいとも容易く解ける問題である。遠慮はいらない、ずずずいと進んでお入りくだされ、！！。

大自然の歌う「真理の数の歌」、それを心で聞いてほしい。

大古神道の秘密（その１）『９の秘密』を探る。　（2010　3月　吉日上載）

<これは未だ現代人の知らぬ驚くべき叡智である。これを知らぬ限り現代文明はもはや一歩も前進はできずただ衰退あるのもであろう。まさにその運命を変えるもの、それが古神道の「数の理」である。

〔A〕「数の調べ」を正しく見る。（甚だ簡単なものであるが、現代人は未だ知らない）

これらはすべて自然法図(ｎ×ｎ)の「ひふみ…法陣表(神の法陣)」の持つ二つの対角線の数字をそのまま拾ったものである。すなわち、それは正方形では「二つの対角線の数加算(Σ)は同じ値である」が常に成り立たつと言う自然世界のスタンダードな数の表れである。しかるにその真実を知るものは未だに誰もいないのであり、そ

れゆえに自然の持つ大いなる数理の存在に辿り着くことができないのである。その事実とは「ひふみ法陣表」を例え宇宙大の広がりに展ばしてもこれは常に成り立つものであり、それにいたるまでの無限の法陣のすべてにわたって通じると言う大いなる宇宙普遍の法則なのである。それらのすべてに内在し全体を貫いているものがこの「二つの対角線上の加算数は常に同じであると」言う大いなる数式である。もっと正確に言えば「ｎ×ｎの正法陣のセルの中に祝詞「ひふみ…」の数を順に置けばいい」と言う単純な図であり、誰にでも簡単に出来るものである。それを習得すれば、自然界における真の数の在り方、計算手法の存在を知ることができ、自然の知をかいま見ることが出来ると言うものである。　しかし、悲しいかな、この自然の普遍原理を今まで人類は手にすることはできずただただ暗中模索を繰り返していただけである。そのあたりから見てもまさに古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」の功績は大であり、人類知史上において類いのない自然普遍性を持つ「数の調べ」と言えるものである。まさにそれは「ひふみ…天地の数歌」の名前通り「宇宙普遍の数の妙なる数の道」を示すものであり、現在知を大きく揺るがす古代の知の由々しき出現と言えるものである。

　これは一つの自然法則と呼んでもいいものであり、未だ人間の持つことの叶わない一つのネイチャースタンダード(自然知の羅針盤、自然規範)のサンプル的な存在である。それはまた、これまでの人間知にはまったく無かったものでもあり、恐らく確とした自然知の存在を広く世に告げるものとなるであろう。まさにそれは日本発の大叡智であり、世界に誇れるものである。　さあ、心して挑み、出来れば勝利のフアンファーレを吹き鳴らして「神の秘密」、すなわち「宇宙意識の数の仕組み業」に肉薄してもらいたい。

≪試問≫

①１次元表　②２次元表　③3次元表　④4次元表　⑥５次元表……→以下同　（自分で作ってほしい）

①１次元表	②２次元表	③3次元表	④4次元表	⑥５次元表
１	１２	１２３	１２３４	１２３４５
	３４	４５６	５６７８	６７８０１
		７８９	０１２３	２３４５６
			４５６７	７８０１２
				３４５６７

（数多の要請によるこれら詳細追補は22・10・29）

＜さあ、これを開けば世界の誰も知らない「数の理」が開くはずでり、驚くべきあまたの「神の数の業」が次々と目に入る　　はずである。＞　…参照、「神の法陣」初級、中級、上級講座の各編を、そこには息が止まるほどの珠玉の「数の秘物語」が描かれている

(初級向き一）→上記①の対角線上の数の表れは、１Σ＝１Σ＝１である。②の対角数１４Σ＝２３Σ＝５、（２次元図の対角線上の数より）　③の対角数　１５９Σ＝３５７Σ

＝6、(3次元図の対角線上の数より)　④の対角数　１６２７Σ＝４７１４Σ＝7(4次元図の対角線上の数より)、⑤の対角数１７４１７Σ＝５０４８３Σ＝2、(5次元図の対角線上の数より)。この後は6次元表、7次元表、8次元表と続き、宇宙大まで無限に延びて、真実を告げているものである。これが自然の数理であり、自然の数の計算法である。そして如何なる数学者と言えども否定は出来ないものである。さあ、ここにおける計算式とは一体…、？？。

これは人間知の作った数の列ではない、すべては自然知が醸し上げた聖なる自然数列の厳とした姿であり、その確たる存在の確証でもある。しかし、これを現代数学から見ると何も意味をなさない単なるランダムな数列にすぎず、誰も関心を持つことない数列である。

ところが、これを解き放つことにより自然の数計算の仕組の存在が明らかになるのであり、それと同時に十進法の不熟不合理の姿も分かってくるものである。夢々決して粗漏に扱わず、心して扱い真実を探すことである。そのあたりの配慮を十分にして学んでほしい。要はあなた自身の直観を信じ、もっと素直になることである。

さて、視点を変えれば大変易しい小,中学生の問題であるが、果たしてあなた方、学の鼻高さんには解けるであろうか、!？？。

(初級向き二)→⑧１１１１１１１１Σ＝８６４２０７５３Σ＝8、(8次元図より)、⑩１３５７０２４６８１Σ＝１１１１１１１１１１Σ＝1．(10次元図より)。この後は11次元、12次元、13次元…と無限に続く。

これらは決して現代数学手法では解く事が叶わないものである。これを現代数学者が解いた時は彼は現代数学を捨てた時である。

、

これでお判りであろう、自然には一切「十進法」などは通用しないことが、十進法とは人間のみに通じる人間本意の便宜的な計算法であり、本当の自然に通じる計算法とは「古代の数理」に見られる計算法なのである!!。あなた方は知らないであろうが、その「10進法」誤りの原因はその繰り上げ方に問題があるのである。そこにおける数の繰上げの時に今まで滑らかに推移していた数は突然波立ち、混乱状態に入るのである。他方、「神の数学」による計算では数は滑らか、スムースに移行して順調に幕を閉じるのである。そのような大変面白い計算検証法を「神の0数学」は持っているのである。

その始末の一切を知りたいならば「神の数学」にその検証仔細が事細かに記してあるのでそれを是非学んで貰いたい。

要するに、我々の用いている現代数学とは神ならぬ身の人間が構築したものであり、それで自然を解き放つことが可能と考えるのは甚だ傲慢な考えであったと言うことである。何と言うこと…!!。

このあたりでそろそろ目を覚ましてほしい。考えてみるがよい、自然は遥かに無限の時を超えてきた無窮の存在であり、万般の知に通じている偉大な存在であることを…。それに比べれば、瞬時の歴史しか持たぬ我々の知とはまさにちっぽけな頼りにならないものであり、吹けば飛ぶような存在であることを…。まずはその差を知ること、それがすべての始まりの第一歩になるものであり、頑迷な頭を切り替える一つのスイッチとなるものである。、今、このような「数の概念の見直し」が日本でひそかに起こっていることを知ってほしい。

私は言いたい、まずは「自然の知」の存在をしっかりと知ることである、そして

それを学び、そして自然を崇めながら常に共歩していかなければならないのである…。それが我々人類の最善最良の道であり、未来永劫の繁栄をもたらす最大の良策と言うものであろう。

これを解き放つことは、貴方の知が大いなる脱皮を行い、自然の真実に一歩近づいたことを意味するものである。

（小、中学生に告ぐ、Σは数字をすべて足し算することを表す記号である。素直に計算して、それから考えてほしい。）

…「神の法陣」初級講座№（12）より

これらを解くことにより、自然の持つ「正しい算法」が分かり、それと同時に我々のもつ「10進法」に対しての疑惑の念が湧き起こるはずでもある。　これらすべては「神の法陣」図の持つ二つの対角線上にある数の奏でる不朽な真理問題であり、一つの宇宙普遍の哲理問題とも言うべきものである。そしてそれらすべては自然の知が醸した万古不易の自然の数の答の群れであり、決して人間の手に成るものなどではない。すべては私が長い間かかって見い出したものであり、未だ人類の誰も知らないものである。

これを解き放つだけで、貴方の知は無限鏡面反射的とも言うべき状態で増殖を始め、新しい「知の世界」のフィードバック・ループとつながりを持つ可能性もあるのである。すなわちそれは、新しい知が新しい知を生み出し、それがまた新しい知を生むという連鎖的な状態に広がっていくということである。　疑うことなかれ、その真実がこの〔A〕〔B〕を解くだけで直ぐに解るはずである。

知の力にうずいている数学自慢の鼻高さんよ、果たしてあなた方はこの難関が突破できるのかな。これが本当の「宇宙普遍の数の理」であり、「神の数理」と呼ばれる至高の計算法の存在を証するものである。是非自分の手で試み、その理を明るみに出して納得してほしい。

そこには決していい加減とか誤魔化し、あるいは不整合等は一切無く、すべては秩序と調和に溢れ、希望と満足に満ちている無上至極のものである。その真実を知りたければ、この数ページあとにある「ひふみ方陣」の各図における対角線上の数(7次元図まである)を自分の目と手で拾い上げ、一つづつ検証し、間違いの無いことを確認してから始めるがよい。

そこにはこの「自然の真実の調べ」が歴然と存在して、あなた方を手招いているのが分かるであろう。検証するには一切の不足等はないものであり、検証することにより貴方は一気に「真の目覚め」に入り、脳は新たな形の蠕動を始めることになるであろう。

ついでに一つ面白いことを教えよう、これら①～⑤の＝を挟んで成立している各二つのそれぞれの数列の最初の数と最後の数を加えてみる、すると素晴らしい数の超理現象が起こり、貴方の魂を天外に飛ばし、迷える心を覚醒させてくれるのである。

〔③を例に〕（1＋7＝7＋1＝4＋4＝5＋3＝0＋8＝4＋4）！！、何と信じられない不思議な数の姿であろうか。すべてはまったく同じ手法が通用する、信じられない方は①、②、④、⑤、……→を試みて、そこにある理を納得することである。それは「神の法陣」が宇宙大に延びても一切変わることなく、永遠なる同一真理が最初(0次元)から最後（無限大次元）まで貫いていることを語るものである。

また、これらの数を反復して学ぶことにより、未だ人類の知らぬ「数の真実の姿」をあなたは手にすることが出来、同時に心地よい至福感と安堵感に満たされるはずである。それらの数を順に並べて、説明通りに展開するとそこに現れるものは！！？？。

（2010年２月再追記）

〔Ｂ〕「数の調べ」を正しく考える。（驚くべき自然知の発見につながる、それは想像を絶するものである）

さあ、〔Ａ〕の＜試問＞が無事解けたならば、それを用いて〔Ｂ〕の＜本問＞を解かなければ意味は無い、それは待っているのである。ここで０から９次元までの表を作り、その各表の「右上がりの対角線」と「右下がりの対角線」のそれぞれの数列をそのまま順序よく並べて２ヶの表を作る、子供でも出来る簡単な作業である。

そこには要するに「陰」と「陽」の表と呼ぶべきものが存在し、相互的には反作用関係にありながら対となっている不可解な存在さえあるのである。

[陰」と「陽」の本質とは、すなわち対逆的な関係であり、しかも一つのものから現れた可分的な姿であることを完全証明し、その証拠説明を行なうのが今回の目的である。ここにあるのもまさに「陰」と「陽」の仕組みを持った自然の作品図であり、決して人間の手になったものではないのは十分におわかりであろう。

さあ、この二つうちの一つの対角線の表をひっくり返し、この二つの表をドッキングさせて見るのである。すると驚くべきことにそれぞれのすべての数列の切り口は寸分も狂わずピタリと合い、完全なる連続数列の群れ、同一答の群れとなって現れてくることが解るであろう。その余りの鮮やかさ、その玄妙な手口には我々をして、ただただ狂喜乱舞させ、止まることも知らない状態にさせるのである。また、驚くことにその答の数とは**完全数の０**であり、それは同時に万象の本質は０であることを指し示しているのである。

いわば、それは次元宇宙の本質は０であるとする宇宙物理学の理論を側面から応援するものと言えるものでもあろう。

何と言う不可思議千万なことであろうか…！！、そんなことがあっていいものであろうか…！！。一つ自分の目でご判断のほどを。

現代数学的な考え方ではそれらの事実はあってはならないことであり、もし、あれば現代数学は成り立たず崩壊するだけである。

しかし、それは現実にあなたの前に完全な事実としての存在を見せているのであり、数的には何ら疑いの無いものなのである。

まさにそれは「神の図りごと」であり、「完全な意識を持った有機的な図」そのものである。何と言うことであろうか、まさに見事の一言に尽きるものであり、自然知の確たる存在を高らかに告げて、我々人類に新たな知の覚醒を促しているものである。

今まで、「陰」と「陽」との言葉はあったが、その確固たる本質の違いを示したものが果たしてあったであろうか、№である。

誰でもここに現れた答の数字をただ一目見るだけで有史以来求め続けてきた「陰」と「陽」の違いの確かな姿、その本質の因差さえも十分に理解ができるのである。今まで苦しみに苦しみぬいてきた哲学的な難問がさらりと解けるのである。何と言うこと！…。

これが一つの「神の数学」の真骨頂であり、現代数学を全く寄せ付けない「普遍数学」、「生きた数学」の本当の姿でもある。

これ一つ解くだけでよい、途端に貴方はまたとない知の徳者となるのは間違いの無いであろう。＜どうしても詳細等を知りたい方には詳細資料「神の法陣」初級講座№12（２４ページ）をお送りすること

にする＞。（但し要、80円切手５枚）　（2010年２月追記）

◎余り焦らしてもせんかたない、このあたりで一つ答を申し上げることにする。

（**2010**年**4**月吉日抄記）

断っておきたい、これらは完全なる「神の秘儀」であり、今までの学問史上には一切現れたことはないのである。たとえ如何なる大学者と言えども夢想することも出来なかったのである。要するにあなたが最初の目撃者であり、会得者なのである。

そのためにはまず循環式計算法（①循環法、②禊算、③神算法））を会得することが必要であり、不可欠なことである。

〔A〕何と、そこに現れる各次元表の対角線上のΣ数を順に置くと次のような驚くべき姿を持った循環数が現れるのである。

→（０１５６７２３４８０１５６７２３４８０１５６７２３４８０　…）循環して無限に延びる（実際は円循環）。

これは次のようにして解くのである。

０　１　５　６　７　２　３　４　８　０　……(永遠循環へ！)

∨　∨　∨　∨　∨　∨　∨　∨　∨

１　４　１　１　４　１　１　４　１　……（永遠循環へ！）（右の数から左の数を引く）

∨　∨　∨　∨　∨　∨　∨　∨

３　６　０　３　６　０　３　６　……（永遠循環へ！）

見事にここに「ひふみ九九算」の３の段が現れて真実であることを告げているのである。これが「神の数学」における真実証明法であり、すべては「ひふみ…九九算」の数列に還る自然数証明法と呼んでいるものである。

（記、０１５６７２３４８０Σ＝３６→９→０、１４１１４１１４１Σ＝18→９→０、３６０３６０３６Σ＝２７→９→０、すべて本質は０である）

≪Detail　presentation≫

●これで判るのは各次元表、すなわち０次元表、１次元表、２次元表、３次元表…は完全なる連続体、もしくは連続的な関係　にあることを証明するものである。その後の推察は各自の洞察力とインスピレーションの助けを借り自由に描いて見てほしい。

●自然の仕組みとはすべては９で分節をつくって新たに最初からの循環が始まりものであり、

その堂々巡りに終始するのである(円循環)。それはまさに古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」そのものであり、その事実を明らかにしている確固たる証拠となるものである。でも、隣の青い芝生である現代西洋科学にぞっこんな日本民族はまったくそれには気がつくことはない。
●そのいい例があなた方の知っている「元素周期律表」である。そこにあるのは１２３４５６７８と進み０で休んで、次は別な軌道に移り、また１２３４５６７８を形作る電子の美しく規律ある姿であり、律然とした自然真実の姿である。そこには中央の原子核の周りを１ヶの電子が廻っている水素を筆頭に１ヶづつ電子を追加することによりまったく異なる様々な元素が次々と生まれて、九を分節として新しい別の世界(軌道)を次々と構築しているのである。全部で 108 ヶの元素がこのようにして生まれ、自然界を創り上げているのであるが科学はその法則さえも掴んではいないのである。そこには完全なる繰り返しのパターン、すなわちすべては九で完結し、新たなる誕生を迎えている事実が示されているのでるが誰も気がつくことはない。
●そこにある自然定理とは（0＝９）である、すなわちそれは最小＝最大を示すものであり、また自然の基本は循環態であることを示しているものでもある。するとやはり、我々という生命体も輪廻転生を繰り返しながら永遠を紡ぎ完成に向かって昇華しているのであろうか、数はそう語ってやまないのであるが…!!。

〔Ｂ〕これらすべては現れるべくして現れた「図形数学」のあるべきそのままの姿である。ただ現在の我々の知では探り得ぬもの、求め得ぬだけなのである。「図形」と「数」、それは現代の言葉では「場」と「エネルギー」に相当するものであり、宇宙の時空理論には欠かせないものである。しかし、未だ科学はそれを知ることさえ出来ずただもがいているだけである。ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ発想を変えればすべては青天白日の下に姿を現すのであるが…。
（「図形数学」は自然の持つ基本的な図と自然数が奏で合う真理の調べを探究する学問、「神の数学」の独特のオリジナル手法であり、唯一の数学態である。）

これら「神の法陣図」の二つの対角線数である右下がり**(ｉ)**と左下がり**(ⅱ)**の相方（陰と陽の組み合わせ）を探して見よう。
それにより次元と言う自然の大象でさえ「陰**(♀)**」と「陽**(♂)**」が存在して合一関係を誇っているのである。何という壮大な哲学的な表れであり、自然の叙事詩の姿なのであろうか、ただ感激あるのみである。

（ｉ）右上りの対角線数　　（ⅱ）右下りの対角線数　　〔**(ｉ)** はそのまま、（ⅱ）を上下反転させてそのまま結ぶのである〕。

０次元→０　　０次元→*0*　　０＋**(**９**)＝087654321**（Σ）→**36**→９→**0**

①次元→１　　**(1)** １次元→*1*　　①＋**(**８**)＝1*11111111***（Σ）→**36→9→0**　（この場合、前の３ヶの１は１０、うしろの６ヶの１は１と数える）

②次元→**23**　　**(2)** ２ 次元→ ***41***　　②＋**(**７**)＝2*34567801***（Σ）→**36→9→0**

③次元→**357**　　**(3)** ３次元→***051***　　③＋**(**６**)＝357*024681***（Σ）→**36→0**〃

④次元→**4714**　　**(4)** ４次元→***7261***　　④＋**(**５**)＝4714*71471***（Σ）→**36→0**〃
（子供と同じ単純目線で見るべし）

⑤次元→**50483**　　**(5)** ５次元→***71471***　　⑤**+(**４**)＝50483*7261***（Σ）→**36→0**〃

⑥次元→**627384**　　**(6)** ６次元→***024681***　　⑥**+(3)＝627384*051***（Σ）→**36→0**〃　＜ちなみに全体の**(ｉ)**と**(ⅱ)**を＝で結んで計算法を見るがよい＞

⑦次元→**7417417**　　**(7)**７次元→**4567801**　　⑦＋**(2)**＝**741741*41***（Σ）→**36**→**0**〃

⑧次元→**86420753**　　**(8)**８次元→***11111111***　　⑧＋**(1)**＝**8642075*3 1***(Σ)→**36**→**0**〃　**(**すべては何となく見たような数字であろう）

⑨次元→**087654321**　　**(9)**９次元→***087654321***　　⑨＋**0**＝**087654321**（Σ）→**36**→**0**〃　●全体はまさに〔「ひふみ…算」の出現〕である

〔すべては自分の手で「次元法陣」をつくり、そこに祝詞「ひふみ…」の循環数を順に置いてから対角線数を求めたものである、小学生でも出来るものである！〕

　日本の神道では確かあの世とこの世は「合わせ鏡」であり、「表裏一体」であると説いているのである。上の表を見るがいい、一方の対角線が「表」ならば、他の対角線は「裏」であり、合わせ鏡の状態を示しているものである。まさにこの数図はそれを表すものであり、その仔細そのものをしっかり物語っている図である。そもそも「合わせ鏡」**,**「表裏一体」などと言う言葉の言い回しは日本独特のものであり、世界には類を見ないものである。…と言うことは…？！。…＜その更なる詳細は《数学幻視考》№**27** 参照＞

　また『ひふみ神示』は言う「天と地の間には大きなレンズがあって夫神と妻神が別れ別れになり、夫がこの世の神で妻が黄泉の国**(**あの世**)**の神となったと…。しかもこの夫婦神が、時めぐり来て岩戸が開かれて合い抱き給う時節が来るとも言う…。ここでしっかりと考えを廻らせば、その仔細も解かるはずである。ここにあるレンズの意味くらいは自分で探すがよい。すると天と地の間にレンズを置くと言う「ひふみ神示」の言葉と古神道の神のムスビは同一態であることが分かるはずであり、同時にまた、それは現代語の「メビュースの結び」と同一なものであることが分かってくるのである。上記の「数の語り」を参考にいろいろと考えを廻らすがよい、それにより四方、八方的に真実が見えて一つの具象考が確立されてくるはずである。

—

　なぜ正方形**(**ｎ×ｎ**)**の対角線の持つランダムに見える数字の群れからこのような驚くべき規律正しい数列の姿が現われるのであろうか、まさに日本独特の手法、日本の生んだ「数の仕組み」のまことの姿である。そこをまず考えて更なる独自の真実を見い出すべく心の赴くまま調査追究してほしい。それらにより正図形と正自然数はお互いに呼び合い、共鳴しあって自然の真理を告げ、その存在を高らかに謳い上げていることが自然自然に判ってくるのである。その事実を我々は最初に知らなければならないのいであり、それを調べることにより、そこにある因と果の確たる存在とその循環的な流れの真実を悟ることができるのである。

　それらの自然事実を解明し、一つに纏め上げたものがこの「神の数学」と呼ぶ数学体系であり、自然の数理体系を語るものである。それがすなわち「意識数学」と呼ばれる科学、哲学、神学上の真実を十分にカバーし補っても余りあるものである。

　ここにある「数の響き」と「その語り」をあなたの目と心をフルに使ってこの上

記の数表から読み取ってもらいたい。
　ただの一読ですべてを了とする者は恐らくいないはずである、何回も何回も目と手と心で繰り返し根気よく検証して初めてこの数図の真価が分かるのであり、そこにある驚くべき「数の真義」がだんだんと心に伝わって来るのである。よく考えると(ｉ)と(ⅱ)を **180** 度ねじった結び方とはメビュースの輪と同一的なものであり、自然界のメビュースの輪的な実在を謳っているものと言えるものである。何と言う驚くべき自然図の現れであろうか…。　*Oh　my　Got　!!*。
　このような不思議な出来事が現実にこの世にあっていいものなのだろうか…。まさに不可思議ドンピシャリの図である。

　そんな馬鹿なと笑う者もいるではあろう、これは単なる偶然であり、このような数図の更なる現われは決してないと嘲り笑い、誹(そし)り、罵る者もいるかも知れない。その時は改めて、もっと唖然とするほど摩訶不思議な、そして更に意味の深い驚くべき次の「神の作品」の数編をこの **HP** と言う俎板に乗せて紹介するつもりである。そもそもあなた方の誇る人間知、そんなものは自然の知、神の知に比べると砂上の楼閣同然に過ぎないものと心得るべきである。自然と反りの合わない科学知を持って何を得意然としているのか…！。そんな驕りの心等は捨ててもって学ぶべし、宇宙自然の心、そしてその繊細で高邁な超叡智の姿を。　喝　…**!!**。

≪Detail　presentation≫

◎これら（ⅱ）の表を上下逆転（レンズ）にする、その上で上記の通り(ｉ)の後部にもって行き(ｉ)と(ⅱ)を結べばすべて　その切り口はピタリと合い、一つの完全数列と化して「ひふみ…算」が現れるのである。またそのΣはすべて３６になり、一桁化して９になり０になる。何と魅惑的な完全数の姿であり、そして美しい自然の数仕組みの現れであろうか**!!**。
　まさにそれは「超数学」の姿そのものであり、意識的(有機的)な姿を持った新しい数学の姿の出現である。それにしても何と調和ある美しいメロデーの調べであり、何と言う整然とした秩序を持つ稀有な姿であろうか、ただただ感じ入り、己の知の貧しさを恥じて涙するだけである。
　そこに現われたのはまさに古神道の奥義祝詞「ひふみ…天地の数歌」の姿であり、数千年前の祖達が残した輝かしい「知の業」が昇華結晶したワン・フレーズの姿、すなわち古神道の祝詞の姿なのである。まさに、祝詞「ひふみ…」とはその名の通り大宇宙の歌(律理)であり、その真実(法則)を歌っている偉大な天地のメロデイーなのである。我々はその事実を知ればいいのである、ただそれを頭の中に置けばいいのである。ただそれだけで我々の人生は一変しすべてが自信に満ちたものに変わるのである。
◎またである、次に（ⅱ）の上下逆転の表を今度はそのまま(ｉ)の頭部に連結させる、すると

驚いたことにそれらの数は何とまたもやその二つの切り口がピタリと合って完全数列となるのである。是非そのあたりを自らの手で試み歓喜の声を上げるがよい。要するに、頭部に置いても末尾に置いてもすべての数列の切り口は不思議にもピタリと合い完全数列、すなわち「ひふみ九九算」数列が姿を現すのである。また、そのすべてのΣは３６、一桁化して９になり０になるのである。何たる不思議、**!!**。何たる妙技なのであろうか…。（注……「完全数列」とは合計して**0**　になるものである）

一体これらを通して宇宙意識（神）は我々に何を示し、なにを教えようとしているのか…？、それを真剣に考えてほしい。

現代数学ではそのような有機**(**意識ある**)**的ともいえる数仕組み等はまったく見られず、あくまで無機質のものが流れ、無機質に終わり、相互の響き、リズム等は一切見られないものである。すなわち、全体的な相互を結んでいる関係などは一切見られないと言うことである。そのあたりは日頃あなたが感じている通りであろう。

◎この完全に連結が完了した完全数列群を改めて見るがよい、あなたはそこに驚異の数の並びとその真実の語りを見い出すであろう。それはまさに厳然たる「現実の数」の姿であり、決してバーチャル的な数の現われなどではない。

①各数列を中心で二つに折り、その重なった数を加算する（対極数の加算）、するとそこにある加算答の数字はすべて同じであるという驚くべき結果を見ることが出来、唖然となるはずである。

＜例＞　（④＋**5**）の場合、<**4**+**1**><**7**+**7**>＜１＋**4**>＜４＋**1**><**7**+**7**>→すべては→　**5**、（⑤＋**4**）の場合　→<**5**+**1**><**0**+**6**><**4**+**2**><**8**+**7**><**3**+**3**>→**6**、（⑥＋**3**）の場合　→<**6**+**1**><**2**+**5**><**7**+**0**><**3**+**4**><**8**+**8**>→すべて７、すなわち現われたのは$_{567}$の連数である。このようにして、そこに現れる数は上から順に、０１２３４$_{567}$８９０と言う完全自然秩序数（ひふみ数詞）が姿を現わし、すべては正しいことを高らかに告げているのである。そのあたりの揺るぎない自然真実の醍醐味を味わうためにも是非自分の目と手で検証を進め、そこにある真実を心ゆくまで堪能してもらいたい。改めて言いたい、それはまことに簡単なものであり、小学生でも十分に計算及び理解可能なものであると…。

②ここに現れた連結数表の縦に並ぶ数を見てほしい。左から見て最初の数は**0123456780**であり、**2** 番目の数 **8135702468**、**3** 番目の数は **7147147147**、**4** 番目は **6150483726**、……とすべては上記の「ひふみ九九算」の数列そのものが下から逆に上に向かって並んでいることが分かるであろう。すべての数列は輪をなしている循環体と考えればいいのである。何と美しい数学的ハーモニーを持った数の関係であろうか！**!**。何と言うメロデックな数の並びとその交わりの感動の姿であろうか、！！。まさに愕然となり、声も出ない**!**。そこにある自然の本能的な表れの持つ深い意味とは…？。この不思議な数のメグリ合わせの「驚くべき物語」の示すこの構図の意味とは、**!!**。このすべてを知り、常に心で反芻するがよい。そうすることによりあなたは世界一の果報者として生涯心豊かに過ごすことが出来、かつ一切の邪は決して寄ってくることはないであろう。

◎また、〔**A**〕で現れたΣ数は＜右上がり＞、＜右下がり＞共に　**0** は **0**、①は **1**、②は **5**、③は **6**、④は **7**、⑤は **2**、⑥は **3**、　⑦は **4**、⑧は **8**、⑨は **0**　であり、（ｉ）も（ii）もまったく同じ数字が出現する。前と同様に片方を上下逆転させてつなぐ**(**メビュース的構造体**)**と、<**0**+**0**><**1**+**8**><**5**+**4**><**6**+**3**><**7**+**2**><**2**+**7**><**3**+**6**><**4**+**5**><**8**+**1**><**0**+**0**>となり、すべては９のみの数列と化し、０になる不可思議な数の仕組みをもっていることが判明する。　**(**「ひふみ神示」にもあるではないか、＜ケ**(**９**)**であるぞ、レ**(**０**)**であるぞ、ホ**(**本当**)**であるぞ

＞と、!。
◎それを数字で表せば０９９９９９９９９０９９９９９９９９０…となり、まさに「ひふみ神示」の言う真理の「九の花」が咲いた状態となるのである。このように「神の数学」の中は常に九の花で賑わい、九の満飾そのものと化して空、無に帰すことによりすべてが弥栄となるのである。一体、これは何を示唆し、何を教えようとしているのであろうか？。
◎次は上記の表、すなわち(ｉ)と(ⅱ)の反転連結(レンズ)した完成表の各縦列を加算して観るがいい、何とそこには再び驚くべき数が姿を現わし我々を唸らせるのである。すなわち、そこには左から、**45(0),44,43,42,41,40,39,38,37** の順数が見事な形で現れすべてを締めくくり、一つの完結を告げているのである。何故なら、それらの数を一桁化するとそこには **0,8,7,6,5,4,3,2,1** の「ひふみ数詞」が現れて我々を歓喜に導き、ジ・エンドを告げるのである。何たることか！。誰が一体このような驚くべき「数の秘儀」をつくり上げ、永遠なるものとして謳いあげているのであろうか。まさに、融通無碍の世界であり、無上涅槃の世界である。これらすべては大宇宙の創造主、すなわち『神』の緻密な心の作品であり、その「聖なる構図」と言ってもいいものであろう。すべては自然哲学の原母体であり、その雛形とも言っても何ら差し支えはないものである。我々はそこから必要なものを見出して学ぶ、それが今最も必要なことであり、やらなければならないことである。
◎直観に優れている方は気がついたであろう。最後に現れた数列はすべて「ひふみ…九九算」の中の数であり、その各数列であることを。ただし、**417** と **741** の数列関係は「神のヴェール」が掛けられているのですべてから１を引く、すると **306** と **630** になり、普段の「ひふみ九九算」の形に戻るのである。　＜「神のヴェール」についての詳細は「神の法陣」上級講座（**4**）参照してほしい。＞
◎あなた方は問うであろう、本当に大自然は知を持っているのか、宇宙意識(神)は本当にあるのかと、今まで誰もそれには答えた者はいない。しかし、あなた方の前にあるこれらの問題を本気で解こうとするならばその答は直ぐに見つかるはずである。例えば上記の(ｉ)(ⅱ)の場合、そこにある対角線上の数字の取り方の方向を一歩でも間違えばすべては水泡に帰し、混乱が始まるだけである。すなわちそこにある何千、何万、何億の「神の法陣」の二つの対角線の取り方には一定のルールと規律が厳として存在すると言うことである。一つの対角線を右下がりに取り、もう一つを左下がりに取った場合、残る無限に伸びる膨大な数の「神の法陣」もまったく同様な方法で処理しなければならない、さもなければすべては無残な結果に終わり終止符をうつだけである。例えたった一つでも取り方の方向が少しでも違えばすべてに影響を与えて混乱が生じるだけである。それはすなわち、すべては確たる意図をもって創られた有機的な存在であり、かつ数によりしっかりと管理されているものであると言う何よりの証拠である。この教訓は十分に人生に生かせるはずである。
（「神の法陣」初級講座（１２）にはこれ以上の恐るべき「神の秘密」が開示され、その答が恭しく鎮座している。それはまさに驚嘆の逸品である。是非、あなたの直観と洞察力を駆使して、それを検証し、更にはその奥へと踏み入ってもらいたい。果たして何が現れてあなたに「秘かなる真実の理」を囁やきかけるのであろうか？。）

　お解かりであろうか、数はすべてを知り、それを教えてくれるのである。これらは人間の知(現代数学)より遥かに簡単であるが、実際は大いなる数の玄理に富んだ非常に厳しく、威厳に富んだものである、決してあなどり安易に扱うことは謹んでほしい。すべては自然の真実を告げながら同時に宇宙普遍の真実の「数の理」の存在を示し、大いなる自然の真理法則を巧妙に数で描き上げているものである。まさに今行き詰まっている数物理、哲学、神学界等の求めている真実探索の材料としてまさに格好のものであろう。また、これらを順次辿って行くことに

より「新しい知の世界」の存在を知り、その扉を叩くことが可能になるのでもある。時間などはいくらかかってもいいではないか、自分自身の将来のための試金石としてこれらの検証を是非試みるがよい。　あなたのため、未来の為に。**Open　sesame　!!　(開け　ゴマ)**

　これらはまた現代の数学者達にとっては青天の霹靂であり、気も狂わんばかりの情けなさと焦りを覚えるものであろう。そしてとどのつまりはいつもの通り、ただただ不問、不介入を決め込み、無視するだけになるのである。

すべては万古不易の「数の物語」であり、宇宙普遍の「数の囁き」である。また、すべては未だ人間の見ぬ叡智の数々である。　　「神の法陣」初級講座（**12**）より

　上記の例題は「神の法陣」初級講座（12）から転載したほんの一例であり、「神の数学」の中にはこれ以上のものが何段にも重なって数十、数百と転がっているのである。すべては人知的にはノーベル賞級、いやそれ以上の自然数理の知られざる逸品ばかりであり、自然知の珠玉の宝庫と言ってもいいものである。例えば、この「神の法陣」初級講座（12）の中にはまだ数多の驚くべき超知が展示され、訪れる者を待っている事実を知ってほしい。そこには「神」の確たる存在証拠とその偉大なる合理性そのものを驚くべき方法で数が開示しているのである。それらはまさに唖然とするものであり、なぜこんなことが今まで判らなかったのであろうかと頭を抱えて宙を舞うことは必然である。

　その真実の答は誰でも、何処でも、何時でも簡単に自分の手で検証できる、すなわち、自己検証が可能なものである。是非そのあたりを楽しみながらじっくりと考え、新たな真実の心を芽生えさせてほしい**.**　要するに意気込み、熱意がものを言うのである、決して学力の有無、知能のよしあしなどではない。

　残念ながら、現代の秀逸と言われる学者達はその知をまったく知らず、想像すら出来ないものである。

　だから現在の段階では決して認められることはないものであり、忌避することは間違いないであろう。そのあたりは十分に知っていてほしい。

　それでいいではないか、ただただ自然の中に一人溶け込み、自然を相手に嬉々とした会話を楽しみ,そして自然の真実を知る。このような大歓喜に包まれた素晴らしい世界に立ち入った果報者が果たして今までにいたであろうか！。それはまさに極楽涅槃の境地であり、尽きぬ知の醍醐味の大いなる世界に遊んでいる幸せな弥栄の境地と言えるものである。やさかましませ、いやさかましませ!!。

　≪天の筆、『九の神』、やさかましませ、いやさかましませ、一二三四五六七八九で足りるのであるぞ…≫「ひふみ神示」より。＞

　*＜そのうちに上記問題が教えようとしている宇宙自然屈指の大原理、大摂理、すなわち、長い間人間知が常に求めて止まなかった**これらの永遠の答**をここに上載するつもりである、但し、大勢の人々の要求があり、気分が乗れば話である。それまで出来る限り自分の知と洞察力を用いて自分なりの答を見つけ出してほしい。「求めよ、さらば開かれん」、「一心岩も通す」の気概を常にもつことが何より大切なことを忘れないでほしい＞。*

（上の問題は「ひふみ神示」黄金の巻き９１帖にある「知の人間は広く進むぞ、タテとヨコでであるぞ、二つが織りなされ結んで弥栄になる仕組み」を指すものである）

（2010 年 4 月吉日抄記）

大古神道の秘密（その 2）『中心の秘密』を探る。　（2010 5 月吉日上載）

（これもやはり現代知にはまだ無い偉大なる叡智である。これを獲得しない限り普遍真理は一切ヴェールの向こうである）

『神の数学』5 月の記≪天地の歌「中心」≫、その(1)

（2010　5 月吉日上載）

　確か「ひふみ神示」には中心に関するものがもっとあったような気がするが、探しても分らん、誰か教えてほしい。
「宇宙普遍の真実」を理解するには「中心の秘密」を知らずしては絶対的に不可能である。悲しいことに、現代人の誰一人として「中心の真実」を知っている者はいないのが現実である。また、歴史上の有名な大知者、哲学者、宗教家の誰もそれに言及している者はまったくいないのも甚だ淋しい限りである。これほど大事な自然の真実知を人類は持たなかったとは何たる不幸なことであり、面妖不可解なことである。それで万物の霊長、自然の守護者と威張っているのはまことに片腹痛しである。　まさにそれだけで低次元的な知的存在であり、揺籃知の持ち主以外の何者でもないと言わざるを得ない、ただただ呆れ果て身がすくむだけであり、赤顔の至りと言うべきものである。
　中心はまことに偉大で、畏敬すべき存在、変幻自在、変幻有在の大いなる存在であり、まさに「神の業」そのものである。しかし、科学は神を認めてはいない、だから当然、中心の概念とは「ものには中心は１ヶ」だけと言う程度の簡単にして幼稚なものでしかないのである。敢て言えば知的にはまだまだ自然知には及ばないものであり、揺籃知の状態と言えるものである。
　要するにあなた方の誇って止まない現代知とはその程度の甚だ低いレベルのものであり、普遍的な真実とは程遠いものと言うことである。本当は中心と言うものは必要に応じて 2 ヶ、3 ヶ。4 ヶと自在に変化し、相手と響き合い、調和するものである。それにより調和と秩序が成り立ち、永遠性の保持が出来るものなのである。それらを知ることによ初めて本当の相手を思う愛、すなわち「宇宙愛」の存在とその真実相の理解が出来るものであり、かつ心にゆったりとした余裕が持てるものである。そのあたりのことを数はしっかり手を取り、足を取りして教えているのである。しかも、どのような大学者、哲学者でもグーの音もでないほど数による巧みな論理と完全なる数による検証法を用いてである。

　例えば、ここに物が 3 ヶある、それを 2 等分した答はいくつか、我々の計算では一つと半分が正解である。しかしそれでは駄目なのであり、不正解と言うものであ

る。本来のあるべき宇宙普遍の完全なる計算答、本当の普遍答と言うものは別にあるのである。
　それはもっと慈悲と愛のこもったものであり、我々の心に大いなる感動と永遠なる安らぎを与えて止まないものである。
　私もそれを知ってから十数年になるが、今でもその感動の強烈さは忘れられず、感涙して頬を濡らす時が今でもしばしばある。そこ、中心には神業的な大いなる仕組みが存在し、それは「宇宙愛」的な仕組みを持つ完全なものであり、それによりすべては調和の態に入っていくのである。その見事な仕組みの姿にはただただ心をうたれ、うなだれるだけである。
　あなた方は疑うであろう、が無理も無い、答を知れば万人が万人深い感動に包まれ成る程と頷けるものであり、簡単ではあるが恐らく反論する者もいないほどの完全な哲理体系とその完全な理論を中に秘めていることが分かるであろう！。
　この「宇宙愛」、何とその事実をすべての数がこぞって囁き、そして謳っていることを知ってほしい。その事実はまことに有無を言わせぬほど壮観であり、その確かさをしっかり裏付けているものでもある。またそれがあるから「神の数学」の計算は成り立つのであり、自然万象の理を自在に説明できるのである。改めて言いたい、人間知にはその基本概念が欠けているので真実を見ることも、紐解くことも叶わないのである。またそれを知らないがゆえに争いや戦争などが起きて人間同士で損ない合っているのである。何ともの悲しいことであり、心の痛むことであろうか…！、それらのすべては「宇宙愛」と言う概念の欠如にあると言っても決して過言ではないものである。
　疑う方は尋ねるがよい、その上で一度該当資料に目を通すことである。それにより、すべては一瞬にして氷解し心は慈愛に満ち溢れ、世の中を見る目が直ちに一変し、心は安堵に満ちるはずである。それほど簡単な、そして強烈極まりの無い「宇宙普遍の理」、すなわち「宇宙愛」を人類は今まで持たなかった、それは一つの大きな悲劇であり、大いなる損失と言えるものである。

「現代数学」は直線数学、すなわち０と∞の間の数学であり、０と∞は含まないものである。だから０と∞は判らないし、その向うの世界は判らないのである。だから、それを超えた向うの世界には意識を飛ばせず、探り出すことも出来ないのである。それが西洋科学文明の宿命と言うものであろう…。何と悲しい現実を背負っているものであろうか。
　それに比べれば日本発の『神の数学』は循環数学であり、０と∞の理を持つものである。だからそれはその向うにある「もう一つの世界」の仔細を見い出すことも可能であり、その検証も出来るものである。なぜならば、それは「意識数学」であり、自然宇宙の本当の数仕組みを包蔵している新しい数学体系の姿であるからである。
　＜真実の分割方法及び宇宙愛の詳細は「超数学」講座№**9** 参照のこと＞
　ここまで読んだあなた方は最早「中心の法則」の初歩的な存在を知らず知らずに学んでいるのである。それを示そう。

≪Detail　presentation≫

①対角線は中心に位置するものであり、中心(神)だから不可思議な理業を使ことが可能なのである。それがすなわち、「『神の法陣』の二つの対角線上の数の和は合い等しい」と言う人類がまったく知らない自然の大理なのである。

②上記（A）の答の数列 0156723480 の中心から対極的な場の数を加算する（中心から折り曲げる）、するとすべて９と言う同一数が現れ、この数列の本質は 0 であることを教えてくれるのである。試みるがよい。

③（B）の「ひふみ九九算」の持つ横に並ぶ 10 ヶの数列、やはり中心で折り曲げて加算するとそこにはすべて同一数が現れる。そこに現れる同一数とは上から順に、0123456780 と言う完全自然秩序数の群れ（ひふみ九九算 2 番目の数）である。

④（B）の「ひふみ九九算」の縦列の数を見てほしい、そこにあるの最初の数は 0123456780Σで一桁化して 0、次は 8135702468Σで一桁化して 7 であり、3 番目は 7147147137 で一桁化して 5、…と続いている。それらのすべての数列を中心から折り返すとまたもや同一数が現れる。その数とは左から順に 0753186420 であり、「ひふみ…九九算」3 番めの数である。このようにすべては織物のように前後、左右、右左斜めのすべてに自然の序がある、すなわち構成要素が互いに調和している自己調和と言う形をとっているのである。そのあたりを何回も手と目で確かめ、その上で反芻して学んでもらいたい。

⑤すべては中心が関わりすべての手綱を取っているのであり、すべては中心の起こす奇跡の物語である。だから私は中心は偉大であり、『神』の鎮座する魔法の場であると申し上げているのである。例えば、宇宙物理学の極致と言われる時空の問題、すなわちエネルギーと空間の間にはある一定の法則が有るのであるが、それが未だに科学では解明不能であり、学者達は頭を抱えている現在である。しかし、中心の秘密を知る「神の数学」はあっさりとその法則を見出し、教えてくれるのである。

⑥一つあなた方に尋ねたい、ここにそれぞれの一辺が 3×3 の正方図がある、そこにできるセル(小さい四角)の数は何個あるのか、答えてほしい。　答が 3×3=9 では甚だ次元の低い平面的な答であり、真実を突くことは出来ないと言わなければならない。　宇宙自然の基本真実にそぐわない我々の持つ現代知などではとても答は出せない、もっと深遠な真実叡智、すなわち、宇宙の普遍叡智をもって考えてはじめて答が求められるのである。そこにはどうしても平面立体的な考えが必要であり、それに順じた数の計算でなければ本当の真実は見えては来ないのである。要するに、今の平面数の取り方そのものに間違いがあると言うことである。

　日本の超古代には天津金木(あまつかなぎ)という宇宙の普遍叡智を立体的に諭し、

導くための道具が有り万象の心を解き明かしたようであるが、いまでは名前だけが残され、誰もその内容細目を知る者はいない。要するに、平面的な考えでは駄目であり、平面立体的(?)に考えなければ本当の答は出ては来ない。特に中心については平面立体的な考え、すなわち、天津金木と同様な天と地、あるいは陰と陽と言う２次的、３次的な考察がどうしても必要であり、不可欠である。残念ながら、現代知には平面とか立体とかの用語はあっても平面立体という言葉等は何も無い。ましてやその概念さえもまったく無いのである。

その平面立体的な概念を用いることにより破天荒な驚くべき答、現代科学も知らない見事な物理学上の時空計算のあり方さえもしっかり紐解かれ、万象が見事に治まってすべては完となるのである。何も難しいものではない、難しくしているのは現代の科学知であり、学者達のゆがんだ考え方なのである。要するに、人間の知は宇宙普遍的な真実理に立脚したもの、すなわち、「自然規範」の沿ったもの等は何も持たず自分達の知を重ね上げたもの、それが科学知として巾をきかせているのである。しかも、それをもって自然と会話しようと試みようとしているのである。それでは当然噛み合うはずはなく、会話の不成立は当然である。しの結果、目の前に転がっている自然の真理は大変単純ではあるが不可思議さに満ち溢れていることにも気がつかず、ただただ自然は難解、複雑との思いに駆られて己を損ない、挙句の果てには曖昧模糊な言葉である複雑系とかカオス(混沌)等の言葉で人々を欺瞞し、何とか納得させようとしているのである。そのあたりはこの「神の数学」を学んでいるとだんだん分かってくるはずである。なぜなら、数がすべてを囁き教えてくれるからである。（そのあたりのことを完全把握し、答を導き出すには中学生の理解力と小学生並みの計算力があれば十分である）。＜詳細については「真実の数理」№9、及び「「神の法陣」初級講座№6 参照のこと＞

……(6 月の記載へつづく)

◆　＜どんな大きな世界でも、小さい世界でも悉く中心に統一せられているのざぞ…＞

◆　＜神に抱かれたそなたは、平面から立体のそなたになるぞ、有限から無限になるぞ、神人となるのじや＞

◆　＜平面の上でいくら働いても、もがいても平面行為で有限ぞ、立体にはいらねばならん＞

以上「ひふみ神示」より。

『神の数学』6 月の記≪天地の歌「中心」≫その(2)

（2010　6 月吉日上載）

さあ、今月は更なる「中心の秘密」に迫って見ることにしょう。先月「宇宙愛」と言う言葉を記したが、多くの方々から「自然にはそんなロマンテックな意思があるのか」とか「そんな有機的な心をもっているはずがない」等甚だ否定気味の言葉を戴いた。やはり、現代人の意識はまだ低いと少々落胆し、悲しい思いをしていると

ころである。まあ、それも現代の教育や一般常識にあっては止むを得ないものかも知れない。でも私としては大変不満足である、せめて数人くらいは検算と実証を重ね、大変面白いとお褒めの言葉くらいはあるのではないかと期待はしていたが、それは一人もいなかったと言う淋しい結果に終わった。するとやはり超古代の日本民族知者の血を引いて直観的にことを判じ、そして血がわななく思いをする者はもはや皆無なのであろうか、いやそんなことはない、少なくとも日本全人口の**1～2**%くらいはいるはずと今心を取り直している最中である。

更なる説明を続けよう、今の我々の分割概念とは、例えば**3**ヶのものを二人で分ける場合、１ヶを二つに分けてそれぞれ１ヶ半の所有、それが正解である。宇宙意識（神）の分割はそうではない。何故なら、１ヶを半分に分割するのは一つの破壊であり、忌むべきものだからである。それは秩序や調和を乱す行為であり、宇宙意識の本義に反する行為そのものなのである。それゆえに破壊分割よりもっと賢明な方法、すなわち「ダブル処理」手法を行なうことにより、破壊を避け、調和とバランスを守りながら秩序のある調和世界を保っことを主眼としているのである。まさにこれは理に叶った公平なものであり、永遠な法でもある。「神の数学」の基本原理はこれに基づくものであり、常にそうである。まさに自然と共鳴し、その本質を謳っているものである。そのすべては数が教えてくれるのである。<u>＜真実の分割方法及び宇宙愛の詳細は「超数学」講座№**9**参照のこと＞</u>

いかがであろうか、自然は破壊と言う「人間的な考え方」とは異なり、「ダブル処理」と言う破壊を伴なうこと無しに公明公平を保ち、しかもその上、秩序と調和を崩すことなくすべてをまっとうして永遠につなぐ法があるのである。これがすなわち「宇宙愛」と呼ばれる究極の愛である。これを是非とも学び取り、あなたの心に置いてもらいたい。それにより、あなたの心は角が無く丸くなり、愛を灯し始めるのである。今、世界にとって最も必要なのはこの「宇宙愛」、すなわち「愛の心の真実」である。

この真実知の存在を我々はどうあっても知るべきであり、心に置いて生きるべきである。

この「宇宙愛」と言う破壊の無い共有行為に似たものは古くから日本人の心の中にあり、それが「和の心」と言われて大切にされて来たものである。それが明治以来の西欧化、特に終戦後のアメリカからの個人主義や自己中心主義（人は人、自分は自分）、或いは排他主義と言う風潮に染まるにつれてこの「宇宙愛」的な和の精神は失われてしまったのである。

悲しいことに、今では近隣関係、隣人関係、果てには親子関係までが希薄になり、切断されつつある有様である。要するにこのアメリカ的な生き方とは「公平と言う名の下の割るきった破壊的分割」であり、対する日本の生き方は「自然や他人との共生、共有の形をとった共有分割」、すなわち「宇宙愛」の心であり、大自然に即した本当の「自然の理の道」と言うものである。

これについての数による検証はそれこそ無尽蔵にあり、すべてが同一の答を持って真実を教えようとしているのである。これは誰にでも簡単に実証でき、習得出来ることを知ってほしい、あなたはそれについて少しばかり学ぶだけでいいのである、それだけですべてを知ることが可能なのである。何故ならすべては循環の姿を見せ

ながら、繰り返えされている事実を数がしっかりと教えてくれるからである。もう一度言いたい、自然の心とは単純で易しいもの、そして素直で美しい形をもって直観に訴えながら響くものである。例えば、我々が対称形の建物や自然の結晶体に対して美しいと感じ、心がやすまるように…**!**。

今の科学は自然の見かけに騙されて複雑とか混沌などの言葉で飾り幕引きを図っているようであるが、それは本質を知ることが出来ず、見い出す術さえも知らないゆえの最後のあがきである。「神の数学」、それは本質を見い出すための自然の知の解読学であり、その本質を知り得る唯一の手法である。今、現代数学は行き詰まっているようであり、新しい発見等は一切見られない。恐らく終焉に近い状態であろう。しかし、本当のあるべき「真実の宇宙普遍の数の表れ」の諸般はこれから始まりのであり、これから未来へとつながって行くことになるものである。…「神の法陣」上級講座（**10**）より

これらは一般巷**(**ちまた**)**に有るような人間知と人間知との馴れ合いの競合的な問題解法やゲーム的なまやかしの類などでは無く、有るべき真の「神の知」そのものに挑んでいるのであり、それを解き放とうとするものである。何十億年もかけて創り上げた偉大なる神の知、誰も解くことが叶わぬかった「永遠の神の知」を相手に、はかない蜉蝣**(**かげろう**)**的な存在が果敢にも迫り、その領域に入ろうとしているのである。人は笑い、嘲るかも知れない、しかし少しでも本当の自然の理に迫り、それを習得応用して知を進めない限り、もはや明日は無いと考えなければならない。今の人間知の延長のままではもう限界であろう、それはこの **10** 年来の世界の仔細を見れば十分に判断がつくはずである。

それにしても、正しい真実も知らずに、自然に挑もうとしている現代西洋科学の無謀さにはただただ感心し、杞憂を覚えながらも感心があるのは否めない。よくぞここまで来たと、が最早限界であり、これ以上進むことは自らを滅ぼす自縄自縛の羽目に陥るだけであると…。

これは人類の運命を賭けた人類の最初で最後の知の挑戦となるものである。果たして結末の行方は、？。我々は何時まで笑っていられるのであろうか…、**??**。

私は今、大変苦しんでいる、なぜならば、これら中心の細目仔細を数と図を用いて説明すれば、それはそれだけで計算や検証に通じ、簡単に委細説明は終わり、納得が可能となる真実が浮かび上がってくるのであるが、**HP** の性質上、或いは私の技術不足がたたりそれが出来ないのである。ゆえに悲しいかな、言葉中心の説明に終始しなければならなかったのである。大変心苦しい限りである。陳謝！。

しかし、現在の正しい方向性を見失っている人間知の状態を考えて見ると泣き言

を言っているだけでは済まされない状況である、何とかHP上の表現方法を考えて見るつもりではいる。<その実際の実践的な計算、及びその説明は「神の法陣」上級講座(2)(3)(11)を参照してほしい。>、<また中心についての詳細説明は「超数学」(９)、「神の法陣」上級講座(10)にあるので、是非一読して戴きたい。>すべては明確詳細に記されている、ここではどうしても筆不足が生じるので、そちらを是非見て戴きたい。

『神の数学』7月の記≪天地の歌「中心」≫、その(3)

(2010　7月吉日上載)

「中心」とは自然万物の持つ摩訶不思議な存在ではあるが、しかし誰も気にも止めず、考えようともしない。しかし、中心を制するものは自然の秘密を得ることが出来ることを知ってほしい。たとえば、宇宙の成り立ちの秘密さえもである。現在の宇宙の創成論の主流にあるのはビックバン宇宙論である、それは宇宙の最初期の状態、とてつもなく高い密度と温度の状態により中心が大爆発を起こし大きく広がって現在の宇宙が誕生したと言う説であり、すべては中心から始まったとするものである。しかし、今ではそれに対して異を唱える学者が多く、現在ではいろいろな宇宙誕生論が提唱されている。

日本の古神道にもそのあたりの理論、すなわち宇宙創成論を描き、数ではっきりと検証しているものがあるが、誰も知る者もいない。それが祝詞「ひふみ…天地の数歌」であり、それを支えている数の序である。本来、そこにある天地とは宇宙であり、数歌とは数を用いて説明している普遍言葉であり、真実言葉とも言う意味を持つ重大な由緒をもつものである。

すべては「ひふみ…天地の数歌」、すなわち、０１２３４５６７８９(０)の10ヶの数が歌う宇宙の誕生と言う厳かな創成物語であり、数の語る壮大な叙事詩でもあるのである。まず、そもそもここにある最初の宇宙の動きとは広大無辺な外側から静かに始まり、求心的に外側から中心へと向かって収縮的に動きが進み、その結果、最後に究極点(中心)に至って突然表裏の反転が始まったことを示しているものである。現代の宇宙物理学ではそれを称して「神の一撃があった」とだけしか言わない。

それを数字で示そう、ここに０,１,２,３,４,５,６,７,８,０がある。両外(両サイド)から内(中心)に向かって、求心的に…００,１８,２７,３６,４５,…と向かい、最後に中心という極限状態（特異点）に至って、突然表から裏へと反転(エネルギー流の逆転)が始まり、今度は内側から外側へと遠心的に膨張が広がっていくのである。その反

転作用は４５の反転の５４から始まって→６３,７２,８１と進み、外側の特異点である出発点の００に戻るのである。それらが連鎖的につながっていることは次の数の表れを見ればよく分かるはずである(数列の **00** を重ねて循環輪をつくるのである)。<反転とは４５→５４、３６→６３であり、逆向きの形になることである>。

それがすなわち、００,１８,２７,３６,４５,５４,６３,７２,８１,００、と循環的に流れて止まないエネルギー流転の姿であり、それはまさに連続数の循環の姿でもある。察するに恐らく、現代科学の信者はあきれ果てて、軽侮のまなざしで見下げているではあろう、また、素直な達眼の持ち主は驚愕のあまり我を忘れて天に舞い上がるであろう。なぜならば、これらの各対の数の加算はすべて９、すなわち本質０となり、虚に還り、初発に戻ると言う大いなる「神の仕組」を示す真実象の存在を知るからである。これが神道の言葉にある「表裏一体」の世界であり、〝顕と幽〟、〝見える世界〟と〝見えない世界〟、〝生と死〟等を指し示しているものである。　これは数に教えられたものであり、その雛形になるものが「ひふみ…天地の数歌」の本文とも言うべき「ひふみ九九算表」にしっかりと数で描かれ、真実を叫んでいることを知ってほしい。同時に是非それを自分の目と手でじっくりと検証し納得してもらいたい、それによりこれらの不思議な「数のあやなす物語」が分かり、新しい知の発見に心が躍るはずである。そのあたりから判断すると祝詞「ひふみ…天地の数歌」とは遥かなる古代の遺物知,すなわち知のオーパーツとも言うべきものである。なぜなら、それに従って数を組み立てていくと諸々の自然の真理が顔を覗かせるからである。　また、かのアインシタインも「共変ベクトル」と「反変ベクトル」と言う言葉で説明しているものも同じものさえも出現するのである、それは『すべての時空にはこの両者が重なり合い、不動の絶対と無を生じている』と述べている言葉である。それは単に彼の理論としてあるだけであり、決して実証は不可能なものと言われている。ところが驚くことに古神道の祝詞である「ひふみ…天地の数歌」の本体である「「ひふみ九九算表」にはその次第がはっきりと数で描かれ、はっきりとした「数の仕組み」でもって示されているのである。それは一目で誰にでも解かる簡単なものである。

また、あなたが表裏の反転などは妄想の産物でしかないと言うならば、最近の量子理論を何と見ているのか、そこには次のようなことが記されている、「物理学が広い意味でのローレンッ変換に対して不変、すなわち対称であるとすれば、空間反転、および時間反転に対しても対称性が成り立つはずである」と…。要するに反転したものは反転する前の姿と対称的なもの、すなわち反転軸にたいしてお互いが対称的な形になって成立すると言うことである。

この宇宙創成を表す不可思議な数列―００,１８,２７,３６,４５,｜５４,６３,７２,８１,００、をもう一度とくと見るがいい。

①　前から見ても後ろから辿ってもまったく同じ数列であり、等差はすべて９(０)

と言う摩訶不思議な形を持つ形而上的な姿を持っていることが分かるであろう。
②　それを中心で折り返すと完全なる鏡面対称の姿が現われると言う再度不思議な形を見せているものでもある。

③　また、鏡面対称とは中心を挟んで対称位置にある場は完全な逆相、すなわち(＋)と(－)の関係にあることを謳っているものでもある。それによりすべては０になるからである。(54+45=63+36=72+27=81+18=00+00=0)

　よく見るがよい、ここにある「ひふみ…天地の数歌」の姿はまさに古事記にある高天原に成りませる神の「天の御中主」そのものであり、それに従う「タカミムスビの神」と「カミムスビの神」そのものである。その「天の御中主」の名前をしかと見るがいい、「天」,「中」,「主」の鏡面文字が一斉に声を上げて何事かを囁き、示そうとしているではないか…。これらの文字には必ず中心があつて、中心性を重んじ、中心の大切さを知るべしと説いているのであるが、それが分かるであろうか。

　また、その中心軸、すなわち数列の真ん中に隠り身(見えない)の神、すなわち『天の御中主の神』が存在し、それを挟んで「カミムスビ」、「タカミムスビ」と言う「陰」と「陽」の二神が配置されている…。それが大宇宙を創り上げている神々の姿であると「古神道」の言葉はいみじくも言っているのである。しかし、そんなことは今の日本人の誰も知らない、知ろうともしない。悲しいことに。＜詳細例は「神の法陣」上級講座（12）に数多あり、参照のほどを＞

　また、古事記における「天の御中主(宇宙)」の発現の際の言葉は「成った」である、つまり「成った」と言う言葉は将棋の駒が表から裏に反転する場合に用いられる日本独特の言い回しであり、他には類を見ないものである。何と言うことか…!!、何だろうこの日本の国の不思議とそこに住む人々の古いものに対する曖昧さは…??。まさに他民族のそれ,すなわち目である。出来れば触りたくない、無視したい、捨て去りたいとの思いが渦巻いているのである。はて、さてどう扱うべきなのであろうか…??。

　更に不思議なのはこの数体系は何と、アメリカで墜落した「空飛ぶ円盤」の中から発見された「数の仕組」そのもの、すなわち「九の倍数体系(システム　オブ　ナインズ）と呼ばれているものであると言うことも付け加えたい。　古神道、アインシタイン、宇宙人の数体系、この三者に共通する「神の数学」の存在、これらを結ぶラインが現時点において阿吽の呼吸で揃って現われているのである。これは一体何を意味す

るものであろうか…、!!、??。　誰か答えてほしい…!!。

＜詳細参照「真理講座」(4)、「真実の数理」(４)、「数学幻視考」古神道（5）＞

『神の数学』8 月の記≪天地の歌「中心」≫、その(4)

（2010　8 月

（余りにも暑いので涼しげな書体に変えて）上載）

「7 月の歌」の中で高天原に成りませる初発の神「天の御中主」を中心性をもった聖なる「見えない大神」と紹介したが、続けてそれに従う「タカミムスビ」、「カミムスビ」の神々、すなわち、大宇宙を創り上げている神々、神道では造化三神と呼ばれているそれら神々の真実の働きを是非ここで知ってもらいたい。若し、あなたが日本人の心を大切に持ち、神道の真実を知りたいと思っているならばである。

これら三神が一体となって共同歩調をとれば、そこには秩序と調和をもった象が生まれ、顕在化するのである。それが古来から言われている三身一体と言う働きであり、その一つが欠けても宇宙自然は存在不能となり、消滅してしまうのである。まさにこの事実は数の明かす驚愕すべき天下の一大事であり世界に向けて発信しなければならない由々しいものである。決して遺漏すべきものではない。、　＜真実詳細は「数学幻視考」古神道(その 5)17 ページ参照＞

まことに残念ながら、これらの神々の物語をして我々は単なる古代人の妄想の産物、あるいは単なる神話や作り話と捉えているだけで誰も斟酌したり、考証しようとはしない。甚だ慮外無念なことであり、まことに心外なことでもある。

しかし、これらの真実を知ればまさに天下の一大事の勃発となり、現代知などは恥ずかしくてとても語れない曰(いわ)くをもつものとの認識が生まれ、心にわななきを覚え、真実を知るに従いますます心も休まらず、そこにある余りに落差に、つい愚痴りたくなってくるはずである。

それは現代の物理学を遥かに凌ぐ「超物理の世界」を語る由々しいものであり、まさに日本神秘学（神道）の大骨頂と言うべきものである。今までの神道史上でもこの「ムスビ」という言葉の意味をめぐって再三再四論議されてきたのであるがその意味はまったく不明であり、学者達を泣かせてきているのである。その証拠に「ムスビ」は「産巣日」、「皇産霊」、「産日」などのいろいろな漢字をあててその性質を表現しようと計ったのであるが、何にせん、いづれも帯に短し、たすきに長しの感があり、統一されることは無かったのである。しかし本来は簡単な言葉である「ムスビ＝結び」が正解であり、その本質を射て、なおかつ余りあるものである。「結び」、それは二つを結んで一つになって新たな具象を発現するものであり、そのものドンピシャリの言葉である。男と女が結ばれて……なども同じ類を引く言葉と考えてもいいものであろう。

それはすなわち、「アマのミナカヌシ」を中央に構え置き、その左右の場に「タカミムスビ=男神」の神と「カミムスビ=女神」と言う陰陽の神々を侍（はべ）らし、その二紳を結ぶべしと

のご宣託の言葉と考えればするするとすべては紐解かれるものである。（カミムスビは女神であることは広辞苑に記されている）。これを現代的な言葉で言い表すと中心を挟んで対称位置に二神、すなわち「陰(－)」と「陽(＋)」の神を配置する、するとこれら二紳結ぶ形で次々とエネルギーが自然発生し、同時にすべては秩序をもって動き出し、万象が調和をもって生成されることを物語るものである。それがこの古神道の造化三紳、すなわち、宇宙創造の件（くだり）であり、その奇しびなる「むすび」の物語である。それはまさに現代物理を遥かに凌駕するものであり、我々の果てない空想力さえも一蹴するばかりの素晴らしい古代の叡智としての存在である。是非、そのあたりを見て感動を新たにしてもらいたい。その余りの見事さに感動、落涙を覚えて胸が詰まること必定である。 ＜更なる真実詳細は「神の法陣」上級講座(12)参照＞

≪考えて見るがよい、今まで「陰」と「陽」と言う言葉は歴史上数多くあったが、「陰」と「陽」の間に中間子としての何らかの存在を認めていた言葉があったであろうか、この「アメのミナカヌシの神」はまさに「陰(－)」と「陽(＋)」との間に存在しなければならない中庸的な必要不可欠のものである。それは例えて言えば、日本の湯川秀樹博士の発見した中性子とも言うべきものと考えていい。彼は神が創った理論、すなわち、陰(－)と陽(＋)の素粒子の間には何かが存在し、その二つを分け隔て、かつ結ぶ付けているものがある」と考え中間子理論を作り上げたのであるが、 それは完全なる神話上の造化三神の世界そのものであり、完全な古代日本人の持っていた独特の世界観である。古神道の世界、それはまさに現代量子物理の最先端を髣髴させる東洋の自然神秘学の真髄を余すことなく物語るものであろう≫。

そのあたりの仔細を一応口頭で述べておくのでそれに沿って計算を進めてもらいたい。まずは何でもいい、(ｎ×ｎ)の好みの方陣を作り、そのセルの中に「ヒフミ…天地の数歌」を入れるのである。それがすなわち「神の法陣」である。その方陣に対角線を引く、それが大神「アマのナカヌシ」の神である。また、それに沿った上部の場の数群、それが「タカミムスビ」の神(陰)であり、下部の場の数群が「カミムスビ」の神(陽)である。さて、次は上から順にそれら対角線に沿ったそれぞれの数群を加算して答を出す、次はその「陰」、「陽」の答の数の対極同士をムスンで加算するのである。するとどうであろう、信じられないことが起り我々を唖然とさせるのである、それはまさに壮観であり、驚くべきダイナミックな数の出現であり、現代数学が目を剥くばかりのものである。何と、そこには上から順に、０１２３４５６７６９の「ヒフミ…の天地の数」の循環態が整然と鎮座してその威を誇り、我々を睥睨している姿があるのである。それも、ただの一つや二つなら偶然とことは済ませられるのであるが、そこにあるのは数十、数百、数千、いや数万と言う無限に伸びる「神の法陣(ｎ×ｎ)」のすべてにはまったく同じ姿の数列、すなわち０１２３４５６７８９の整った数列が現れて我々を驚かせ、ただ呆然とさせられるのである。

一体、全体、何と言うことであろうか。まさに祝詞「ひふみ…天地の数歌」を初めとする古神道の神々の物語はここに「真実と言う姿」をもって降臨し、自然の驚くべき実体の存在をかいまみせてくれるのである。ここに来て初めて三千余年にわたって秘隠されていた「真実の扉」が開け放たれんとしているのである。ひょっとして、これが天の岩戸開きの本当の姿なのであろうか…？！。 ＜詳細は「神の方陣」上級講座(１２)参照＞

これは現代知史上においてはまさに驚嘆すべき出来事であり、画期的な知の発現なのである。果たして、学者達は歓迎するか、それとも忌諱に走るのか、予断はできないが、恐らくは御身大事とばかり無視、傍観に傾くではあろう。それが世の常、人の常と言うもので

あるからである。

改めて、もう一度言いたい、これは何も難しいものではなく安易なものであり、素直に解けば小、中学生でも簡単に検証できるものである。ただ足し算という簡単な算法で解き放たれるものであり、決して高等な数学などはいらないのである。答を出すことにより、すべてが解き放たれて心に安堵感、共鳴感さえ覚え、同時に現代の数学観に疑問を呈し、新たな数学的な発想が芽生えてくるものである。
これらはすなわち自然に基づく「知」であり学問などではない。学問とは特定の人間から教えられる人間知というものであり、絶対的なものではない、だから五十年も経たずしてころころかわるのである。また、自然に基ずく「真の知」とは心で覚え、自ら心で納得するものである、だから一生を通じて変わることもなく、常に心にあり呼び出すことが出来るのである。最近は学問、学問と学問は大切にされるが、「知」はあまり省みられず、話題にもならないようである。甚だ残念なことであり、将来が危惧される大変由々しい問題と言ってもいいものである。

並み居る神道家の諸氏よ、平伏すべしである、最早安閑と蟄居などはしてはいられない、あなた方が先導してこれから世界を変えていく可能性も出てきたのである。ただし、それには強い意識と旺盛な意欲が必要で、なおかつ知に目覚めることが必要不可欠なものである。
あなた方がぐずぐずと遅滞を見せ、決断しないなら、最早崩壊寸前の「神道」を守り、更なる次代へとバトンの受け継ぎは出来ないと心得るべきである。その時点で爾来三千年の日本神道は歴史から完全に消滅し、民族の前から姿を消すことになるのは必定である。ひょつとすると国の滅亡の前兆となる雛形としての前触れ的現象となる可能性さえも考えられるものである。要するに、神道が消滅すると、国も滅び去るということである。
それはすなわち、現在の神道家諸氏の責任は今までの単なる中継ぎ神道家達と違い、その責任は大変重いと言うことにつながるものである。

口から出まかせ、あるいはいい加減な駄法螺を言っているのではない、何故なら、私は「数」がそのあたりを事細かに語り、その仔細を図をもって説明している確たる事実を持っているからである。すべては「数」が教えてくれたものであり、「図」が指し示してくれたものである。そこには決して、偽り、いい加減、あいまい、不整合などは無く、すべては相整っていて整然とした形をもつ自然相関的な数の語りそのものである。同時にそれはまた物理学、哲学の相関的な語りでもあるのである。是非そのあたりを注意深く見極めて今後の科学、哲学洞察の要として常に心に置いていただきたい。

若し、どうしてもそにあたりの実証が無いと納まらないと駄々をこねる西洋知の申し子がいるならば、その資料をいくらでも提供する、遠慮なく申し出るがよい、ただし良識の徒に限るものとする。ただの好奇心、一時限りの迷いの心を持つ者、あるいは欲に駆られて知をどうにかしたいと考える輩は直ちに玄関払いとしてお断り申し上げることになので、そのつもりで。ただ真実を求めたいと一途に焦がれる有意の者なら老若男女等は一切問はないつもりである

日本の若者達よ、いい加減に目を覚まし、新しい知の技法の存在に気がつくべきである、

これらすべては日本発の由緒ある遥か古代の誇るべき知であり、我々が身につけ、それを代々伝えていく義務があることを知ってもらいたい。それらは別に難しいものではなく、中学生くらいの学力と強い感性があれば、十分に理解でき、吸収出来るものである。決して「現代数学」のように難しいものではなく自然的な易しさをもつものであり、自然的な有機性(意識性)さえももつものである。「数学」に有機性（意識）がある？、まさに噴飯ものと考える人はあまり知的進化には縁がなく、直観性には無縁な御仁であろう。そのような方は上記の古神道の神々の「むすび」の数計算の獲得に精を出すことである、すると「数」とは間違いなく意識性の高いものであり、「ものを言う」ことが判るはずである。駄目なら、手紙、あるいはFAXがあるではないか、じかに私に尋ねるがよい。今、手を伸ばせば「真実の明細」は簡単に掴まえられるのである。まあ、4～5 年位なら私も何とか生きているではあろう、その先ではすべては寸断されて再び無明に帰して終わりとなるであろう。つまり、天の岩戸は再び閉まり、世の中は闇に帰すのである。
一歩でも人の先を制し真実を獲得する、それがこの大変革の世に処すための最善の術であり、最良の道と言うものであろう。

敢て言いたい、これ以上の発展の無い現代数学には最早見切りをつけて古くて新しい知に挑んで真実を得る、その上で自らを修めて新たな精進の道に向かうべきである。それによりワン・ランク上の知の世界に身を置き、新たな視線をもってこの自然世界を眺めてもらいたい。
これら新しい知の技法と本当の真実を知りたくば**「神の法陣」上級講座（12）**を一見することである。そこにはすべての宇宙創造の叡智と仕組みがこと細かく、そしてやさしい形で記されている。しかも誰にも反発不可能な形をもっている究極な姿をもってである。
まさに「神の数学」は偉大な知であり、病んでいる我々現代人の「心」を癒し、リフレッシュしてくれるものである。そのためにも一刻も早く「数」の知を知り、「数」の正体に気が付かなければならない、「数」こそは宇宙意識(神)の陰の随行者であり、代弁者である、また同時に最良の友人でもあるのである…。是非そのあたりは心して学んでほしい。
＜それらの詳細については「神の法陣」上級講座（12）を参照のこと＞

大古神道の秘密（その 3）祝詞の中に『言霊の秘儀』を見る。

『神の数学』９月の記≪祝詞の本当の姿とその本性を見る≫、その(１)

(2010 年　9 月吉日上載)

恐るべき言葉、それは古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」であり、「アイウエオ五十音図」である。遥かな昔はその二つは双対の祝詞として奏納され奏言されていたのであるが、今ではその由、仔細を知る者は誰もいない。それら二つの祝詞が陰と陽の形で絡み合い、結び合って「天地の真実」を開示しアルゴリズム的な形式

でその内容仔細を伝えているものである。
　しかし、今ではその内容事実は大いなる時のはざまに失われ、噂にも語る者はまったくいないありさまである。
　この二つの祝詞はまさに鍵と錠の関係であり、これら二つを合わせ用いて解かない限りそこに封じられている秘密は決して陽の目を見ることはなく、すべては永遠の臥所で眠りについたままになるであろう。
　今ここにそれらの真実のすべてを明らかにすることにより、まさに消えんとする日本神道を再び蘇らすことが出来ればと考えている愚か者がいることを知って欲しい。まさにあきれ果てた所業であり、この上ない身の程知らずのうつけ者と認識はしている、しかし、決して神懸り的な粗忽者、あるいは山師的な大法螺吹きではではなく、それはあくまであるべき自然の理に沿っての言動であることもまた知ってもらいたい。なぜなら、そこには「数」による単純明快でありながら大変戸惑いを感じさせる数の証言があるからである。　大部分の方々はこれらの記述が信じられず迷っているようであるがそれも十分に承知であり、さも有りなんと理解もしてはいる…。しかし、後々の世のために真実はしかと伝え置くことも肝要であり、また必要不可欠なことなのである。
　そのあたりの真意を是非汲んだ上で心を尽くして読み下してもらいたい。
　果たして、あなたはこれらの数々の「数の直言」を愚者の戯言（ざれごと）ととるか、はたまた真実的な意味合いを持つ天与の福音と考えるかにより、これからの日本の将来、はたまた現代文明の行く末さえも決定すると言っても決して過言ではない、それだけの内容は十分にあるものでもある。それは言葉に沿って自らの手で検証して見れば誰でも自ずと分かることであり、一切論を待たないものでもある。

　遥かなる古代の秘儀であった「神々の真実言葉」の存在は今では完全に失われ知る人とていない、その中でも最高の権威を持っていたのが祝詞「ひふみ…天地の数歌」である。しかし、そこに本来あるべき姿、その内容言葉等は今では影も形も無くすべては爾来三千年という時のはざまに置き去りにされ行き方知らずになってしまっているのである。今ではその名残を示す空ろな言葉だけが空しく飾られ空しく拝されているだけである。それは一つの単なる形式としての存在であり、ただ空しい姿をとどめているだけである。
　本来、そこにあつたのは偉大なる「神の叡智」であり、世界に並ぶものない「自然知の秘宝」である。それは驚くなかれ、遥か遠い先史時代の「知のオーパツ」であり、同時にそれは「神々の知のモニュメント」とも言ってもいいものである。気障っぽい言い方かもしれないが、どうしてもそう言わざるを得ないのであり、それがまさにピタリと合致した言葉なのである。
　何故なら、すべては数で語られ数で理解されることにより、正しい自然の姿をかいま見ることが出来るからである。そこに示されている知とは現代知などでは到底追従不能なものであり、その答を掴むことなどはまったく不可能なものなのである。
　何とそこにあったのは現代科学とは一線を画すばかりの異形の知であり、異形の答でもあったのである。それは学べば学ぶほど現代知との差は顕著になり、如何とも理解し難い自然の真実を囁いて迫り、我々の心と共鳴するものである。またそれを知れば知るほどますます真実味を増して我々の心に大きく響き渡るものであり、同時に最後に残るのはただ感嘆と溜息だけなのである。

何故ならば、それはまさに神の手になるもの、そして神授のものとしての形相をもっているからである。しかし、それは確かに見かけとしては簡単明白なものではあるが、改めてその内容を作り出そうとしても、とてもとても人間業では不能なものであり、たとえ巨大なコンピューターといえどもただ跪くだけの無用の長物と化してその動きを止めるだけであろう。まさにそれは単純でありながら美しい形と驚嘆するばかりの大作用、すなわち立体的な作用を持っている大自然の驚異と真実の姿を垣間見せてくれるものである。

現代西洋知、それは自然の響きを取り入れたものではなく、あくまで人間知の上に人間知を積み上げて出来た人間至上的なものであり、自然の声、その響き等は一切無視して構築されたものと言ってもいいものである。一方、この古神道の持つ「神授の知」は自然のハーモニーと共鳴する響きを持ち、それを基本基盤として成り立っているものであり、それはいわば、自然の持つな有意的、有機的なカラー（意味合い）を多分に持っているものと言えるものである。ここにおける有機的なカラーとはすなわち、「数」と「数の並び(数列)」がしっかりと形と心を持って配置され規則性を持っているということである。それがまさに古神道の奥義祝詞「ひふみ…天地の数歌」の本義と「アイウエオ五十音図」の類い稀な至高の姿である。考えて見ると、今までに多くの神道の先達者達や神道の中に真実を求めんとする者達が日本神道の中には「人類最高の叡智」が封じられているとか、「古神道は近代物理学を先取りしている」と言い、あまつさえそこには「法があり、理がある」とまで言い切っているのもなるほどと頷けることであり、確かな先見性を持っていた求道者達と感銘を受けるのは確かでもある。ただ、惜しむらくは彼等は現代西洋知を前提に置いて古神道を解こうとしていたことである、それでは駄目なのである。古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」をもって解かない限りすべては水泡に帰すだけである。この「ひふみ…天地の数歌」こそまさに天地の数であり、天地宇宙を揺るがすばかりの「数の極めつけ」であったのである。＜詳細は「神の方陣」上級講座(4)参照＞

「神道」、それは最早忘れられ、滅びんとする偉大な日本の宗教的存在であるとは言われてはいる。大分以前には祝詞「ひふみ…天地の数歌」は三才の稚児でも知っている当たり前の言葉であると強い指弾を受けたことがあり、そんなものを大切に崇め奉るとは何たる未開の原始宗教であり、宗教の名を辱めるものであると外国の宗教家や団体から嘲笑されていたこともある。あろうことか、西洋かぶれの神道家や学者までが神道軽侮をあらわにし、祝詞「ひふみ…」の奏上さえも行なわずなおざりにし、神道の権威をますます貶め、結果としてその衰亡の時を早めることになったのである。恐らく、今ではそれは宮中の儀式あたりで奏上されるくらいであろう。

今ここに来て、何とこの辱められ、疎まれてきた「ひふみ…天地の数歌」が日本神道を救わんとしているのである、それは完全な逆転劇であり、まさに皮肉な廻り合せと言うものであろう。　改めて考えて見れば、当事者である神官達は数千年という長い間権威を笠に遊び呆け、勢いに任せて人を見下し一切の本義探求あたりか

らは遠ざかっていたのである。今更真実云々を求めんとしても最早時遅しであり、すべてはすでに失われて「空ろな言葉」だけが空しく残っているだけである。それが祝詞「ひふみ…」や「アイウエオ五十音図」、更には「カムナガラの道」等の意味不明とされる「ぬけがら言葉」の姿なのである、今までもこの「アイウエオ」の言葉は由来不明とされ多くの学者達が研究を重ねてきたが出来(しゆつらい)不明なものであり、様々な奇説、謀説が取り沙汰されている現実である。たしか言語学の権威である山田孝雄博士はその書の中でこのように述べている、「**『アイウエオ五十音図』は宇宙間の音韻の根本原理を示すものであり、まさしく神授のものと言えるものである」**と…。これにはまったく同感であり、諸手を挙げて同意したい。

余りも言いたい放題を言って来たがそこに証明が伴わなければ意味が無いはずと苦情が来そうである、急ぎ足で文章で記すので後はそれに従って計算を進めてほしい、要はこれらは小、中学生の問題であり、加算のみで答が出るのであり、暗算で答が出るものである。すべては易しいものである、決して躊躇や尻込みは無用である、胸を張ってまずは一つの検証図をつくってもらいたい。

まずは縦**5**×横**10**の枠を作りその右の縦からアイウエオ　カキクケコ…と順に置き五十音図を作る、いわゆる普通の小学生の「アイウエオの表」である。そこに右縦に並ぶアイウエオに１２３４５…９の「ひふみ数」を順に全体に入れる、出来たら今度は上から順にそれぞれの横マスの数を加算し答を出す。すると不思議にもその両端には上から順に０１２３４５の「ひふみ数」が同じように並ぶのである。…〔１〕図である。

次は同じこの「五十音表」のアカサタナハマ…に今度は「ひふみ数」を右上から横に入れるのである。するとそこにはまたもや両端には上から順に０１２３４５の自然数、すなわち「ひふみ数」が整然と並ぶという不思議なことが起きて唖然となるのである。それが〔２〕図である。

しかもこれらの現れた０１２３４５を平面立体化手法通りに両端を閉じる（同じ数列を重ねる）と、そこにあるすべての数列の和は０に還ると言う衝撃的な仕組が見られるのである。何とそこにあるのは不思議な数の囁きであり、あり得ないことが起っていると言う事実である。そこには屁理屈や知もどきの理などは何も要らない、ただ自然の道理があるだけである。まさに学ぶべし、学ぶべしの道があるだけである。

次にこれら〔１〕**,**〔２〕図の縦の数を加算する、すると〔１〕には≪６８１３５７０２４６≫の「ひふみ九九算**(2**差**)**」が現れて何かを告げようとするのである。さて次は〔２〕であるが、それも同じ過程を繰り返すとそこには≪６１５０４８３７２６の≫の「ひふみ九九算**(4**差**)**が現れて語りの幕を下ろすのである。さてここにで超妙知の本番が始まり「アイウエオ五十音図」の長年学者達を悩まして来た不思議な一つの謎、誰も解き得なかった大いなる謎が解けて「アイウエオ五十音図」の持っていた長年の懸案が解決するのである。それが「アイウエオ」と最後の「ワイウ

ヱオ」はまったく同一同根同のものであり、その繰り返しであると言う証明なのである。また、同時にその繰り返し。すなわち、ダブル数列の存在こそが平面立体化への道の道しるべとなってすべてが即開かれることになるのである。これまた不思議な話であり、現代科学知では到底理解不可能なものである。故に私はこれらは人間業などではなく、まさに人間知の知らない神の手になる「神の秘儀」であり、神授のものと言っているのである。さあ、表を作って穴の明くほど見つめて数の囁く「神の自然仕組み」の謎に挑んでもらいたい。すべてはそこから始まるものである。すべては人知の向こうにある厳然とした超知であり、自然のまつろいごとなのである。ただ、それについて我々は今まで知らなかった、見い出すことができなかったと言うだけである。この探査行を機に出来れば貴方の意識を「現代の知」から脱却させ、新たな知の段階に押し上げることが望ましい。

あなた方が怠慢の悔しを覚え、本当の真実を知りたいと言うならその仔細を明らかな形で次の月＜**10** 月の記＞に記すことを約束しよう**.それまで全知全能を傾けてこの「アイウエオ」の語る「神の秘儀」を**調べ、その秘密の仔細を解き放つことに専念して欲しい。

果たしてそこには全人類がアッと驚く巧妙無比な「神の謀ごと」が我々を出迎えて歓迎してくれるのか、それとも我々の知不足が災いして一切が不発に終わるのであろうか。それは来月になれば自然に分かり、その答が出るのである。

要は洞察力の問題であり、自由なる発想思考力の開花如何を問い質すことを主眼とするものである。ひょっとして現代の〇×式で育った成績優秀な若者達では発想不能であり、理解も出来ないのではなかろうか。それを恐れての出題であり、その問い糺しでもある。　果たしてその如何とは**??**。これらの詳細な答は次月に紐解くことにする。座して待たれよ…**!!**。・

＜これらの言葉による説明のみでこの先の真実のいくばくかでも解き放つことが出来た方には、この詳細の書「数学幻視考」古神道（その７）を差し上げげたい。その解法明細と住所を **FAX** でお送り下さい。ただし、締め切りは９月一杯とする＞。

『神の数学』10 月の記≪祝詞の本当の姿とその本性を見る≫、その(2)

（2010年　10月吉日上載）

今回は先月に引き続き「アイウエオ」の隠されていた秘密、すなわち、古代のある時に秘かに封じ隠された古代日本の大いなる秘密を持つ古神道の道を自然に沿って紐解き、その一つを諸氏の前に披露するつもりである。その余りのことに日本神道を奉じて日頃研鑽学求を積んでいる方々には吃驚仰天の果て腰を抜かすこともあるであろうが…。すべては大自然に沿ったものであり、自然のルールを踏襲しているものである。解からないというのは我々の知のレベルが低いか、あるいは自然の知と同一ではないことを意味するものであろう。

一つお断りしておく、これらは私が妄想逞しくして作り上げたものではない、これらは歴史のあるべき真実を掘り起こすと同時に信頼すべき「数の知」により巧みに織り出されている誰も知らない真実の中の貴重な一片とも言うべきものである。そのあたりの真実如何については自己検証が簡単に出来るものであり、誰でも鉛筆と紙、それに少々の時間さえあれば何時でも検証出来るものである。

疑いを持つ方は是非とも自分が納得のいくまで考察検証を行なってもらいたい。ただし、手と頭を使ってでは駄目である。何故なら、頭、すなわち頭脳はすでに西洋科学知に汚染されて使い物にはならないからである。

さて、9月の記で約束し通りに神道の真実を語る驚くべき答を明らかにしなければならない。ただし、これらを理解できる、出来ないはあなた方の洞察力の度合い、しいては現代知のあり方如何が大いに関わるものであり、こればかりはいた仕方ないと言わなければならない。そのあたりはご承知して戴きたい。 とにかく言葉通りのものを作ってそれを再三再四なぞり、そこにある意味を明らかにしていくること、それが必要なのである。

（1） 先月、10 月の記に示した「アイウエオ五十音図」の〔1〕図、すなわち、「ひふみ数」を縦に置いたもの、〔1〕図をまずは見てほしい。そこに現れたものは最初のア行の縦の数、**12345**である。そして最後のワ行の縦の数列も同じく**12345**である。要するに最初の「アイウエオ」と最後の「ワイウェオ」はまったく同じものであることを証言しているものである。しかし何ゆえに同じような文字を最初と最後に置いた構成となっているのか、一体何をそれで伝えようとしているのか、それについては数千年にわたっていろいろと調査討議されてきたのであるが、答を出すことが出来なかったという経歴があるのである。それがどれだけ大きな意味を持っているのかは次のような西洋の神の言葉から推察してほしい。 「私は α(最初)であり、ω(最後)でもある」と…。

ただし、この言葉の意味は今でも西洋人にはまったく判らないものであり、長年疑問符がついていることを知ってほしい。。

（2） 同じ「アイウエオ五十音図」の〔2〕図、すなわち、「ひふみ数」を横に置いたものである。そこに現れたのはまたもやア行の縦の数は**12345**であり、

同じく 最後のワ行の縦の数も**12345**でもある、すなわち、(1)とまったく同じ数列が出現し、まさにその二つ、すなわちア行とワ行は同一のものであることをま たもや囁いているのである。あなた方は単なる偶然であると笑うであろう、しかし、そこには大いなる神の意思があり、宇宙意識の調和的構造があることを知れば驚くであろう。まずはそこにある各横列の数を加算して見るがよい、するとそこには上から37、38、39、40、41、の連数が現れるのである。さらにはそれを一桁化すればそこには12345の見事な天地の数歌が出現してすべてが正しい手法であることを告げているのである。更にもう少し「神の数学」の知がつけば、そこには確かな**36**、37、38、39、40、41、**42**の「見えない数（**36**と **42**）」が鎮座し、0123456までの7ヶの数が整然と姿を見せていることが分かるであろう。まあ、そこまで洞察力の鋭い方は滅多にはいないと思うが…。 先を続けよう、この数図をもって「カミムスビ」を行い事により一瞬にてこの 0123456 までの数のすべてが0と化し、よって全体が本質0の存在になるのである。
詳細は「数学幻視考」古神道(7)参照＞

（3） 次は同じ〔1〕の各縦数のΣを見て欲しい、そこには＜**6**81357024**6**＞となる「ひふみ九九算」の2の段が現れている。見るがいい、そこにも最初のア行と最後のワ行はまったく同じ数、すなわち**6**が表れて(1)及び

(2)と同じことをまたもや囁き何かを告げようとしているのである。*要するに、**6** が重なることにより6の一つが失われて数列は681357024となり、Σ＝36→9→0となるのである。*

（4） 今度は〔2〕の各縦数のΣを見て欲しい、そこには＜**6**15048372**6**＞となる「ひふみ九九算」の4の段が現れ、(3)と同じように最初と最後には**6**が現れて最初の行と最後の行はまったく同じものであると再び叫んでいるのである。ここには4つのケースが声を揃えて同じことを示し、かつ信じなさいと叫んでいるのである。これらの6もすべて「カミムスビ」を行うと瞬時に全体が0になるのである。 何と言うことであろうか、まさに神の仕組み業と言うべきものである。

それでも信じられないと言うのであろうか！、 現代の知識人とは何と言う頑迷であり、蒙昧極まりない御仁なのであろうか…！！。（要するに頭が固い、フレキシブルではないと言っているのである。）

一体それが何であり、何を意味するものかは現代数学の概念をもってでは到底意味は解からず、ゆえに意味の無いものとしてただ捨て去られるだけである。しかし、思考の切り口を少々次元的に変えてよく見てみると簡単に解決することが分かるはずである。何とここにこそ、その次元を一つ上の次元に導くための立体化手法の糸口があったのである。それがすなわち、古神道にある「カミムスビ」の手法である「陰」と「陽」の正しい両端を結ぶという「タカミムスビ」と「カミムスビ」の神々の手法そのものである。その教えに従って両端にある同一文字を重ねて一体化し、しっかりと見るのである。するとそこには円筒形が現れるであろう、それが現代物理学では「マカロニ次元」と呼ばれている次元の一つである。ちなみにそこにある円筒の横に並ぶ数を加算して見るがよい、すべては0になるのであり、それはその円筒の本質は0であることを示しているのである。何故ならば同一数を重ねることにより数が一つ減り残りの数を加算すればすべてが36となり、更には一桁化することにより9になり、0になるのである。（1）(2)の数字12345は重ねることによりすべては一変して**0**となると言う不思議な業を見せるのである。まさに神業そのものと言える。

「そんな馬鹿な、あり得ないことである」、「いい加減なことを言うな」などとは言わないでほしい、そんな暇があるならばもっと考えを廻らし、真実を追究してもらいたい。 すべては神の仕組みであり、高慢、理不尽な現代知、すなわち、自然とは同調しない我々の持つ知ではどうあっても及びもつかないものである。ただただ伏して押し頂くのみ、それでいいではないか。

更には今までの古神道の由緒ある言葉を探して、そこにある本当の姿、意味を同様な手口を用いて紐解いて見よう。

① まずは古神道の祝詞「ひふみ…天地の数歌」である。そこには12345…89の九文字が並んでいる、しかし、本当の姿はその前に0を置いた0123456789 が正しい姿なのである。そのあたりは祝詞「ひふみ…天地の数歌」の本文、本体である「ひふみ九九算」を確かめればすぐにわかるはずである。この最後の9を0 に置き換える(0＝9により)、すると0123456780が現れるのである。次はその両端の同文字0を重ねる、すなわち「カミムスビ」を行なうのである。するとそこに 現れるのは123456780の環状数字体となり、無限循環に入る。それは閉じた紐世界と言う0の本質を持っ一つの閉鎖空間となるのである。

（0123456780Σ→36→9→**0**）

② 次はこの双対の祝詞「アイウエオ五十音図」である。これも同じように最初と最後は同じ数列であることが判明したので、①とまったく同じように最初と最後を重ねて「カミムスビ」を行う。すると今度は縦×横の2次平面図が3次立体図に変わり立体的な円筒体（マカロニ次元体）が出現するのである。また横列のΣ、すなわち、（①×7ヶ）＋（②×7ヶ）の計 14 ヶのすべては瞬間に 36 になり、そこにある本質は0であることを物語っているのである。（36→9→0） これは2次閉鎖空間と言っていいものであろう。

③ 最後は「ひふみ…天地の数歌」の本体の「ひふみ九九算表」である。この表の左右、上下はすべて見事な**0**の列である、よってまずは上下の0列を重ねて「カミムスビ」を施す、すると②と同じ円筒体が現れる。次はこの円筒体の左右の両端にある0の数列を再び重ねて「カミムスビ」を行なう、それによりそこには完全なドーナツ形の超立体形が出現し、すべての「カミムスビ」が完了し、同時に全体は本質0となるのである。

何故なら、そこにある横、縦、斜めの数列はすべて加算すると0になるからである。（36→9→0） これが3次閉鎖空間、すなわち、我々の言う4次元世界？と言うものであろう。そして、現代宇宙物理は言う、「この完全な超立体ドーナツ型の宇宙は近くを見ている限り、穴が明いているとは思えない、しかし宇宙全体として見た時、穴があいている可能性は大である…」と。…「宇宙創生に挑むパイオニア」NHK取材班より（日本放送出版協会）

① は1次直線を「カミムスビ」することにより平面立体的な世界（1次閉鎖空間？）に変わるもの。エネルギー（数）はリング（輪、環）の中の連続無限回転である。

② は2次平面体を「カミムスビ」により3次立体形（2次閉鎖空間？）に変化したものである。エネルギ（数）ーは筒の中の連続無限回転。

③ は2次平面体を「カミムスビ」により3次立体形に変化させ、更にもう一度「カミムスビ」を行い4次元の立体形、すなわち超立体形（3次閉鎖空間？）が現れるのである。ここに現れた超立体形は現代宇宙論にある多重連結宇宙モデルであるドーナツ形（トーラス体）そのままの姿であり、まさに現在の宇宙の形を現すものと言っても過言ではないものである。その理由とは全体的な本質はすべて見事に0になっているからである。ちなみに現代宇宙物理論によると宇宙の本質は0であると断定しながらも理由は分からないとしている。試みに、これら①②③におけるそれぞれの全体数を加算して見て欲しい、すべては0になることがお解りであろう。すなわち、すべては本質0であると言うことである。エネルギー（数）はトーラス特有のリングドーナツ体の中心の大リング的回転とそれに直角的な面に沿った小リング状の連続無限回転の二つからなる。すなわち、それは①＋②のエルゴー性の回転体、それが③である。

①（輪）が90度位相を変えると②（筒）が現れる、また、②（筒）を90度位相転換すると③が現れると言っているのである。これに類した次元の説　　明は現代物理では次のようになっている、「点を90度位相を変えると直線が現れ、直線を90度位相転換すると平面体が現れ、その平面体　　をまた90度位相を変えると立体が現れる」と…。どことなく似てはいないであろうか。

これらをして私は神道の「三種の神誼（ジンギ）」と呼んでいるのである。天皇家の「三種の神器」は剣、玉、鏡であるが、神道の「三種の神誼」とは上記の①②③、すなわち「ひふみ…天地の数歌」、「アイウエオ五十音図」、「ひふみ九九算」という自然の超原理を表す「宇宙原理」そのものであったのである。何故ならば、これら3ヶは宇宙の本質である**0**を持って互いに共鳴し合い、あろうことか宇宙自然の

万物や宇宙意識とも共鳴し、感応しあっているものであるからである。オー何と言うことであろうか、日本の古神道とは確かに自然の心と合い通じ、自然の本質を語ってうるものであり、まさに世界に例を見ない「人類の秘宝」と言っても言い過ぎではないものである。まさに素晴らしいの一言があるだけである。

ただ、現代の日本人はそれら真実を知らず、ただただ西洋文化に憧れ、表面的にまばゆく感じてやまない物質文明の虜になって己を忘れているのは少々淋しい。とどのつまりには金融資本と言うバーチャル的な怪物に巻き込まれて、お金をめぐる知的遊戯の玩具とされ、ついにはすべてがご破算となり、一文なしになって終わると言う現実が待っていることも知らずにである……。しかし、国民の誰も気がつかずただただ踊り狂い平常心を失い、さ迷っているいる現状である。このような満ち足りた生活が明日も、あさっても、その次の日も間違いなくあると信じて疑うことすらしないお人良しのこの日本民族こそ「人類の秘宝」と言うべき存在かも知れない。さあ、真実は神のみぞ知るであり、今後どのような展開があるのやら…。もっと精神的な知を磨いてもらいたいと思うのは私だけであろうか…。

改めて言いたい、本来はこのように日本は知においてもまさに神の国であり、世界に冠たる国なのである。本当はもっともっと自信をもって進んで人類を引っ張って未来を開くべき重責を担っていくべき民族なのである、歴史をふまえてそのあたりじっくりとを考えてほしｉい。（神誼の誼(ぎ)とは天理に叶った「正しい道理、すじみち」を指す言葉である。…漢和辞典「漢語林」より）

また、これらすべては「ひふみ神示」で示されている次の不可解な言葉通りのものであ。何とまことに面白い一致であろうか、じっくり考えてほし。。

● *「平面の上でいくら動いてももがいても平面行為で有限ぞ。立体に入らねばならん…。立体から複立体、複々立体と進まねばならん。一から二に、二から三にと次々に進め　　ねばならん」。　…「ひふみ神示」より*

● *「天人同士の文字には数が多いぞ。天人の言葉はマコトであるから、真愛から発しない言葉はマコトの言葉ではないぞ。日本の古語（九語＝九つの数）がマコトの言葉ぞ、言　　霊ぞ、数霊とともに栄えゆく仕組み」。…「ひふみ神示」より*

私は別に「ひふみ神示」の熱狂的なフアンと言うことではない、でも何故か不思議にも「神の数学」との関係がありすぎ心が惹かれるのである。だから、『神の数学』は「ひふみ神示」の本経綸の書であり、その本体であると言ってはばからないのである。

『神の数学』11 月の記≪祝詞の本当の姿とその本性を見る≫、その(3)

（2010年　11月吉日

「22 年 11 月の記」ではからずも「3 種の神誼」をひも解いてしまったが、これも世の中の流れがそうさせたのであろう。これらの事実はすべて「ホツマツタエ」という記紀をさかのぼること約 600 年あたりに編集された古代文献にも示されていることを知ってほしい。しかし、悲しいことに今では古い知は無碍に足蹴にされ、誰も省みようとはしない。

現在、すべては西洋科学知によって牽引され、その意のままであるが、それが宇宙普遍の真実かどうかについてはは誰一人として調べたり検証しょうとする者などはいない。果たしてそれでいいのであろうか、若し、科学知が宇宙普遍的な正しさを持っているなら、一体この行き詰まりを見せている現代文明はどのように解釈したらいいのであろいか。今、自然をはじめ世の中のすべてがきしみを起こし始め、すべてにわたって不調和音をたてている最中である。

何かがおかしい、何かが不条理となって浮き出し、我々を苛(さいな)まし始めているのは間違いない、が我々はそれさえ知らないのである。

そのあたりを鑑みると、この「神の数学の神誼」の真実が必要なのはまさに今、現在である。何故ならすべてが流動的に流れて浮き草的に定まることを知らず、固定するためのアンカーがない状態を見せているからである。恐らく、これは現代文明の持つ科学、哲学、神学などの人知学のすべては基本的な「自然の規範（ネイチャースタンダード）」が無いからであり、自然そのものと足並みがそろってはいないからであろう。今こそがこのネイチャースタンダードを絶対的に必要とする時であり、それを心に置きながら「自然との調和」をモットーにこの二十一世紀を歩まなければならない時なのである。

ついでに申し上げておきたい、神道本来の「3 種の神誼」とは物質的なものではなく自然的な理であり、永劫不滅な「自然の真理」でなければならないはずである。何故なら物質は何時かは消滅して姿を失うが、「自然の理」、「自然の真実」は宇宙自然が存在する限り永遠に消滅することはないからである。それが神道本来の「3 種の神誼」の本当の姿と言うものであり、永遠に変わることの無い「自然の大理、大律」を子孫代々に伝えるために残された『神道』と名付けられた伝承道なのである。

試みに「神誼」の字の成り立ちの古い由来を調べてみよう、そこには神、よろしい(宣)、言葉(言)の3ヶが揃って並び、意味深いげな姿を持っている。すなわちそれこそ永遠なる「神の言葉」、すなわち「自然の真理」、「自然の持つ理道」を指す大いなる言葉と考えるべきであろう。要するに神の持つ「永久普遍の真理」を謳っている言葉を指しているものである。それが古神道の「神誼」の本当の謂れであり、その本当の姿なのである。それが大切な3ヶの伝承物の正体であり、古今東西にわたって永久に何時でも、どこでも通用するものでなければならないものである。

それでもまだ分からない御仁はもう一度「ひふみ…天地の数歌」、「アイウエオ五十音図」、「ひふみ九九算」を数の言葉に変換して眺めてみてほしい。すると「ひふみ…天地の数歌」をカミムスビすると一つの環が現れ、「アイウエオ五十音図」をカミムスビすると筒が現れ、「ひふみ九九算」にカミムスビを施すとドーナツ型と言う不可思議な球形が現れて、何事かを囁き始めるはずである。すなわちそこには「環」、「管」、そして「球」と言う次元段階の異なる形が現れて止めを刺すのである。しかも圧巻はそれら三ヶが本質0を持って古神道の中に同時的な存在として奉られ、それが最も大切な最初と言う場にとどめ置かれて崇められてきたと言う事実である。それも数千年という長い間、常に奉られ失われることはなかったという考えられない事実である。

学者は言う、我々の宇宙は本質0を持っゆえに永遠なる姿を誇り、かつ存在していると…、同時に我々の心もその共鳴分身の一つであると…。するとこれらの三体、すなわち「ひふみ…天地の数歌」、「アイウエオ五十音図」、「ひふみ九九算」のすべては0の本質を持って常に自然宇宙と共鳴しているのであり、それと同時に我々の心とも同調状態にあって囁き合い合っていると言うことになるのであろうか…。

＜その簡単なものが音叉による共鳴である。一つの音叉を叩けば周りのすべての同律音叉が共鳴して同一波の唸りを発すという事実である。要するに0の本質を持っているものは、その一つに刺激を与えれば、即全部の0の本質体に行き渡り、同時的な共鳴音を響かせるるということである。たとえ宇宙大の無限無数の森羅万象であってもそれが0の本質をもっている限り、即全体に伝わり、共鳴するということである。これを称して「宇宙のリズム」、「宇宙のまたたき（会話）」と我々は呼んでいるのであろうか＞。

いや、ひょっとすると形こそ異なれ、これらのすべてはそれぞれ一つの小宇宙を創り上げ、独自な世界の姿でそれぞれつながり永遠を謳っているものかもしれない。要するに、次元こそ異なれ、これらはそれぞれ閉鎖空間を作り上げ己の世界を満喫し、永遠なる自由を謳歌しているのかもしれない。いわば、フリー・コスモス次元体としての独自の存在にあるのかもしれない…。そして、また人間も同じように人間だけの封鎖空間を作り上げ他と断絶した世界にいることになっているのかもしれない。 そのあたりを諸氏と一緒に確かめてみようではないか、しかも易しい方法で。

（1） 現代知の線上で次元を見てみる。

① 1 次元… 空間平面に置かれた一本の紐である。すなわち直線的な存在である。（直線的開放構造体）

② 2 次元… 空間平面に並列的に置かれた複数の紐、すなわち平面的な存在である。（平面的開放構造体）

③ 3次元… 空間平面に縦と横の 90 度位相している紐により立体的に編まれた紐、すなわち平面に置かれた一枚の布、縦の紐と横の紐が重なった（織られた）立体的な存在である。 （立体的開放構造体）

（2）古神道が囁く次元の仔細

① 1 次元… 空間平面に置かれた一本の環状の紐である。すなわち閉ざされた存在である。（環状閉鎖構造体）

② 2 次元… 空間平面に置かれた一ヶの筒状のものである。すなわち閉ざされた存在であり、2 次元的な構造体である。（筒状閉鎖構造体）

③ 3次元… 空間平面に置かれた一ヶのドーナツ状の立体構造体であり、3 次元的な空間を持つものである。？（立体的な環状閉鎖構造体）

さて、これらについて各々想像を廻らし思索に耽ってもらいたい、一体どちらが現実的であり、あるべき姿なのであろうか…。私は当然古神道の囁きの方に軍配を挙げるのであるが…、あなた方は如何であろうか。

最近の物理学からそのあたりの次元の姿を見てみよう。

① 数学的には点の集まりを「空間」と定義する。1 本の線上の点の集まりは一つの量で表されるの「1次元空間」であり、面上の点の集まりは 2 ケの量で表せるから「2 次元空間 、そして立方体の点の集まりが「3 次元空間」と呼ばれる。……

② 我々の住んでいる世界は 3 次元空間であり、そこに更に時間と言う 1 次元の世界が組み込まれた「4 次元の世界」であるとも言う。果たして、我々の世界は「3 次元世界」なの であろうか、それとも「4 次元の世界」なのであろうか…？。一昔前の学者達は 3 次元が我々の世界であるとしていたが、最近は我々の世界は 4 次元世界であると言っている。

③ 更には先端物理理論は言う、時空における本当の次元は 10 次元である、その 10 次元宇宙から 4 次元世界をつくるために 他の 6 次元は超ミクロサイズに縮小され「見えない 世 界」になっていると…。……「超ひも理論」広瀬立成(理学博士)著より

こんなことに驚いてはいけない、日本に存在する古代文献にはまだまだ驚くべき真実、科学的な真実が存在しているのである。例えばである、宮地正典氏(理学博士)は言う、日本最古の書と言われる「ホツマツタエ」(AD126 年編纂)の中には「フトマニの図」には何と『元素の周期律表』とまったく同じ基本構造が描かれ、しかもそれは現代科学の持つ「元素周期律表」が平面的な四角い表であるのに、何とこの古代の表は同心円状である、それは例えて言えば、メカトール図法で描かれた世界地図(平面地図)と地球儀(立地地図)の違いであると氏は言っているのである。何と古代の「元素周期律表」のほうが遥かに優れているのである。

また驚くことに、この「ホツマツタエ」の中には地球は球体で有り、太陽や月と共に天体の一つであると歌っているのである。また月は自らは光らず、太陽の光を受けて輝くことや地球の周囲の長さは 365トメジであり、半径は 114トメジであると記されている、それは計算してみるがよい、まさに現代的な比率とピッタリ合うものである。一体それらの正確な数字（365÷114＝3,2）はどのようにして得たのであろうか…。それ以外にも月の軌道をシラミチと呼び太

陽の軌道をアカミチと呼ぶなど驚くべき知が存在しているのであり、更には月と地球の距離、あるいは太陽と地球の距離さえも描きだしているのである。

「つきはもとよりひかりなし、ひかげをうけてつきのかげ」……「ほつまつたえ」（13 綾より）

少々とり止めもない文章結果になってしまった感がある、珍しく数による解説がないからであろう、本当は私にとっては甚だ不満足なものではあるが…。しかし、これらは日本人が省みなくなった古神道の言葉の中から現れてきた驚くべき新しい真実であり、十分に現在科学で説明可能なものである。いや、我々の科学知を超えた大きな知の存在を証言しているものである。 なんと言うことであろうか…。それが事実ならば、これらの祖の学びを偽書と決め付けて無視を決め込んだ日本の学者達の態度こそ軽侮されるべきものであり、彼等の真実味の無い言葉こそが責められるべきであろう…。、なぜなら、その理由とする否定根拠は「そんな古い時代に、現代知に勝るとも劣らない知があるはずが無い」との一言であり、学者からぬ否定の言葉があっただけである。。ああ、何たること…、何と驕りに満ちた醜言であり、何と不用意に洩らした本心の言葉なのであろうか…。

陳謝したい、旧い証言部を長い間ほったらかしにして、更新をしなかったことを。

（2010 年 1 月）

いかにせん、約 20 年間書き連ねた膨大な数の資料を整理校正し、編集者に回し新たに大編集するのに編集者共々約 2 年半の月日を要してしまった、その間、編集者と私は殆ど不眠不休の有様で睡眠時間も削りに削ってやっとこの 21 年 10 月一杯で完成に漕ぎ着けたのである。なんせ、全部で 108 巻、約２０００ページ（広辞苑と同じくらい）の前代未聞の「神の超知のパッケージ」であり、内容の点検に最も時間がかかってしまったのは予定外であった。さあ、これを引っさげて世界に乗り出すつもりではあったが、如何にせん、いつの間にか老躯体と化してしまい、だんだん記憶も定かではなくなってきたのには我ながら情け無い思いである。

まあ、何よりも編集に精魂こめて孤軍奮闘してまとめて戴いた名古屋在住の編集者 I 氏に厚く御礼申し上げたい。二度とこのような方は現れないであろう。私に言わせればまさに「神の権化」であり、「神の使者」とも言うべき御仁である。すべては無償奉仕で寝食を忘れて二年半と言う長丁場をものともせず頑張り抜き完成に漕ぎ着けてくれたのである。まさに感謝感激の思いである。

今後出来る限りの易しい内容のものを逐次披露していくつもりではいるが。如何にせん、技術がうといので本来は数で簡単に説明すべきことを言葉のみにての説明になるので不明な所も出てくると思う。その場合には遠慮はせず該当資料を請求して下され。

少しは信じてくれることになったであろうか、では数の奏でる「真実の数のメロデイ」「数の持つ秘密物語」

をお聞かせ申そう!!。

＜これらすべては日本に出現した世界で初めての超知物語であり、ここで初めて公開するものである。これをあなた方日本人が果たして習得できるか、それともまたしても外国の人々に持ち去られ、そこから新しい知として再びあなた方のもとに戻ってくるのであろうか、それは神のみぞ知るである、まさに歴史は繰り返されると言われているように…。＞

（この後はすべて過去の記録であり、数の真実物語」である。が消去するには少々惜しい大切なファイルばかりである。時間のある方はゆっくりと気の向くままに検証してほしい。心の哲学であり、未来の知でもある。また知に目覚めた方には）…。

そもそも「数学」と「物理」は紙一重の学問、いわば「裏」「表」の関係にあるものである。本来は「数学」とは宇宙自然の物象本質、とその流れを余すところなく記述、描写が出来、かつ説明が出来る学問のはずである。また「数学」は「物理」を真理に導いていく羅針盤的な本質をもっているものであり、「物理」は「数学」を杖にして「自然の理」を追求、開示していくべきものである。

しかし、悲しいかな現代人はこの事実に誰も気がつかず、完全な別のもの、何らつながりのないものとして別々に扱い、その間の関連を追及することは無かったのである。それでも僅かに過去の少数の学者がこれを知り、真実を探ろうと試み、前人未踏の茨の道を切り開こうと懸命な努力をしていたのである。たとえば、有名な自然学者であるＣ・Ｇ・ユングや物理学者のｗ・パウリ（ノーベル物理賞受賞者）達であり、彼等はその事実に気がつき、半世紀前に警告を発したのであるが、その後誰も耳を貸す者は現れず、今や忘れ去られているのである。しかし、彼らの言葉は事実を突くものであり、その真実を知らない限り、人類は永久に宇宙自然とは共存出来ないこと知るべきであろう。しかし、ここに彼等が論示した「数の本質」そのものが超古代の日本に存在していた事実が分かったのである。なんとそれが爾来３千年という長い歴史を持つ日本神道の中から這い出してきた大いなる素晴らしい「数の本質態」である。

≪彼、ユングは述べている「『数』、それは**元型に類比出来るような相対的な自律性を持ち、元型と共通して意識に先行して存在する。意識に条件づけられるよりもむしろ意識を条件づける性質を持つ。また自然数は元型的な性格を持ち、その組み合わせはある種の元型に関係を持ち影響を与えるものである。」、「自然数の系列は同一の単位の単なる寄り合わせ以上のものである、また『数』は元型的な基盤を持ち、そこには数学全体と、この分野ではまだ発見されていないすべてが含まれているのである。それはそのうちいずれ分かるであろうと言うのが数学者達の推測である。」‥‥「自然現象と心の構造」‥ユング著より 【ここにおける元型とは宇宙元型、宇宙鋳型、宇宙母体を指すと考える】≫**

現代科学文明の中では[数学」,「物理」と名づけられたその両者はまったく異なるジャンルとして分類され、区分されているがそれは大変おかしい,なぜならばその両者は同一的なものであり、ただ、その表と裏の関係、すなわち、それを見る面とその視点の相違がそれら二つを生み出しているからである。本来は、「数学」を学べば自然物理、物象が分かり、「物理」を知れば自然数学、算の理(計算法)がそこから生まれてくるものでなければならないものである。それを両者の関係をはじめから断ち切り、物理は「物理」、数学は「数学」とまったく異なった教科として子供に教え込んでいるから、そこにある面白くて、摩訶不思議な「物象の相対的な関係」や「数の示す真実言葉」を見出したり、捉えたりする事が出来ないのである。要する

に『数学』は単なる機械的、無機的な「数の表れ」になってしまい、面白味はすっかり失われてしまったのである。その結果、数学は面白くない、数学は嫌いだ、と言うアンチ数学、数学アレルギーの子供が増え、いまでは国を脅かし始めているのである。私は言いたい、今の数学者達は余りにも「形而上学（神の学問）」を恐れ、逃げ回っているということを、しかし、よく考えて欲しい、「形而上学」こそは自然科学の根本であり、その基軸となる大切なものである事を。学者達はは「数の『０』と『無限大』」を大変恐れ、関わりあうのを避け、逃げ回っているのが現状である。確かに「現代数学（形而下数学）」の下では０＝∞は成り立たない、しかし『神の数学（形而上数学）』ではそれは簡単に成り立ち、当たり前のことなのである。試してみるがよい、視線を変えればそれは簡単な道理であり、誰にでも納得いくものである。本来あるべき『本当の学問』,「自然に学ぶ学問」とは「形而下」と「形而上」の二つの世界を完全に包含した一体的な相関関係を持つものでなければならないはずである。その事を今の子供達は意識下において本能的に感じているから「形而下世界（物質世界）」の学問だけである「現代数学」の姿に疑いを感じ、興味を失いつつあるのである。

私がこれらの事実を述べても一般の学者や数学の教師、いや、数学の権威である数学者さえも首を傾げ、呆気にとられるだけであろう。残念ながら、彼等は「数」のほんの表面しか知らず、もっと深いところにある『「数」と「自然」のかかわり』などは一切知らない、いや、あるはずが無いと思っているのである。しかし、ほんの少数ではあるが最も先端的な物理学者達は気付いているようで、彼等は物理を追い求めている中にそこには知られざる「数の動き」、不可解な「未知の数的存在」があるのを察知し、かねがね不審を抱いていたのである。そしてこの 20 世末、19８0 年代あたりになり、とうとう悲鳴を上げ、「現代数学」に疑問を持ち始めた、なぜなら、今の数学、すなわち、「現代数学」では物質の振る舞い等の量子的な自然象を解明するには無理があり、「もっと自然に沿った数学」、「10 進法ではない別の記載手法を持った数学」が必要であると考え始めたからである。しかも、それは「まったく新しい姿もった革命的な数学概念」、「新しい数学手法をもったもの」でなければならないとの予見も持ち始め、それが現れない限り、「人間の意識」と「宇宙自然」との対話は始まらず、現代科学にはこれ以上の進歩はないことを直観的に知ったのである。

今、ここ、日本でまさに驚くべきものが見出されているのである、それは三千年以上の古い歴史、世界で最も古い宗教とされる古神道（仏教の渡来により変形をはじめる前の日本神道の原形である「縄文神道」）の中から現れた驚くべき古代の「数理」の姿である。それらは「自然数は真実の歌を歌う」や「数は本質の調べを持つ」等の「現代数学」とまったく異なる『古代数理』の数々であり、それはまさに現代の数学者達の度肝をぬくような数の不思議な姿、数的異形の形を持っものである。しかもそれでいて完全なる整合性、完璧性を備え、我々現代人をして唖然とさせているものである。それがすなわち、古神道の奥義祝詞とされる「ひふみ‥‥天地の数理」であり、そこに秘められている「数の真実理」、「数の本性」の数々である。またそれを開くことにより、大自然のもつ「陰、陽の理」、「宇宙次元の真実の構造仕組」が歴然とした姿をみせ、我々に何事かを囁こうとしているのである。

それは自然の姿、自然の形を基にした「自然数理」であり、自然万象と共鳴する「宇宙数理の調べ」を持つものである（それは今の人間知にはないものである）。しかもそれはいみじくも古神道の表看板である「祝詞」として数千年来人々の目に触れてきていたのであるが、誰もその意味を問う者もなく、不審がる者もいなかったものである。なぜならば、それはあまりにも当り前、馬鹿々しい形の、いわば昼行灯的な存在として表に飾られ、人の心を引くこともなくただ

ただ捨て置かれものであったからである。しかるにその結果として誰も手を付けること無く、そのまま古代の姿を保ったままで現在に至ったものである。

爾来数千年の間その由緒いわれ等は誰も知らず、ただただ古神道の奥義言葉として意味も知らず崇め奉られ、語られるだけであつたのである。この二十十世紀末に私が訪れ扉を開くまで**誰も声**をかけるものもなく、ひたすら眠り続けていたものである。**【「宇宙数理の調べ」とは下記の「『神の方陣』より《計算の図》〔4〕に詳細あり。それこそまさしく『ひふみ‥天地の歌』の持つ本来の姿、真の意味である、『宇宙数理の調べ（響き）』＝『ひふみ‥天地の歌』をしっかり知って欲しい。】**

その古神道の祝詞とは何を隠そう、祝詞の最高奥義である**「天地の数歌『ひふみ‥‥』の数詞」**であり、並びなき**「ひ,ふ,み,よ,いつ,む,なな,や,ここ」**のたったの**９つの数文字**である。その数のあり方、展開形式のあり方がそのまま「宇宙自然の仕組」、「宇宙自然の本質」を開示し教えているとは我々の誰もが知るよしも無かったものである。それはまた、かって古代日本に花咲いた「超古代文明の真実」をシッカリ物語る古代からの隠された「伝承メッセージ」であり、古代の「知の遺産」であったのである。それが古神道の奥義祝詞、すなわち**「天地の数歌『ひふみ‥‥』の数詞」**であり、古神道の中にしっかり封じられて遥か未来の二十世紀の現代まで姿を残してきたものである。それはまさしく古代人が知りえた「数の本質内容」を我々に告げようとする古代の遺産知であり、祖達の思いを込めた超知のメッセジーである。その証拠に**「天地の数歌『ひふみ‥‥』の数詞」**のあるがままの姿をそのまま用いることにより「天地宇宙の謎」の秘密は解き放たれ、目の前に姿を現わすのである。それは同時に我々をして西洋科学文明のくびきから解き放ち、新らたな意識文明へと誘うものでもある。私はあえて叫びたい「すべては「現代科学」を遥かに超えた『宇宙普遍の真実』の存在であり、これからの人類の歩む道を示す「羅針盤的存在」とも言うべきものである」と。

それを知り、調査追跡を続けている中に、私は現代宇宙物理学でさえ知らない〔「あの世」と「この世」の対的存在〕、「宇宙次元の階層的構造」,「宇宙次元の繋がり方」, はたまた「宇宙を貫く大いなる陰陽のエネルギーの流れ」、などを『数』により教えられ、学ぶ度に大きなショックを受けている状態である。ただ言えるのは道筋さえつければ、それらは甚だ簡単であり、面白いもの、興味の尽きぬものであると言うことである。またそれらの事実の示すものは未だ我々人間の知らぬ「科学知」、「哲学知」等がまだまだ無限にあると言うことを教えであり、人間が傲慢になることを戒めるものである。今,現代科学はそれらの事実を見出すための糸口を何とか見出し学ばなければならないのであり、それが明かされ無い限り現代西洋科学文明にはもはや明日は無く、ただずるずると衰退滅亡に追い込まれるだけであろう。 **まことの自然本質を知り、そしてそれからすべてを学び取り入れかつそれに従う、それが何よりも今必要なことなのである。** **【その詳細は『神の方陣』講座（10）参照のこと】**

ただ、言葉だけでは諸氏も信じることは出来ず、疑いの目を向けるだけと思われる。そこでこのあと『数』の語る「宇宙、宇宙次元の真実」を概略的に少し描き記して置くことにする、心ある方はどのような過程を経て、またどのような計算手法でそれが成り立ち、真実を伝えているものか、そのあたりをつぶさに調査検証して欲しい。それと同時にそこにある『神の数学』のもつ計算法（ひふみ算法）の秘密や、自然の持つ[数の本性]を探って戴きたい。そこにあるのは「現代数学」では解けず、自然数学、意識数学である『神の数学』だけが解き放ち得る『自然の大きな秘密』であり、現代人が夢想もしなかった『自然の叡智』が秘められているものである。心して、たゆむことなく思考考察を続けることにより、すべては明かになるのであり、それにより貴方の心、意識のあり方も一段と高まると同時に意識感覚もまた格段と鋭くなり

「諸々の『神（自然）の秘』」に容易にタッチすることが出来ることになるのである。少々残念なのはしっかりした図表を用いての説明が出来ないことである、インターネットの性格上、また私の腕前の稚拙な事から見ても止むを得ないものと考える次第であり、大変残念なところである。どうしてもと言う方にはFAXを利用してこれら数手法の是非と聖数図表を求めてその真実を確め、貴方の人生を更に有意義なるものにして戴ければ有難いと思う次第である。

すべては『神の数学』の計算手法（**循環法＝ひふみ算法**）が明らかにした「宇宙普遍の計算法」である、そしてそこには「現代数学」が金科玉条としている「負数（－）」や「虚数」などの不自然な数学の姿は無く、単に加算、減算、比などの「正数」による計算の仕組みだけである。それはかの有名な量子物理学者、R・ペンローズの語る時空の計算物語そのものである、彼は**「宇宙は整数のみから、組み合わせの作用だけでつくられている、すなわち宇宙は「比」、「足し算」、「引き算」という単純な算術演算だけで創られている」**と言う。そこには「現代数学」が苦し紛れに生み出したマイナス数や虚数概念などはさらさら無く、まったく**正常な正数概念のみを用いる『自然数学』の姿**があるだけである。だから数学を知らない幼い子供達は簡単に答が出せ、その内容に嬉々として同調し、懸命に学ぶ事ができるものである。そのあたりを考えてじっくり挑戦し、真実を明らかにして欲しいと思うのである。ここに述べている事柄とは**古代に存在した「古の数の理」であり、自然と共鳴同調した『数』の姿でもある**。恐らく諸氏はすべてを読み終えると同時に考え込むであろう、こうまで明らかな「現代の数の理」の誤りを見せられ、突きつけられたのでは動揺するのも当たり前である。またいみじくも、それは古神道の『祝詞』から現れ出た由緒のあるものであることは前述した通りであり、いわば、この『日本古代の数の姿』こそは日本の誇るべき『叡智』であり、世界の『知の宝』とも言うべきものである。是非、不遜のないように扱って戴くことをお願いしたい。では『数』の語る『超知』の数々に十分目を通し、そこに示された**『数の真実の姿』**をごゆっくり考察検証し、納得出来る限りにおいて結構、自らの手で更なる普遍真実を探索究明することをお願いしたい。貴方が分からないのは百も承知であり、難しいと考えるのは千も承知している、真実が判らないから、真実を知らんが為に皆が苦労し、学び取ろうとしているのではないか。それが我々のこの世に生を受けた者としての学びであり、務めでもあるはずである。ここにあるものは大変に易しいものであるが、あなた方の頭がそれを知ろうとしないだけであり、ただ拒否反応を起こし難しいと感じているだけなのである。長年の「誤りの知」を唯一のものと信じ込み、「正しい知」の存在を今まで貴方は知らなかっただけなのである。ただそれだけである。

≪『神の数学』が開示する宇宙の姿と宇宙次元の仕組みを検証する≫

≪以下は「『神の方陣』講座（６）」の一部転載である、そこにある「数の理」の業、その確かさを是非読み取り、もって諸氏の「現代数学」一辺倒に終止符をうち、新たな自然数学形態である『神の数学』の存在に目を開いて戴きたい。≫

『神の法陣』の秘密(10)≪各次元の全体的波動（共鳴波動）を調べ、その繋がりを見る≫

ここにおける計算とは自然の状態にある自然数を加算する事ではじまる。「『神の方陣』の秘密(９)」では対極数、いわゆる「『陰』と『陽』の相関関係」と「数の表れが示す真理事実」を解き明かしたが、ここではそのまま自然数順による計算を進めてみよう。各方陣の数字をそのまま**「ひふみ足し算（循環法）」**で縦に加算し答を求めたもので、いわば自然の数法そのも

のである。

『ひふみ方陣』より≪加算計算は自然的循環法（**ひふみ神算法**）を用いる≫　（　）内は 10 進法計算　〔単なる易しい古代人の「足し算」である、果たして「現代数学」の申し子である貴方にはできるかな？。（十進算法捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ「数の道」）。〕

青い数字は単なるランダムな数ではない、それは驚くべき規律、秩序を秘めている崇高な自然数の群れである。まずは　その計算法を学び始めることである。

０次－0	１次－1	２次－12	３次－123	４次－1234	５次－12345
0	1	+34	456	5678	67801
(0)	(1)	46	+789	0123	23456
		(46)	360	+4567	78012
			(1368)	1504	+34567
				(11602)	16273
					(216181)

同様に６次－６３０６３０、７次－１８６４２０７、８次－７６５４３２１０、９次－０００００００００１０次－１２３４５６７８０１、１１次－４６８１３５７０２４６、１２次－３６０３６０３６０３６０　の数答があらわれる。それを一桁化すると０１１０１１０１１０……となる循環数列が現れて何事かを囁くのである。現代数学ではそこには何の意味も無いとして、単に捨てられるだけのランダムな数である、しかるにそこに Open　sesame（開けゴマ）を唱えて『神の数学』手法を施せば、あら　不思議　数字が大きく開け、ものを言うのである。ひょっとするとそれは神が封印しておいた Untouchable　Secret かも知れない、いや、そうではなくこれは開けてはならない禁断の箱、神の秘儀の詰まったパンドラの箱の中にかろうじて残っていたもの、すなわち「希望」と言う名の最後の神のはからいかも知れない。でもいいではないか一諸に開け、覗いて見ようではないか。まず、その前に上記の数字には如何なる関係があるのか、少々その委細を記しておくので一つ考えて戴きたい。それらは単なるランダムな数列ではなく、「大いなる意味を持つ数列」である、それを確認するために貴方の持てる知をフルに動かし全力でぶつかって戴きたい。

以下は『神の数学』手法の「ひふみ神算法」による。詳細は【超数学（３）参照のこと】≪計算は右の数から左の数をひく、そこには**負数（マイナス数）は一切無い**、それが自然界の姿であり、正しい見方である。『負数（マイナス数）、そんなものは学者達が苦し紛れに作ったものであり、それは自然にとって論理外のものなのである。≫**≪ここにある答の数字を見るがよい、「現代数学」的にはランダムな数字で意味の無いものと見えるが、『神の数学』の目から見るとご覧のように完全秩序に貫かれている「真実の答」である。≫**

００、０１　４６、３６０、１５０４、　１６２７３、　６３０６３０、１８６４２０７　*計算例（負数は一切無い）*

∨　∨　∨　∨　∨　∨∨∨　∨∨∨∨　∨∨∨∨∨　∨∨∨∨∨∨

０　１　２　３３　４４４　５５　５５　６６６６６　７７７７７７

2－6＝＝4（誤り）　→5（正）

6－8＝＝2（誤り）　→7（正）

７６５４３２１０、０００００００００、１２３４５６７８９１、　４６８１３５７０２４６　（これを読み解かない限り前進は無いと

ＶＶＶＶＶＶＶ　ＶＶＶＶＶＶＶＶ　ＶＶＶＶＶＶＶＶ

く、１である、これはそのことを表す厳然とした数の検証理であり、その真実を示すものである。これこそが古神道の祝詞である『ひふみ‥‥』の数序、すなわち、１０以上の二桁の数をもたない、「ひ、ふ、み‥‥や、ここ」の数の繰り返しの姿であり、同時に「真実の数の在り方（ひふみ‥算法）」の表れ、「宇宙自然の数の運び」であることを知って欲しい。それがまごうことない自然の持つ『数律』そのものであり、自然の『大律』であることを「数」はいみじくも語り、証言しているものである。その何よりの証拠には「ひふみ‥‥の天地の数歌」を用いる限りにおいてはすべての天地自然の謎は解き放たれ、我々の目の前に忽然と現れて語りかけてくれるのである。それは「現代数学」手法においては決して現れないものである。

【古代の神道祝詞である「ひ,ふ,み,よ,‥‥ここ,たり」の「たり」は１０を表すのでなく、『足り』、すなわちそこまでと言う「閉め言葉」であったのであるが、いつの間にか１０を示す数言葉に置き換えられたものと思われる。】。【広辞苑‥‥動作の終了、完了、そこまでの意。詳細は《数学幻視考》（古神道の部）参照】

【ここで示されているもう一つの数の真理は**≪９＝０≫**である。要するに、‥‥７,８,の次は９ではなく０であることを数はハッキリ示している。】

「十進法」はいざ知らず、自然万物の理法である『循環法』計算においては　（９＝０）が定理であり、その次は１である。すなわち、０１２３４５６７８０１２３４５６‥‥と数は伸び、妙なる循環態、整然たる循環数である確たる存在を示しているのである。そのあたりのことは『神の数学』の中で様々な形をもって証明されているのであり、貴方は何時でもそれを手に入れることができるのである。要するに最初に**０**を置かない限り万象は決して生じて来ないと言う真理鉄則が自然にはあるのである、ただそれを人間は未だ知らない、知ろうとはしないだけである。

そんな馬鹿なと言う前に自然の確たる規範である「元素周期律表」を見てみるがいい、そこには原子の基本数は８ヶと限られ,一つ０と言う呼吸をおいて初めて新たな軌道をつくり１，２，３，‥‥と始まっているではないか。しかし、何故かその理由は誰も知らない、たとえ大科学者と言われる人でさえも。】

宇宙自然のすべて、小さな原子から星々、大宇宙にいたるまですべての自然象は廻り、回り、大きく巡って、元の基点**（０）**に戻っている、すなわちその繰り返し**（循環）**であるのはお分かりであろう、驚くべきことに自然と同じ循環形態を『数』は持ち、「自然態の真実」を伝え持つ能力さえ有しているのである。それによりあるがままの自然の姿形をそのまま開示可能であり、「自然のもつ真実」、「自然の意思の存在」を我々に伝えることができるものである。しかし残念にも我々は自然と異なる『数手法（10 進法）』を所持しているのでそれに対して聞く耳は無く、聞こうとしても聞こえないのである。だから自然との意思疎通はままならず、学者達は数百年間も苦しみもがき、四苦八苦しているのである。常々私は宇宙自然を解くには直線数学である「現代数学」は無力であり、「循環数学」である『神の数学』を用いなければその「本質」は解けない,永久にその「本質」は分からないと申し上げているのである。その証拠に「循環数学」、すなわち『神の数学』を用いて「数の理」を探索検証すると自然は面白いように答を開示し、次々にと「高次自然象の理」の存在を繰り出してくる。それはまるで我々の学のつたなさをあざ笑っているのか、それとも余りの知の貧弱さに呆れ果てて憐憫の情を示しているようにである。

（３）そこにある**０,１,４６,３６０,１５０４,１６２７３,６３０６３０,１８６４２０７,７６５４３２１０,０００００００００‥‥**とつづく一連の青い数字は何を表すものであろうか、答は誰も知らず、誰も見破ることは出来ないものである。ところがこれらの数字の正体は子供でも知っている「日本人の常識」であり、その中にしっかりと仕舞い込まれている**「大いなる**

数字」なのである。ただ貴方が知らない、いや知ろうとはしなかっただけのものである。あまりにも「現代数学」を信じきり、間違い等はあるはずが無いと思い込んでいたからである。それを解く大きなヒントはもうすでに出ているのであるが、いかがであろう。自らの知を奮って挑戦し、見事答の数字を導き出してみることが出来るであろうか。これはまさに**「神のクイズ」**であり、**『知的進化度を計る神のメッセージ』**とも言うべきものである。これは日本人だから分かるはずなのであり、日本民族に対しての大いなる**「神のメッセージ」**と考えてもいいものかもしれないものである。是非、どなたか持てる限りの「知」をふるってこの正しい答を見出し、『神』の期待に応えて戴きたい、それが「九九算の守護者」を任じている我々日本民族に課せられた大いなる義務であろう。**それは確かに小さな一歩ではある、しかし同時にそれは人類にとっては大きな一歩となるものでもあることを知って欲しい、何故ならこれにより人類が新しい「数の知と理」を獲得することになるからである。**

『神の数学』は大変素直で易しいものである、それを難しいものと考えるのはあなた方の知の概念がそうしているのであり、現代西洋　科学的な考え方があなた方の脳を完全に支配し、牛耳っているからである。現代的頭脳で完全武装した西洋知識の権化である方々には無理でも、普通の凡人で明晰な直観と深い洞察力、そして素直な心を持つ方なら、心を少し澄まし考えるだけでお分かりになるはずである。

まあ、ついでのこと、この「神のクイズ」を少々解き進め、そこに潜む「神の秘密」、「真実の存在」を少々探ってみよう。貴方方の持つブラインドな知では多分解く事は叶わないと思うからである。またここで理解出来ない方は時間をかけて十分に考え、ゆっくりと歩を進め、理解に到って戴きたい。それにより少しでも、一段上の自然意識の存在を知り、心を少しでも覚醒させる新たな一歩を踏み出すことが出来れば幸いである。**その後はそれら自然意識（神）とフ－ィドバックを重ねることにより己の知を更に磨き上げて戴きたい。貴方は既に現代知の向こうにある**「真実の存在」を知ってしまったのであり、更にはこれからそれとコミュニケートする方法、手段を学ぶのであり、その後は実践練磨と更なる検証により自信を深めるだけである、私の出番はそこまでである。後は悩み、苦しみながら一歩々階段を上って成った状態に入り、すべてを知るだけである。（「成った」とは将棋の言葉を思い出して欲しい、「成った」とは古事記にあるように古代真実の偉大なゆかし言葉である）

次に大変な真実をもつ一つの数表を掲げておく、これは『神の数学』を学んでいる諸氏にはお馴染みの『宇宙次元原理表』であり、その名の通りの**「宇宙次元原理を表す聖なる数表」**である。その名の謂れ、それはすなわち宇宙次元に基ずく諸象を数で計算していくと最後に必ずこの『次元原理表』の何れかの数列に帰すことになることからである。然るに、これをして初めて目にするものであり、聞くものであると言ってはいけない、あなた方は今迄にこの「次元表」を何千回、何万回も唱えているのであり、現在でも毎日お世話になっているものである。ただ、心がそこに行かないから知らない、見ようとはしないから見えない、聞こうとしないから聞こえないだけなのである。

（智恵に目覚めた者は調べるがいい、ここには「あの世」と「この世」の仕組みや、その成立過程、表れの違いまで数で開示し、謳いあげてられているものである。すべては自然態そのものが見せる業であり、正自然数（ひふみ‥数歌）のもつ驚くべき次元の仕組みの業であり、その開示でもある。）【これは日本人なら小学生でも知っているものである、さあ、その名は？－－－－－－－答（九九算表）、それを「ひふみ‥」の数理で表わしたものである。調べれば判るまことに簡単なものである】

下図にある『宇宙次元原理表』（ひふみ‥九九算表）に上で求めた『ひふみ‥方陣』の答、すなわち　０、１、４６、３６０、１５０４、１６２７３、６３０６３０、１８６４２０７、７６５４３２１０、０００００００００、１２３４５６７８０１、４６８１３５７０２４６、３６０３６０３６０３６０、の各数列を置くとピッタリ合うのである。 なんたる不思議、何たる妙、何たる摩訶不思議なことであろうか。それは神妙玄理とも言うべき「数象（数の顕れ）の理」であり、精妙なる「数の調べ」でもある、そして新たな「自然数理」の確たる存在を語る驚くべき証言とも言うものでもある。また、この表の仕組みは少し考えただけで誰にでも判るものであり、またこの「古代の数理」の確かな存在に気がつくにつれて貴方の心は徐々に揺らぎ始め、目覚め始めることになるであろう。また、同時に『神』の携えている「宇宙普遍の叡智」の基本等のすべてはこの表の中に開示されていることを知ることになるであろう。ただ、今まであなた方はそれら一切には気がつかず、西洋科学の華やかさにただただ舞い上がり、心を奪われているだけなのである。そろそろこのあたりで現実をしっかり見据え、あるべき自然の心を取り戻して欲しい、この表には「数」が奏でる人知を超えた「神のメロデイ」の存在が数多示され、驚くばかりの『神の秘密の理』が語られ、説かれているのである。しかもそれらは我々日本人にしか解き得ないものである、何故ならば、古神道に示された古代の「数の理」を用いない限り決して解く事は叶わないからである。その明らかな証として一部を次に示して置くので、願わくばペンを取り、その真実を自らの手でしかと確め、本来の日本の「叡智の本性」である（ひふみ‥算法）の真実を再び現代に蘇らせて戴きたい。

下記の『ひふみ‥‥』算手法による「九九算表」に秘められた『超知の数々』は次の通りである、それらを見事に解く者は果たしているであろうか、例え一つでも自らの心と手で開くことが出来るであろうか、？　私は危ぶむ！！。

①下図に示す「九九算表（ひふみ‥算表）」を見て戴きたい、そこには中心を境に「数」という基本因子が妙なる「調和」と「秩序」を見せ、相互に自己調和を保ちながら見事な全体的調和を見せているものである、お分かりであろうか。全くランダムで無関係と見えるそれぞれの「数」が驚くべき『中心律』の下にロジック的な組み合わせをもち、それにより全体的な調和を図り、安定状態を保持しているのである。その事実は図全体にわたって等しく見られ、その様はまさに現在の「力学的世界観」を強く否定している新しい物理理論『ブーツストラップ世界』そのものである。若し、これを用いて検証すれば物理学者達が難渋している『ブーツストラップ物理』の持つ因象及びその実理は容易に開かれるのであり、その内容は一段と詳しく紐解かれていくはずである。

②「縦の数列」または「横の数列」における相関数（中心を挟んで相対的な位置にある数）をそれぞれを加算すると、その和（Σ）はすべて０である（総計 20 ヶ）、すなわち、本質は０を持つことが分かるのである。この相関数とは「陰」「陽」の関係にあるもので合一（加算）すれば０になると言う相対性をもつものである。これらの「縦」と「横」の相違、その区別であるが、本来は「縦」と「横」とは「陰」と「陽」という相対した関係をを持ち、「陰」＋「陽」＝０の関係にあるものである。そのあたりから仔細を伺うと「陰」と「陽」の確たる姿、その本来の性質が十分に理解出来るものである。例えば、「この世」と「あの世」の切っても切れない関係、又はその二つの「対の姿」、そこにある本質や姿の違いさえも一目瞭然とした形でに開示されているのである。この表を用いてそのあたりの真実関係を是非把握会得し、一つの

心の糧として戴ければまことに幸いである。ところが現代西洋科学はこの「縦」と「横」のまったく相異なった関係にある事をを知らずして、同一的に捉え、平面的な計算を進めているのである。それ故に「現代数学」は『ものの本質』そのものは何も見えず、そこに有るべき自然律や自然則は何も掴めず、ただ無味乾燥で無機的、そして機械的な内容に終始しているだけである。自然の在り方に敏感な子供達は本能的にそこに「異質」、「不審」を感じ、知らず知らずに離れてしまっているのである。白状すると私もしの一員であったのである。

③この九九算表を**中心をもとに**フラクタル的（玉葱の皮状）に分解する、そのすべての場（枠＝６ヶ）における数の加算和（Σ）を見るとすべて本質０を示すことになる。また、その各枠内の数字の総計（Σ）は順に０：１：２：３：４：５の比率（正自然数比率）を持つことに気がつくであろう。本質０を示しながら、同時に１,２,３,４,５の意味ある数律を示す、そのような不思議なことを「数」は出来るものであろうか、「現代数学」では不可能であるが『神の数学』では容易に可能なのである。それこそまさに「数」の持つ大いなるミステリーであり、人間知の及ばぬ神業と言えるものである。またここに現れた**０１２３４５‥と言う正自然数的連比の存在**こそが祝詞『ひふみ‥』の語る天地の歌の意味であり、まさに「古代知」存在の証拠となるものである。その事実等は現代数学概念、またはそれに基づく計算等では一切現れること無く、ただ意味の無い数列だけが並ぶだけである。これらの「数」、すなわち０１２３４５６‥の数の囁きこそは「自然の真理」の開示であり、それを謳っている祝詞『ひふみ‥』とは古代知の躍然たる面目を秘めた大いなる知遺産と言えるものであると言っているのである。何故ならば上記の「各枠場は０を示しながら、かつ整数比０,１,２,３,４,５を持つ」と言う原理概念は「現代数学」にはまったく無く、その事実の現れは現代人の夢想もしない「数の仕組み」の存在を示す驚くべき存在なのである。そこにある祝詞「ひふむ…天地の数歌」の意味とは、すなわち**「ひふみ…の九つの数は宇宙自然の持つ響き(リズム)そのものである」**との意である。
【詳細は『宇宙次元原理表』№.７参照】

④この九九算表の相対する位置（陰、陽）にある斜めに走る二つの数列（20ヶ）の和（Σ）はすべて０を示す。これら「本質０」を見せる世界とは般若心経の「色即是空」，「空即是色」の世界であり、量子力学がかいまみせる「空の世界」、すなわち『自然万象は０と言う本質』を持つことを表しているものである。この手法概念こそ不可思議な「数の表す完全世界」の真髄を十分に我々に味わせてくれるものである。ひょっとして、これを簡単化して図案化したものが「キルコル」、別名「曼陀羅の図」かもしれない、この「キル」とは中心をあらわすもので、「コル」とはその周縁をあらわす同心円構造を持った宇宙をあらわすと言われるものである。ちなみに「キルコル」とは運動し、変化する多次元的な全体の運動をあらわす言葉である。
＜下線部は実藤遠氏（理学博士）の「宗教と科学を統合する宇宙生命の書」より＞

⑤この表の対角線を挟んで分かれる「陰,陽の世界」において、その「陰の場」と「陽の場」の二つを巡って流れるすべてのマキシマムな「エネルギーの流れ（10ヶ）」は還流還元して最終的には**すべて０の値をとる**、すなわち**すべては『本質０』に収斂し**、**『無の世界』**に還るのである。まさにこの事実の存在は驚嘆と畏敬を覚えるものであり、まさに驚異そのものである。如何なる大学者と言えどもただただ言葉を失い、顔色を変えるだけであろう。また、そのあたりは誰にでも計算可能であり、実証可能なものであるが、一旦その内容を瞥見した者は百人が百人その仕組みの絶妙さ、内容の峻厳さにただただ頭を下げ、驚愕に恐れおののくばかりである。恐らくその意味するところは、**「陰」と「陽」という相対する時空（極）を貫いて流れる**

すべてのエネルギーはその「陰」，「陽」二つの世界を一巡して初めて整合体（同一数）の姿をとる、すなわち、すべてが「陰」と「陽」の場を経ることにより０に還ることを表わしているのであろう。もう一つ突っ込めば**「すべては循環と言う活動形態の中で一巡転（回転）することにより同一姿になり、そこで改めて「陰」と「陽」が相和することにより、そこに生じた差、発生したエントロピーの負荷などはすべて中和され（０）になり、まっさらな状態に復元されるのである**」を示すのではなかろうか。〔現代科学は「陽の世界（物質世界）」のみを対象にしているのでエントロピーの増大により物質世界はいずれ破滅すると考えているようである〕。【詳細は『神の方陣』上級講座（３）参照のこと】

『神の数学』では０に還ることを「成った」と呼び、すべてが完成したことを表すものである。恐らくこの概念は今の我々の世界には無いものであり、貴方の心には響かないかも知れない、しかし真実は真実であり、結果は何度試みても変わらないのである。是非、貴方の手で計算を試みて欲しい、道筋さえ分かれば小学生でも簡単に出来る問題である。また、その手法を学び取れば、『神』の最後の牙城である『神の方陣』における数百、数千、数万の「方陣図」に応用処理できるものである、たとえその「方陣図」を宇宙大に広げても同じ理がまかり通り、同じ結末が現れると言う摩訶不思議な結果が現れるのである。これはまさに「天の理」であり、「宇宙の律」の存在を示すものである、我々は謹んでその真実を学び、知識の中に組み入れなければならぬのである。貴方自身も多分、探索の輪を広げるにつれ次々と現れるその妙理の数々に思わず感嘆の声を上げ、唸ることになるであろう。

【更なる詳細は『神の方陣』上級講座（３）参照、そこには「図解」と「計算図」が有り、簡単、小学生でも理解可なものである】

⑥この表の対角線を挟む各数列を見て欲しい、それらはすべて**多重鏡面構造（シンメトリー）**であり、またその各数列も中心を挟む鏡面対称の形をもつているのである。、それはすなわち**一つの対角線を挟んで鏡面対称を見せていると同時に、そのままもう一つの対角線に対しての鏡面対称構造を有している驚くべき二重構造的鏡面体を示しているのである**。それは可逆的な働きにより自己調和性を整えようとする「自然の驚くべき調和作用」、「自己浄化作用」の表れ、すなわち大いなる自律性の発露と言うべきものである。またそれにより「**０の本質**」を持つことになり、一つの『宇宙具象』、すなわち『易』に言う「太極的存在」になつているのである。惜しむらくは現代科学は未だその超具象には気がつかず、ただただ考えあぐねて溜息を洩らすだけである。

⑦この「数図」,『ひふみ‥九九算表』（宇宙次元原理表）こそ四,五千年以前に存在した古代日本に起源をもつ『神の易』であり、「中国易」の元型ともなったものである。その後　BC2400年あたりに中国の留学生の伏義、神農によって「方陣の形と概要」が中国に持ち出され,そこで「中国易」（周易）として再生されて大いに勢いを振るったものである。今の歴史では『易』は伏　義、神農により「馬紋」、または「亀の甲羅」から見出されたものとしているが、それは単なる神話であり、事実ではないことは誰にでも判るものである。考えてみるがいい、彼らが抱えていた「３次方陣」を示す「河図」、「洛書」の中からはどうあっても、太極、両義、四象、八卦等の諸元は一切出て来る事は無く、それは一つのメタファー（隠喩）をあらわすものにすぎないことを。哀れにも、それを求めようと「３次方陣」に挑んだ万人はただただ頭を抱え呻吟苦悩しながら生涯を終えているのである。そこにあるのは言葉だけで示されているStory（講釈）だけが空しい形を止めているだけであり、はっきりとした象証を持たない哲学的

な響きを持つ言葉だけが並べられているだけのものである。それを明らかにしているのが『易』の注釈書である「繫辞伝」である。そこには『易は典要をなすべからず』、「すなわち法則の通りではない」、「あまり突っ込まないで欲しい」と書かれているのである。今では中国でも『易』は見捨てられ、余り見向きもされない。ところが上記の『宇宙次元原理表』においては整然とした**太極**、**両義**、**四象**、**八卦**が姿を現し、すべてが型通りに諸象を説明し、我々を唸らせるのである。これはまさに、現在の古い『中国易』、すなわち真実を持たぬ反自然的な「易もどき」からは脱すべし、そして自然基本構造に沿った『神の易』、すなわち自然の示す真の『易』を用いることにより宇宙万象を追求同化し、自然の真実を学ぶべしとの大いなる示唆であろう。これは現文明史始まって以来の大きな『神の知』の出現であり、日本こそがその初発起源を持つ世界に冠たる国であるとの「大いなる証」としてここに出現したものである。それら古代の知のすべては既に甦り明細文書として私の手元にあるのである。必要とする方は是非参考にして戴きたい。（ひとつ、そのあたりの事実をコンピューターあたりを用いてこれら「易図」の真実を明らかにし、その「歴史的真実」及び「方陣の内容真実」を糺そうとする才ある者の出現が待たれる。この仕事を受け継ぎ、完成させた者はその名を永遠に歴史に残すであろう。我こそは類い稀な洞察力を持つと自負する方、人には負けない熱意と情熱、そして愛国心を有するとお考えの方は是非手を挙げて戴きたい。）【詳細は『宇宙次元原理表秘原図』№18、及び《数学幻視考》魔方陣（８）（９）(10)を参照】

⑧ここに示された『宇宙次元原理表』（九九算表）にある**縦の並び（縦数列）**、**横の並び（横数列）**、**二つの斜めの並び（二つの対角線数列とその並び）**、その４ケは全く同一な数表現（次元性表現）を持っている事を表すものである、何たる事であろうか、その事実は今の私にさえ畏敬の念と驚異感動の戦慄（わななき）の心を覚えるものである。それは「現代数学」では到底不可知であり、不可侵の存在域にある『神の知』の一端の現われとも言うべきものであり、また『神』は「数学性」を持つとの風聞を物語るものである。世の中の神も仏もあるものかと世を拗ねている方々よ、せめてこの事実だけでも自らの手でもって篭絡し、そこにある感動と感無量の境地を見定めることを望みたい。それにより、その頑是無い心に少しでも潤いを持たせ、感謝と生き甲斐、そして確たる信念を持って残りの人生を有意義に歩んでいく、それこそまさに醍醐味のある生きざまと言うものであろう。すべては貴方のこれからの心次第で変わるのである。

⑨これら「数」がよどみなく開示する「神の秘」を見ていくとすべては必然であり、偶然なんては少しも無いことが分かってくる、すべては神のセオリー通りに動き、そして完結しているのである。すべては敷かれるべくして敷かれたレールの上を我々はその通りに歩っていただけである。『神の数学』を学んでいくとその結末を読み取る事すら可能であり、それが常に一定のサークルを描きその上を移動していることが分かるのである。残念な事にここはインターネットの世界であり、判りやすい図形、図象を用いての説明等は私には出来難く、ただただ涙を飲むだけである。例えば上記の①～⑧の説明も数図表を用いれば万人が即理解出来るのであるが、悲しいかな文字による抽象的な説明と化し、甚だ要領を得ないもになっているのも甚だ心苦しい限りである。次のものもまた同様なものであるが、願わくば、諸氏の優れた洞察力をもってそこにある深い意味合いを十分に汲んで了として戴きたいと思う。

（緑の部分が**『九九算表』**の部分、その両端の≪０≫群を重ねて円筒形にしたもの、それが**（循環世界）**であり、、またその円筒を転がし、転写して数を無限に広げたもの、すなわち転写した影、**転写されたコピーの世界、それが（直線世界）**である。「現代数学」は無限に広がりを

持つ直線世界（十進法）が基本フレームであり、**直線数学**の形をもつものでる、故に「線形数学」と呼ばれていることはご承知であろう。インドでは現代数学を称して**直線数学**と呼んでいるのは御承知のとおりである。それは循環系を基本ベースに持つ「自然」とはそりが合わず、『自然の心』、『自然の法則』は一切読めない、解けない状態であるものである。見るがいい、上で求めた『ひふみ‥方陣』の答、すなわち各次元数の現れ出た答（青い数字）とこの『ひふみ九九算表』の次元数（赤いセルの数字）は見事にシンクロし、完全なる重なりを持っている事実を！。果たしてそれは何を意味し、何を告げようとしているのであろうか？。それは『ひふみ‥』算こそ自然と融化通合している唯一の[数算の理]であり、その計算手法である事を示す貴重なものである。そのあたりを貴方の鋭い洞察力をもって更なる中を覗き、その真実を探って新しい情報をもたらして戴きたい。それにより我々人間の知は一段と進化し、「神の知」とその息吹に触れることが出来るようになるのである。

≪古代日本に封じられた「真実の九九算（ひふみ九九算）」の素姿を読む（古神道祝詞『ひふみ‥‥天地の歌』より）≫

（みどり色の部分が「ひふみ‥九九算表」である、それ以外はただ転写による広がりである）

→無限につづく（フット・プリンテングのように）

０次元	→	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
１次元	→	0	1	2	3	4	5	6	7	8	0	1	2	3	4	5	6	7
２次元	→	0	2	4	6	8	1	3	5	7	0	2	4	6	8	1	3	5
３次元	→	0	3	6	0	3	6	0	3	6	0	3	6	0	3	6	0	3
４次元	→	0	4	8	3	7	2	6	1	5	0	4	8	3	7	2	6	1
５次元	→	0	5	1	6	2	7	3	8	4	0	5	1	6	2	7	3	8
６次元	→	0	6	3	0	6	3	0	6	3	0	6	3	0	6	3	0	6
７次元	→	0	7	5	3	1	8	6	4	2	0	7	5	3	1	8	6	4
８次元	→	0	8	7	6	5	4	3	2	1	0	8	7	6	5	4	3	2
９次元	→	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
１０次元	→	0	1	2	3	4	5	6	7	8	0	1	2	3	4	5	6	7

↓（無限につづく）

≪この表はまさに『神』の妙であり、『神』のもつ数表の最高位に属するものである、そして、「宇宙万象の本質」を開示すれば、すべてこの数列の何れかに行き着くのである、まことに不思議な数表であり、無限なる響きをもつものである。まさに『神の心』を秘めた偉大なものと言うべきものである。≫

≪試みに**上記各次元の数列をどれでも結構、それらの二つを選び、加算か減算を行うがよい**（ただし神算法で）**、すると現れる答は必ず上記次元の数列のいずれかになるはず**である。そのような不思議な事実、自然が語る数の妙なる調べがここには揃いい、並んでいるのである。それが『ひふみ‥九九表』であり、日本の歴史とｒ共に歩んできた「稀代の数表」なのである。要するにこの事実とは各次

元の基本エネルギーが離合、集散することにより新しく生まれたエネルギー態とは必ず元のエネルギー態の何れかに還り、何れかの母体に収斂同化された姿に戻るのである。それが永遠な不変を謳歌し、極まりの無い循環世界をつくりあげている自然の本当の姿である。そのあたりをしっかり考える事により、現代科学では分からない輪廻転生、因果の法則の実在などがしっかり浮かび上がってくるのである。≫　*例、②+⑥＝0876543210、③+⑦＝0123456780、④＋⑤＝0000000000*、⑧－⑦＝0123456780、‥‥‥。

一つ断っておきたい、「真の知」、「宇宙普遍の真理」とは宇宙の持つ波動と共鳴し、その波動を受け継いだ共鳴の響き（調和）をもつものである。それが本当の宇宙原律（調和律）であり、共鳴調和を持った「自然象」の表れである。 悲しいかな、我々の現在の「粗い意識波動（宇宙原律とあまり共鳴しないもの）」では『宇宙共鳴同調波』の中の低いレベルの波動領域あたりと同調するだけであり、もっと「高い意識レベルを持つ精妙な波動」とは共鳴せず、意識的な交流は出来ないのである。何故ならば、共鳴調和するための法則知の存在をまったく知らず、想像にすら描いたこともないからである。その事実を頭に置き、高ぶった頭脳でこの上記の「数表」を眼光背紙に到るような真剣な目でとくと検証しながら、しっかりと読み込んで戴きたい、するとそこには数十、数百とも言える「真の知」、「高いレベルの超知」が連座、連立して我々の方を向いているのに気がつくはずである。これらは我々のまだ直面していない未知の「宇宙普遍の真理」であり、「神の知」と言うべきものである。 すべては「神の律」である一定の『宇宙波動』を持ち、それにより見事な調和と秩序を見せ泰然とした並びを持っているのである。まずそのあたりから調べ始め、納得のいくまで調査、考証して戴きたい。それが貴方自身の知を磨くことになり、新たな知の発見につながるのである。この『神の数学』を学び熟知することにより新たな「神の真理」が貴方を迎えて、大いなる未知の世界に誘うはずである。【詳細は『宇宙次元原理表秘原図』№1～№18参照】

これらのすべては現代人の未だ所有していない「超数理知」であり、完全な右脳の「意識数学」とも言うべきものである。また言葉を変えればこれはパターン認識による『哲数学』であり、「図形」と「数」を用いて「目に見えぬ世界」、もしくは「形而上の世界」を探求するための「意識のみが開示できる超数学体系」である。それは恐らく、現代数学のおける「トポロジー」、すなわち「位相数学」と同一のものであろう。（『位相数学』とは図形や標記を通して空間的位置を見たり、形の中に意味を見出すことにより見えない「精神世界」を探る一つの学問である。いわば、自然界にある知的デザインの意図やその意味を探ろうとするものである。）

≪ほんとうの、ほんとうの私の独り言≫

ひょっとすると、この表はアインシタインやセオドア・カルッア達が問題にしていた次元テンソル図かも知れない、アインシタインは４×４の方陣である「４次元テンソル図」を用いてアインシタイン場と言われる「重力場」を理論づけ、カルツァはもう一つの次元を付け加えて５×５の「５次元テンソル場」を作り、そこからマクスウェル場と言われる「電磁場」を見出したのである。 それから、半世紀以上、テンソル図についての消息は全く聞かれないのは如何なる訳であろうか、科学者達は諦めて投げ出してしまったのであろうか、 甚だ寂しいかぎりである。

また、近年先端物理学者達が盛んに論議を重ねている時空の問題、すなわち「この宇宙は 10 次元の構造体であり、その中の 6 次元はコンパクト化されて我々の眼には見えなくなった」としているが、この問題についてははこの表にて十分に説明可能なものであり、数字的にも位置的にもピッタリ合うものである。これは調べれば調べるほど全く矛盾のないう奇妙な表であり、不可思議な『理』がコンコンと湧いてくる摩訶不思議なものである。現在、6次元はコンパクト化され、たたみこまれて見えなくなったと科学者達は述べているがその表現は正しいものではない。 ここに示されている図は 10×10 のマスを持つ 10 次元図であり、それを説明するものである、よく見て欲しい、ここには「見えない 6 次元」と「見える 4 次元」が共存し 10 次元構造体をつくっている事を「数」で示している。 しかし、よく見ると我々の世界の見える「4 つの象」は同じ仕組みであるが、他の見えない「6 つの象」は異なった反象構造（エネルギーの流れが反対）になってい事に気がついて欲しい、

それ故に見えぬ、感じないと言う認知不能の状態を示しているのである。それはこの図をよく検証すればその道理や意味は十分に分かるはずである。 ついでのこともう一つ苦情を申し上げたい、科学者達は 10 次元宇宙と軽々しく発言しているようであるが、そんなものは無いことにその中に気がつくであろう、彼等は平面的に見ているから 10 次元に見えるだけで、それを立体化すると一つ減って 9 次元宇宙になり、一つの「本質０」をもつ超立体的な構造体が生じる事を知らないのである。その仔細のすべてはこの図の中に「数」で導かれ示されている事に気がついていただきたい。すべては『数』が開示している時空次元の真実であり、真理である。 それは百年も経たないうちにひっくり返るような人間が作り上げた科学理論のようなものではなく、確かな自然の仕組みを表す悠久無辺の「神の図」の姿である。 【詳細は『宇宙次元原理表マルヒ原図』№.１～№.１８ 参照のこと】 【それは誰にでも判る簡単なことである、ただ、私が二言、三言の説明で誰でも理解可能で、頷けるものである。】

ご覧のように各次元は次から次へと綺麗に繋がっているのである、この図は宇宙の形を平面的に表しているものであり、基本となるものである。そこに示されているある法則（エネルギー則）を知り、それに基づき平面図を処理する、するとそこには驚くべき立体像が出現する、すなわち真実の「宇宙の形」がおもむろに現れるのである。その形とは現代の宇宙物理学が提示しているドーナツの形そのものである。そのあたりの立体化の秘密と仕組みは【『神の数学』で解く超物理の世界（10）】に詳細を記してあるので、そちらを是非参照して、自らの手で確かめてみて欲しい。要はとにかく自分で目を開き、とくと見ることである、そして次には現代科学知で雁字搦めになった脳をほぐし、それから心を開き始める準備にかかることである。

ここに記されているように正しく『数』を扱い、そこにある「数の理」を認めて従えば『数』も我々を迎い入れ「真実の答」を開示してくれるのである。かのアインシュタインは次の名文句を残している「自然の神はこすからく、なかなか一筋縄ではいかないものであるが、それだからといって決して意地悪ではない」、よくこの言葉を噛みしめて見るとそれは我々の見方そのものに問題がある事がわかる、こすからく、意地悪に見えたのは自然を解する心、すなわち数の見方、計算手法が「本来の自然のもつもの」と大きく異なり、的外れのものであったからである。正しい自然仕組みの解法を用いて対応すれば自然の神はまことに寛大無比、かつ素直、実直この上ないものである。そのことは日頃『神の数学』に親しんでいるとひしひしと伝わり、心が知らず知らずに和み、穏やかになってくるのである。

【試みに『宇宙次元原理表』を細かく検証して貰いたい、そこには驚くべき『神の理』が数多く示されており、まさに「数の理」を学ぶ上では大変重要で貴重なものである。 【詳細は「原理表」No１～No18 を参照の事。】

≪不思議な『理』を語る数の「独り言」≫ ・・・・・・

1.［科学編］そこ、すなわち、『宇宙次元原理表』には「数の理」、「０の理（超理の理）」、「フラクタルの理（数の理による）」、「量子の理（色則是空）」、「あの世とこの世の理（相反エネルギー）」、「宇宙時空の理（エネルギーと場の相対理）」、「サイコロの目の理（陽電子理論）サイコロの流転現象」などがぎっしり詰まっている、もう一つ、〔サイコロの目とは正しく書けば「賽転の目」、すなわち「賽（あの世＝見えない世界）を転（変化させる）の目（数）］であり、古くから神占に使われていたものである。果たして超古代に生をうけた何者がこの数の秘密（あの世とこの世の存在）に気がついたのであろうか、「サイコロの目」の言葉が作られ、世にあるかぎり、その意味を知り、言葉をつくった超人的頭脳の持ち主、神の頭脳の持ち主が必ずいたはずである、何時の時代であろうか？。

2.［哲学編］ また、「原理表 No18」,[数学幻視考、№.10」においては「易」の原図、すなわち『神の易』（日本易）を披露してある、そこには喜び溢れる生き生きとした「陰」、「陽」の理が『数』で語られているのである。中国の「易」のように曖昧模糊とした不合理が連なるものではなく、整然とした「数の列」により太極、両義、四象、八卦が「陰陽」の譜を見せな

がら「天の理」、「地の理」が嬉々として次々と展開されていくのである。その様はまことに驚嘆の坩堝であり、「神秘の数理」の萬華鏡でもある。**また、「数」が語る「自然の仕組み」、自然数が表す「陰陽の大理」、天地を貫く「妙なる調べ」、すべてはこれ『天の理』であり、『地の定め』の道標、すなわち「自然の規範」となるものである。**

3.［神編］　面白いことに、『神の易』（日本易）を展開していくと、そこに現れるのは『神の理』と『神の存在証？』である、『神の数学』を調べているとあちらこちらに『神』の姿が「数」により描かれているのである。しかも現代人が夢想にもしなかった手法を用いてである。そこには驚くべき真実が秘められ、隠されているのである。数字が示す『神』とは自然のすべてに偏在していて、自然万物を顕在させているもの、いわば守っているものである、その事実は上記の『宇宙次元原理表』をよく調べ上げれば自ずから分かるものである。そこには「神」の存在が如実に描かれ、「神」の存在が無ければなにごとも事は運ばれぬことを数がハッキリ謳っているのである。また同様に『神の数学』の真髄である『神の方陣』においても、すべて『神』のかかわりなしでは「正しい答の数」を見ることは叶わず、必ず『神の数』を特定箇所に置かなければ「正しい答」は姿を現さないのである。その『神の方陣』の方陣図の数とは驚く無かれ、数百、数千、数万、無限にも及ぶものであり、これこそまさに「自然の規範」の表れ、「神の律」の存在の証となるものである。

　しかるに忙しさのあまり、そのあたりのハッキリとした追求はまだ行ってはいないのが悔まれる、１０数年前はもっと老人になってからでも遅くはないと考えて、あまり手をつけなかったのであるが、今はもう行く先もおぼつかない立派な老人である、でも考えている暇が未だに取れない悲しい現状であり、それがまことに悲しい限りである。

　詳しく調べたい方には『神の数学』講座のいずれかをお送り申し上げる。（Ａ４版　約１６～２２ページ）をご送付申し上げる、ただし、当方は貧乏を絵に描いたような状態なので、郵便代（切手＋封筒代＝２００円くらい？）だけは負担していただきたい。

FAX　０５５８　（７６）　４３３４　　『神の数学』主幹　　佐藤敏夫　（意識数学者）

著　　著作権は上記本人に属する(Copyright　of『神の数学』belongs　to　T・SATO。　All　Rights reserved)

≪数のぼやき≫　記述〔1〕「現代数学(十進法)の誤りを糺す」　Apr. 7.2005.

（「十進法」は人間の手になる計算法であり、物質欲を満たすためのものものである、それは自然の用いている思考（意識）的計算法とは全く異なり、人間独特の計算法であることを知って欲しい。ここにある『誤り』とは、すなわち「現代数学」をもって自然を解き放とうとする行為を指すもので、それを用いている限り自然の心は読むことはできない、法則をつかむことはできないと言うことである。）

　気が向き次第、驚くべき新しい『数の理』と、その数々を簡単なものから順次知らせていきたい。すべては日本から世界に向けて発信されるべきもの,すなわち、**日本の古神道から見出された目を剥くばかりの「超知（叡智）」であり、二十一世紀から始まる現代文明の衰退、そして滅亡から世界を救うものである。**　ただし、気が向き次第で勘弁して欲しい、何故なら、目に余る悪態、中傷、からかいには

堪忍袋の緒が切れる時もあり、そっぽ向きたい時もあるからである。手元にはその資料の数々はすでに揃ってをり、（16～22ページで約99巻）,すべ は世界初の「超数理知とその律」であり、日本の超古代の「数哲学物語」の数々である。それを究めれば何と「現代数学」の薄っぺらさ、その内容の味気なさ、その内容の幼稚度にはほとほと呆れるばかりであり、人類の行く末も相極まったとの感じがするものである。要するに**その元凶はすべて「10 進法」にあるのであり、「数の数え方」に端を発しているものである**。 そもそも「10 進法」計算とは人間の指が 10 本あり、数を置くためには便宜であったゆえの計算手法であり、自然法、自然規範に基づくものではな.い。それは単に人間が考え出した独断的な計算法であり、宇宙普遍なものではないことをまづ理解すべきである。そのことを知れば、貴方の持つ現代知の80%は改革されたも同然である。とにかく十進法を用いている限り「自然の本質」は隠されたままであり、決して振り向いて笑みを浮かべてはくれないことを知って欲しい。【参照 **「現代数学の誤りを糺す」**真理講座（3）（4）（5）】

「現代数学」は数の表面しか見ず、その奥にある真実の魂である「数の心」、すなわち『本質の存在』を知らないのである。それは古代人が知ついた天の叡智、「数の本性」であるが、現代ではすっかり忘れられ、誰もその存在すら知らないものである。 考えてみて欲しい、超古代に連なる大なる歴史をもつ国々、そしてそこにおける「古い数」のあり方を、、インドの数は1から9までの数であり、ユダヤのカバラの数、シュ-メル、バビロニャ占星術もしかりである。それらすべては9で終わり、新たに1から始まる循環形態をもち、同一のものが果てしなく繰り返されると言う円環状態にあることを謳っているのである。また驚くことに日本の古神道の「ヒフミ・・・・」も1から9までの数しか無く、10から以降は空白が連なっているのである。そんな馬鹿なと疑う方は「ひふみよ・・」に続く11，12，13・・・・を口唱して見るがよい、果たして出来るかな。確かに百、千、万、はある、しかし、これもその間を繋ぐ数詞は一切見出す事は叶わないはずである。そこから考察すると百、千、万、とは後の世に置かれた数、誰かが無いのを恥として付け加えたものとするのが正しい見方であろう。 また、これらが世界で最も古い歴史を持つ国々の一団であることに注目すべきであろう。一体、そこにあった「古代の数の理」とは何であったのか、それについては誰も知るものもなく、関心をもって調べる者も現れず、ただただ「十進法」に帰依するだけである。しかもその数手法をもって自然万象を読もうと言う到底叶わぬ夢を追いかけ、ただただ苦しみもがいているのである。 しかもそれは現代文明が発祥して以来数千年の長きにわったて、無為に人の心を弄そぶだけで、決してその秘めたる本質を明かそうとはしないのである。何たることであろうか。

そもそも、日本においては、何も知らぬ心なき神道家達が古神道にある「ひ,ふ,み,よ、・・・・・・ここ、たり、」の「たり」を引っ掛けて10に直し、十進法に迎合してしまったのが間違いであり、早とちりであったのである。それにより本来のあるべき意味が完全に失われ、誇るべき日本の「古代の数理」は闇夜に埋没し、跡形も無くなったのである。本来そこにある「たり」とは「足り」であり、[そこで完了]の意味である。その意味を解し、手順に乗せたところ、そこには驚くべき古代の秘密、すなわち日本の失われた言霊、**「ひふみ・・・・」の秘密**や、**「アイウエオ五十音図」の秘儀**、はたまた、行き方知れずの**『カムナ**

ガラの道』等の驚くべき内容がすべて白日の下に忽然と現れ出て来たのである。それどころか、最後には宇宙自然の「普遍数道」である**『神の数学』**の姿まで見出され、その処理、整理に追われた毎日が約15年間休みなく続き現在に至った次第である。【手元の『広辞苑』を調べると「たり」とは「動作が完了した状態」、「そこで終わり」、または「足り」は「そこまで」、「すべてが終了」、を表すとある】　　（そのあたりの詳細は「数学幻視考『古神道』①②③④⑤⑥⑦⑧」 参照）

要するに自然の秘密、天空宇宙の謎を解くには「10 進法」の数の運びでは駄目なのであり、「古代の数理」を用いなければ解き放つことが出来ないのである。それからもう一つ申し上げたい、**「現代数学」の最大の欠陥は負数（マイナス）を用いていることである**、自然には負数概念などは一切無く、あるのは正数の姿だけである。 自然は負数的な要素が生じた場合、それを上手な方法で正数に転換して計算に用いているのである、当然 『神の数学』もそこに注目し、苦心して転換法を見出し、自然的な計算手法に納めて答を出しているものである、だから「自然の秘密」を素直に探し出せるのである。ただ、口先だけの理論、白昼夢的な言葉であると非難されないために、**自然数法（古代数理）による計算**とその実例を少々掲げておく、出来れば十分な思索検証を試み、更なる新発見があれば、貴方の知のポテンシャルを極限まで膨らませることにより、完全解明に至って欲しい。それにより貴方の「新たな知のスタンダード」が開眼し、新たな知の一歩が始まるのである。（要はとにかく好奇心を持ち、しやにむに突っ込んでいくことである）。

そもそも「自然数とは123456789‥‥」であると「現代数学」が定義しているのが大間違いであり、**本当の「自然数とは0123456789‥‥」と最初に0が無ければならないものである**。そのことは『神の数学』ばかりでは無く、「ブルバキ」という現代数学者達の先端グループも主張していることである。まずはその『神の数学』の主張の正しさ、その計算手法のあるべき正しい姿を下に記した計算表により確めて戴きたい。これは「正しい自然数」を神の数学の『禊算』に順次用いることにより、「数の正しい本性」が見え、「正しい数の在り方」が誰にでも分かることを示すものである、まずそれを見て戴きたい。まず自然数のそれぞれの序を順を追って計算しその答を出すのである。 それを**『禊算』を（A）＝10 進法、（B）＝神の数学手法**　で行い、その両者の結果を比較対照して見る、ただそれだけである。

そこにはまさに驚くべき「数の証言」があり、我々現代人の肝を寒からしめる事実が開示されているのである。 そこにあるのはまさに驚異の事実であり、大変な「数の示し」である、そのことをしっかり留意して更なる十分な検証を重ね、真実の追究を行って欲しい。まさにこれは人類の一大事であり、西洋科学文明のリボリューション、新たな「知の世紀」が始まろうとしているのである。

0123456789の正自然数を順を追って禊算を行い、その答を見る。（すべてが不思議な数の表れである）

〔A〕計算機で行う（十進法）、　〔B〕神算法で行う（古代の理、『循環法』）

（ここには負数は無く、また十進法も無い、あるのは「自然の算法『ひふみ‥算』」だけである）

答＝　0　　答＝　0　（すべて『神の数学』による「超数学の世界」より転載）

9　　18

198　　207　　【『禊算』→ この計算の詳細は『超物理の世界（2）』参照,】

3087　　3186

41976　　42075　　禊算（例）

神の数学　十進法

530865　　531864 ‥‥‥‥‥‥ 543210－012345

＝**531864**　（530865）

6419754　　6420753 ‥‥‥‥6543210－0123456

＝**6420753**　（6419754）

75308643　　75318642‥‥‥76543210－01234567

＝**75318642**　（75308643）

864197532　　864207531‥‥‥‥　以下すべて同順手法

‥‥‥十進法では不能　？　-　　9753186420

《『禊算』とは存在する数列からその逆数を引くもの》である。同じ仔細は古文献である[物部秘書」、最近では「ひふみ神示」の中にも見られる。

①横、縦、斜めの各数列の数序を調べ、欠き、乱、不整合を見る、要するに「自然の理」である自然数の並びを見るのである。例えば〔A〕の最初の縦列、０９１３４５‥と〔B〕の縦列、０１２３４５‥はどちらが自然数列に則しているのか、要するに幼児でもすぐに判るものである。

②中心を挟んでそれぞれ対称位置にある横列の数字はすべて和して９であり、０である、なぜか？。それは自然象である事を意味するものだからである。

〔注〕（中心線を挟んで対称位置の数は和して９になり、０になることはこれらの各数列はすべて本質０である、すなわち自然の本質０を持つと言うことである. これが数理の基礎であり、大元なのである。最近の西洋の数学者達もこれに気づき、その答を求めようとインターネット上で悲痛な声をあげているのであるが。しかし、その答は日本にしかなく、彼等にはどうしても解くことは出来ないものである。　まことに日本は不思議な国であり、有り難い国である）。　【「『神の数学』で超数学を解く講座」より】

まず、〔A〕の答を見て貰いたい、そこに並ぶ数列には不連続であり、乱れが多いものである、①　縦の列には2の数が欠けている、②　縦の各列には同じ数がダブって現れている、1番目の縦列――09、2番目の縦列――90、 3番目の縦列――88、 4番目の縦列――77‥‥‥と順を追って現れて、自然の数の本当の並びからは外れているものである。この事実が示すことは**「現代数学」は真の数学的自然構造を持たない**ものであり、まさに真実不在の「擬似数学」であり、「数学モドキ」とも言うべきものであろう。

（また、ここには0＝9の確たる証拠さえも出ているはずである、それを見出し調べて欲しい）。

しかるに、ここにある**〔B〕**の見せる、縦、横、斜め列の乱れの無い数字の並び、そこにある互いに調和を保った自己調和的な数の結びつき、それはまさに相互に関連し合ったダイナミックな世界の表れと言える。またそれは現代の力学的世界観ベースを厳しく否定している物理理論の「ブーツストラップの世界」を髣髴させるものであり、まさに自然世界の本当の姿、あるべき真実の姿を我々にかいま見せてくれるものである。これはまさに長年、学者達が求めていた「ブーツストラップ世界」の姿を数が示しているものであり、『神』が数を用いて自然界に刻んだ『真理のタブレット』と言うべきものである。(その証とは縦、横、斜めの数列の差にある、その差は縦列は**1**、 **横列は2**、 **斜め列は3**と綺麗にそろい、互に自己調和性を持ちながら互いに関連しあっている事実をしっかり検証して欲しい。)。

確かにこの**〔B〕の答は縦、横、斜め、すべてはきれいな形で相互的に関連し、しかも正しい秩序をもつ整然とした数字が姿を見せている。**これが人の編み出した「十進法」と自然の持つ「循環法」の違いでもある。だから私は「現代数学」は欠陥数学であり、不整合数学であると物言いをつけ、人には笑われ、さげすまれている始末である。願わくばそこには「自然界普遍の数の在り方」、「自然界に即した正しい数のあり方」が厳然として存在していることを知って欲しい。ただ我々がその事実を知らないだけなのである。上述した「数の図」などは、まだ氷山の一角にすぎず、まだまだ沢山の驚くべき「数の証言」と「数の図」が『神の数学』の中には数多見出され、答を出すように呼びかけていることを改めて申し述べておきたい。　(詳細は『超物理の世界』(2)参照)　(「禊算」の資料が必要な方は申し出て欲しい、ご送付申し上げる)

人類の編み出した「現代数　学」、それは「自然の規範」と対比すること無しに、一人合点のまま構築した異端の数学体系と言うものである。ただそれは人間間の符牒、決め事の印としては有効ではあるが、いざ自然に対して用いようとしても決して自然は受け付けず、対話不能の結果で終わるのである。そこで、あわてた先端物理学者や宇宙物理学者達は今必死になって宇宙自然と対話が可能な「新しい数学手法」と「その言語」を探し始め、最後には神話、伝説、超古文書などに目をつけ「新しい数学の芽」、「数学革命の種」を尋ね歩いている現在である。ところが偶然にも、それは世界で最も古い宗教である日本の『古神道』の祝詞のなかに眠っていたのが私により見出され、今、目を覚ましたのである。それが『神の数学』であり、驚くべき手法をもって「自然との対話理法」を明かし始め、あまつさえ人類の未だ知らぬ「超物理」、「超数学」、「超哲学」等に秘められていた真実さえも提示しょうとしているのである。 信じられないのはそこには人類が始まって以来、探し続けていた『あるもの』がしっかりと姿を見せているのである。それは浅学非才な私の口からはとても申し上げられないまことに尊いものであり、恐れ多いものであり、人類の発祥以来探し求めていたものである。それについての意義詳細は私よりもつと鋭い洞察力のある方々と検証、論議を重ね、ある程度、納得いった時点ではじめて明らかにしていくことにしたい。

今まで人間は自ら編み出した「十進法」こそ唯一のものと信じ、それを用いて自然界を解こうとしてい

たので、自然界と結果が合わず「自然は難しい」、「自然の心が読めない」とぼやきにぼやいていたのである。 しかし、真実は自然が難しいのではなく、我々の自然へのアプローチの手法に間違いがあったのである、正しい方法を用いれば自然はまことに寛容であり、素直なもので、子供にでも心を開いてくれるものである。しかし、我々の手法に間違いがあれば自然は決して真実を明かさず、ただただ隠れるだけであり、ただただ顔をそむけるだけである。今の地球的規模に広がっている自然の大反乱、すなわち自然災害は現代科学文明の生んだものと声高に「科学」を非難しているがそれは大間違いである、真犯人は「科学」ではなく、その科学の土台骨を作っている「数学」、すなわち、『10進法』に間違いがあったのである。 その計算法が原因で自然との間にキシミが生じ、それを是正すべく浄化作用始まり、本来の自然に戻ろうとしているもの、それが我々が杞憂してい自然の大変動であり、いわば自然の大きなクシャミなのである。今の科学概念を用いている限り永遠に自然と共に歩むことは出来ず、益々そりが大きく合わなくなっていくのは誰の目にもあきらかであろう。それに気がつくことが無く、このまま進めば、ますます距離は離れ、同時に事態の深刻度は増し、遂には人類の減少、強いては人類の滅亡という事態につながっていくのである。今となってはそれもすでに時間の問題であろうと思われる。現在の度合いから見て、残されているタイムリミットは僅か20年～40年くらいが最大限度であると見てもいいのではないのか。　【まことに不穏当な書き方ではある、資料が膨大過ぎて記しきれず途切れ途切れになり、申し訳ない。各部分の「詳細資料」が入用な方は連絡戴きたい】。

≪数のぼやき≫ 記述〔2〕「数の持つ素晴らしき輝き」 Sep, 20, 2005..

本当の「数の仕組み」、「真実の自然の計算仕組み」を伝授申しあげよう、それは自然界にだけ通じるものであり、「十進法」では決して見出せない自然の不可知領域、すなわち神の領域を「自然数」により導き出し、解明するものである。それを学び取ることにより「宇宙次元の問題」、「時空の謎」さえ我々の机上に乗せて論議可能となり、更に目に見える形で示すことが出来るのである。彼等現代科学者達がその問題にぶつかり悩み、悶え苦しんでいるのも自然の持つ数の仕組み、その計算法を知らず、ただただ人間が生み出した十進法を用い、自然の壁を破ろうとしていることに原因があるのである。「十進法」では決して自然の心を開くことはできず、それを用いている限り100年経った22世紀になっても今とあまり変わらなく、相変わらず学者達は頭を抱え、呻吟の巷をさすらい続けていることであろう。

「自然の真実計算仕組み」、それは何度も申し上げた通り、古神道の祝詞「天地の数歌『ひふみ・・・・』から現れ出た尊い『神の数真理』そのものである。それを頭に置き次に掲示する問題、そして答を考えて欲しい、願わくば好奇心の旺盛な方、洞察力の鋭い方は是非挑戦を試み、見事その計算法を解き明かし、天下に示していただきたい。これは「神の出した神聖なクイズ」であり、『人間の知』の如何を問うべく、神の与えた一つの試金石であり、稀代な人知のメンタルテストと言うべきものであろう。

冒頭『神の方陣』の秘密（10）に示した『ひふみ方陣』の「足し算の計算式」をもう一度持ってきて、復習することにする。そしてそこに眠る誰も知らない数の真実、数図の持つ本当の姿を目覚めさせ、そ

の心を語ってもらうことにしょう。私は懼れる、果たして現代人はその数手法を解き、自在な「数の理」、すなわち『自然の数の仕組み』を身につけ、次のステップに躍り上がることが出来るであろうかと。これは単なる面白半分で遊ぶ「数の羅列表」ではない、この表こそ『神の数学』の神髄とされる『神の方陣表』である。 知の赴く者、あるいは未来に真理を求めん者はあらん限りの直観力と洞察力を尽くしてこれを開き、己の知の糧となして欲しい、それはまさに、「叩けよ、さらば開かれん」の言葉通りのものである。（小学生程度の解読力があれば解けるはず！）

「『ひふみ方陣表』(「自然数方陣表」,または『神の方陣』表）を覗き、「『神』の秘儀（法則）」をひそかに盗み見る」

（私は『ひふみ方陣表』とその解法を称して『神の方陣』と名づけ、自然真実諸般の解明に役立てているのである）

~~1次~~元体　２次元体　３次元体　４次元体（４×４）　５次元体（５×５）　６次元体（６×６）　７次元体（７×７）

1	12 34	123 456 789	1234 5678 0123 4567	12345 67801 23456 78012 34567	123456 780123 456789 123456 780123 456789	1234567 8012345 6780123 4567801 2345678 0123456 7801234

（すべて『神の数学』による「神の方陣」講座より転載）

《〝その真実を解き明かそう〟》**（世界初の数の明かす真実物語であり、日本発の新しい「物象数理学」である）**

上記『ひふみ方陣体』の**2つの対角線上の数字（数列）〔Two diagonal number〕**を拾い,「『ひふみ・・算』の加算法」にて加算する、果たしてどのような結果、結末（神の秘密）を見せてくれるのであろうか。果たして現代人諸氏はその数処理法を見破り、その答に行き着くことは出来るであろうか　？。（小学3年の問題である！！）　それらは次に示す通りである、是非検算され前人未到の秘密を解き明かして戴きたい。

『神の方陣』より≪計算の図≫〔１〕

０次　　１次　　２次　　３次　　４次

①0=0　②１＋１＝２　③１４＋３２＝４６　④１５９＋７５３＝８１３　⑤１６２７＋４１７４＝５７０２

５次　　６次

⑥１７４１７＋３８４０５＝４６８１３　⑦１８６４２９＋４８３７２６＝５７０２４６

７次

⑧１０８７６５４＋７１４７１４７＝８１３５７０２　→（つづく）　（計算法はすべて『ひふみ算』の加算法による）

よく眼（まなこ）を凝らして心を一つにして考えて戴きたい、ここには「十進法」では考えられない神妙な数の業が整然と伸び広がっているのである。まず、ここに示された二つの対角線上を流れる数列、それは完全なる90°　異なる位相空間性を持っているものである。学者によってはそれを称し、『陰』と『陽』の相異なる次元世界と呼んでいるものである。さて諸君、この数列の流れの方向性をしっかり見定めて欲しい、それは完全な方向律を持ち、驚くべき次元原理を次々と開示しているものである。要するに、すべてには確たる同一の秩序法則が見られ、同時にそれは『陰』と『陽』の相反する性質、その違いの詳細をはっきり解き明かしていることに気がつくであろう。これにより、自然には二つの異なった根本原理、すなわち『陰』と『陽』の二元が存在する事実がしっかり述べられているのである。　また、もう一つ上記の青い色の数字群、0，2，46，813、5702、46813、‥‥は不思議にも前に掲げた『ひふみ‥九九算』の中に置かれてある数列群そのものではないか、何と言うことであろうか、こんなことがあっていいのだろうか。これらの数の表れはまさに『宇宙次元原理表』の名に恥じない数列の出現であり、まさに真理のお出ましと言っていいものであろう。

現代人が否定し、古代の人々が肯定していた自然を司る『陰』と『陽』の二元の仕組みとは確かに存在し、しかも自然象を構成している基軸であることをこの『数図』が教えているのである。　何としたことか、現代人の驕り、現代西洋科学の砦はまた一つ潰され、また古代人の叡智が勝利を得たのである。貴方の持つ「現代数学」では決してこのような真実数象は現れる事はなく、ただ無為無策な数字が並ぶだけである。何たることであろうか、我々は間違った選択をしていたのであろうか。現代数学とは宇宙普遍の数学ではなく人間サイドの単なるローカル的な数法であったのである。

それはまた、『神の数学』の計算法は正しい、「完全な整合性」、そして「相対的な自律性」を持つ『自然の数の仕組み』である事を証明するものである、それは数の本質、本性を知らない「十進法」では到底それを知ることは不可能なものであり、想像さえも出来ないものであろう。【『神の方陣』講座より】

その答とは如何に！。　**それは1次、2次、3次‥‥と順を追って連結し、並べて見ると一目瞭然である。**

1次、2次、3次‥‥並列　→　**0246813570246813570246813570 2‥‥**、なんたること、そこにあるのは宇宙次元原理表（九九算表）の2の段（2差をもつ）の循環数列そのものである。それはまた、すべての次元体とはばらばら個々の存在ではなく、順を追って連続的に繋がっている階層

的な相関関係にある一つの構造体であることを示しているものである。願わくば、ペンと紙を取り自らの手で検証をして戴きたい。（先述の≪計算の図 1≫参照）

この〔1〕で語られた意味はすなわち、1次元体、2次元体、3次元体・・・・・・とは上記『神の方陣』(10)で示した様に、完全なる連続体、連続次元体そのものであることを更に物語るものである。 そこにある「神の秘儀」を探り、検証することは自然の真実を掴むための大いなる手掛りであり、またとない正念場でもある。それは次の大いなる「知の発展」を生み出す為のキイ・ ポイントでもあり、また一つのターニング・ポイントでもある。しっかり心に刻み込んで欲しい。またこれ以外にもこれら次元の連続性を示すいろいろな驚くべき手法が『神の数学』にはいろいろ存在している事を申し上げておく。そのあたりを調べるとまさに興味は果てず、引き込まれていくのは請け合いである。知に自信のある方はそのあたりを探って、その顛末を世に出すのも一興であろう、人類の未だ知らない『神の理』を自らの手で探る、これほど命冥利に尽きるものはないはずである。そこにある「真実」、思いも寄らぬ「以外さ」などは到底これらの比等では無く、更なる驚くべき作法をもつものであり、まさに「神の意識遺物」とも言うべきものである。是非それらを楽しみながら見出し、心を込めて検証されることを望む。すでに賽は投げられて現実的存在としてここにあるのである。 すべては「形而上の世界」の数の走りであり、宇宙自然のもつ「真実の算法」そのものとして私の手元に存在しているのである。 これら次元の連続性を示す由々しい資料を必要とする方には送付申しあげるので、それらを自らの手で改めてじっくりとご確認戴きたい。【証言の詳細は『神の方陣』中級講座（5）参照】

『神の方陣』より≪計算の図≫〔2〕

もう一つ面白いことを示しておく、これは**2つの対角線上の数字（数列）**を**『ひふみ算』の減算法**で処理したものである。一つ参考にして欲しい。

（A）

1－1＝**0**　32－14＝**27**=9=0　753－159＝**603**=9=0　4174－1627＝**3456**=18=0　38405-17417＝**21087**=18=0

483726－186429＝**306396**=27=0　7147147－1087654＝**6150483**=27=0
35702468-11111111=24681357=36=0（つづく）

また、この対角数列を逆に置き換えて**『ひふみ算』の減算法で処理して見よう。これらを参考にして計算手法を見出し、その手法を改めて自らの手で確立して欲しい**。

（B）

1－1＝0　14－32＝72　159－753＝306　1627－4174＝6543　17417－38405＝78012
186429－483726＝603603　1087654－7147147＝3840516　11111111－35702468＝75318642（つづく） やはり同じく最終的には0が現れ完となる。　【『神の方陣』講座より】

よく(A)と(B)を見比べて欲しい、引く数と引かれる数を逆の関係にすると現れる答の数列は逆の形を持って現れるのである。 これが「現代数学」では考えられない自然における「数」の表れである。一体どうゆう事なのであろうか、これを知れば「自然の数学」である『神の数学』の真髄がわかるはずである。【この「ひふみ計算法」については『超数学の世界』No3、No.6参照】 ≪答はすべて 0、無になる(加算にて)≫ ≪この(A)、(B)の答の数列のすべては既記の『九九算表(ひふみ九九算)』の中にあるもので、完全な秩序を持っている数列である、何故か、誰にも分からない。≫

『神の方陣』より≪計算の図≫〔３〕（追記 2007, 11, 8）

さあ、志のある者は次の計算を**行い**、もって十進法と自然計算手法の不一致を確かめ、あるべき正しい手法を自分の手で見出して欲しい。**ここにある二つの対角線上の数には次の関係があることを自らの手で確かめ、その後 8 次元体、10 次現体の二つの対角線上の数を加算して、その答えを貴方の知で出してもらいたい。**（例） **5 次元 17417Σ＝38405Σ 6 次元 186429Σ＝483726Σ 7 次元 1087654＝7147147Σ さて、ここまでは現代数学でも答えは出る、その次が問題であるが首尾よく解いて欲しい。 8 次元 11111111Σ＝35702468Σ 10 次元 1357024681Σ =1111111111Σ 見事解き放つことができるかな。すなわち、これらの持つ二つの対角線の和(最終答)はすべては同じ数が出ななければならない、それが本当の普遍的な宇宙の自然数理である。さあ、持てる全知全脳を奮ってこの自然の数の調べを解き放って戴こうではないか。 これが本当の自然が教える「数のあり方」と「その真理」の大義の姿であり、未だ人類の知らない「神の叡智」を探す鍵にもなるものである。**これ一つを陥落させただけで貴方の頭脳は思い込みの迷いから覚醒し正しい数の見方の存在に気がつくはずである。ものすごく易しくて、ものすごく難しい問題である。 今まで順調に現れていた答えが、急に乱調になり、合わなくなったのは我々の用いている手法に欠陥があると考えるべきであり、それをして自然は理解できない、気まぐれであるとして打ち捨て振り返ろうとしなかったのは学者達の怠慢であり、落ち度でもある。それが何千年という人類のタイム・ロスにつながり、その命運にさえ影をおとしているのである。 さあ、ご奮闘くだされ。これを解き放たない限り「新しい自然の知」は得ることは出来ないと考えて戴きたい。 恐らく、数学者達には解けない問題であろう、いや解いてはならない問題である。なぜなら、解いたら最後、自分達が長年かけて構築してきた「数学の世界」ががらがらと音を立てて崩れてしまうからである。 これは簡単な問題であるが由々しい意味、重大な示唆をもつものである。 その意味で心して扱かい、真実の数理の存在とそのあり方を見出して戴きたい。 さあ、頑張りなされ、！**（ヒントはこの後にある計算の図〔5〕にあり）

『神の方陣』より≪計算の図≫〔4〕

さあ、もう一つ面白いものをお目にかけよう、探究心の強いお方は心の赴くままに十分に検証をするがよい。

上記『ひふみ‥法陣表』から例により二つの対角線上の数字を同一的方向性をもって拾い減算する。それは次の通りである。

１－１＝0、 41－32＝18、 951－753＝207、 7261－4174＝3186、 71471－38405＝42075、 924681－483726＝531864、となるのはお分かりであろう。 さて、ここに現われた数列とはまさに上記の0123456789の正自然数の禊算の答そのものである、是非とも証算してくだされ。このあとの計算の続きは自らの手と目で進め、その醍醐味をしかと味わいその不思議さを堪能するがよい。 すべては天の采配通りであり、微塵の違いも無いことが判るであろう。 その他何か貴方の直観に触れ来たるものがあれば忌憚なく調べその始末を見い出すがよい。 要するにこれら図形とは一面のみで内容、真実を語るばかりではなく、それぞれの多面、あるいは多面軸をもつてそれぞれ別な自然真実を開示し、囁いているのである。 この不思議な数の妙なる現われを貴方は何と見るのか、出来ればその答えを是非とも戴きたい。 まことに驚くべきもの、そして我々の知の領域外にあるもの、それは「数」の語るゆるぎない自然大律儀の存在である、それに現代人が一向に気がついていないとは、いやはやまったくもって残念至極の極みである。　　渇　！！　**See → 上述の＜自然数の禊算＞**

『神の方陣』より≪計算の図≫〔5〕**（追記2006、6、27）**

『ひふみ方陣表』のそれぞれの表のにおいて、正中心点を対称点とした「対極にある数」（中心を通る線上の対称位置にある数）を求めて加算する、するとすべての表はそれぞれ特定の同一数字を示す不思議な関係にあることがお分かりになるであろう。その関係を用いて例えば上記の「4次元体表」を見る、するとすべては8の共通数を示すのであり、それにより8の次は9ではなく、0である事がはっきり証明されるのである。要するにそこから（9＝0）の定理が導き出され、その正しさが判るのである。これは人間知ではなく「自然知」であり、『神の知』なのである。 この数関係は例えば、表を宇宙大に拡大しても決して変わることはない。疑う方は上記の方陣及びその上の方陣を自らの手で作り上げて、その真偽を確めることである、それにより貴方は自然の仕組みの巧みさ、決して矛盾の無いその姿に新たな感動を覚え、敬虔な気持ちが自然に湧きでて、心を震わせるであろう。一つこの4次元体の本性を尋ねて見てみよう。 2＋6＝8　1＋7＝8　3＋5＝8　1＋7＝8　2＋6＝8　4＋4＝8　さあ、一つ残った、それが8＋9である。これが同一数8を示すための必要条件は（9＝0）である。かくして7、8、の次は9であり、または0でもあると数字は語っているのである。驚いた事に古代インドの数学にはゼロ（0）とは空虚0と充満（プールナ）の正反対な二つの意味を持つとはっきり記されているのであるが、それが 13 世紀あたりにアラビャを経てヨーロッパに入った時はは空虚の0だけが伝わり、充満（プールナ）の意味は理解されずに捨てられたのである。ところがインド、中国、日本では9を最も重視し、聖視している事から充満（プールナ）の知伝が十分に残され、伝えられていると思われる。その中でも特に日本にはそれを暗示する多くの言葉が一般用語、仏教用語に多く使われ、今でもしっ

かり生きていることを知って欲しい。しかし実際にその意味、用法を解する者は無く、意味不明のまま慣習的に使われているだけなのは少々淋しい。 例えば、＜「九」の字を瓦に彫り、厄除け、霊除けにした＞、＜除夜の鐘は108打つ＞、＜数珠の玉数は45，63，72、81ヶである＞などである。数を一桁化するがよい、すべては9になり、0（あの世）になるものである。また、自然界におけるその事実を表すものに、原子内の軌道を走る電子の「数の走り」がある、そこには決して9の数は無く、8の次は0となり空となって新たに1,2,3,‥と別の軌道を設けて走り出すではないか、これこそまさに自然界における「数の規範」である。これらを知り、自然の心を持てば、すべての『ひふみ方陣表』がするすると解けて「新たな数世界」が貴方の目の前に広がってくるのである。自然界こそ我々人間知の規範であり、お師匠さんなのである。科学者、数学者はそのことをしっかり心に銘すべきであろう。西洋学問とは少々人間知に溺れすぎ、無理を通して一人合点のるきらいがあるように感じるのは私だけであろうか。。

『神の方陣』より≪計算の図≫〔6〕 （追記2006、10、27）

上記、『神の方陣』、すなわち『ひふみ‥方陣』のそれぞれの対角線上にある数字をすべて加算する、そこには必ず同一数が現れる、すなわち**[右上がり対角 Σ 数＝左上がり対角 Σ 数]** の関係が如何なる方陣においても常に成り立つのである（Σ とは総加算の意）。試みに上記に示した「8次元方陣体」「と10 次元方陣体」を作り、その二つの対角 Σ 数を出して調べて見て欲しい。そこにこそ、**「『自然の数』とは一桁のものだけである**」の真実の答が歴然とした姿、間違いの無い姿で鎮座しているのが分かるはずである、それを自らの手で解き放っていただこう。 これは一つの「自然の律」であり、「自然の法則」でもある。 さあ、直ちに試算して欲しい、これは十進法の計算を根底から覆す真の自然の計算法であり、『神』の持つ自然的計算法でもある。これで驚いてはいけない、これ以上のもの、すなわち次元と空間に関するものがこの『神の方陣』の中にはゴロゴロと転がり、枚挙にいとまないくらいである。試みに上記の『神の方陣』を相手にそれらを引き出して検証して見るがよい。たとえ 1 ケでも見出す事が出来れば、感性と洞察力が豊かで、類まれなフレキシブルな新人類と尊敬申し上げることにしょう。なお、申し上げておく、この計算法は小、中学生でも解ける簡単なものではある、しかし、「現代数学」の鎧で身を固めている学者には解けないであろう、何故ならそれは「現代数学」の基本ドグマに反してしまうからである。例えばである、（9＝0）等は決して学者は認めないであろう、いや、認めることは出来ないものである。なぜなら、それは彼等にとっては最大の鬼門であり、脅威の数式である《最大＝最小》を連想させ、反射的に身構えてしまうものだからである。しかし、9＝0を認め、その理を自分の知識に取り込むことにより、貴方は確かなる「神の御業」、「宇宙自然の妙なるロゴス」を見ることが出来るのである。この仕組みは現代世紀が始まって以来今初めて人類に伝えられるものであり、隠しに隠された「神の秘密」である。では真摯な心で求道を目指し、真理に目覚めようとしている方々のためにそれを一つお目にかける事にしょう。（ロゴス＝宇宙の究極の秩序、真理）

『神の方陣』より≪計算の図≫〔7〕

上記（A）、（B）の『ひふみ算』の加算法と減算法』、ここに現れた答の数字を加算して一桁にするがよい、するとそこに現れた一桁の数とはすべて9の姿になるのである、要するに答の数とはすべて9の倍数体であり、それは《9＝0》の定理により答はすべて0に還る、すなわち『数の母体』である0の姿に還るのである。また留意すべきは、そこに現れた答の数列の姿はすべて上記の『宇宙次元原理

表』の中に燦然として並ぶ数列でもあるのである。 それらの答のすべてが9から0に収斂帰納し、無に還ると言うことは一体何を意味するものであり、何を語ろうとしているのであろうか。そこにこそ数の語りの基本があり、数計算の根源の要（かなめ）があるのあるが、誰も気づくものはいない。このようにして現れる「数字9の意味」、それは一体何を言わんとするのか、「9の数字の妖しい姿」とは現代数学上でも昔から問題になり、議論は尽きないのであるが、今のところ誰も答を見出した者はなく、ただただ闇にひそむだけである。『神の数学』はその「9の数学」であり、『0の数学』でもある、『9』の真相を知り、《0》の正体を知れば、すべての「自然の仕組象」は見え、あまつさえ語ることも出来るのである。（例えば、この数列(0123456789)の中心から対極位置にある数を加算すれば、すべては9になり、0になるのである。一体この意味は何を言わんとしているのであろうか、、これこそ全人類が一丸となって考えなければならないものである。）

ここでひとまず「数」の素性についての考証は一段落とする。信じられないお方は上記の「数の表れ」について何度でも検証し、十分な考察を行なった上で改めて理解して戴きたい。

この後の後半は驚くべき古神道の秘儀、誰も手にすることが出来なかった『古代日本の叡智』を解き放ち、諸氏に新たな歴史眼を培って戴くと同時に、改めて神道の再吟味、再々吟味をお願いしたいと思う。それは奥義祝詞『ひふみ・・天地の数歌』に秘められ封じられていた古今未曾有の「秘め事」を明らかにするものであり、続いて更には限りない天地宇宙の真実へと大きくつながっていくものである。それがすなわち『神の奥義』の真髄であり、『宇宙大律の普遍の真実』を伝えるものである。それらはまことに驚くべきものであり、現代知では逆立ちしても到底見出すことは不可能なものである。まさに驚くべき古代の叡智、それは古神道の奥義祝詞『ひふみ・・・・

天地の数歌』の伝える天地無比の真義である。

《これはいわば、大いなる過去にあった「数哲学」とも言うべきものであり、世界で最も歴史の古い日本の国に唯一残されていた「大いなる叡智」である。同様な過去の知遺産にはかの「カタカムナの物象」がある。共に継子扱いされてはいるが現代文明が窮地に立ち、人類に新たな環節が訪れた時に「救世の叡智」としていずれは世に出るものであろう。》

『ひふみ‥天地の数歌』とは天地宇宙を揺るがす偉大な文言である。 然るにそれを受け継いだ今の日本民族はその事実を少しも知らないのである。 嗚呼、何と悲しく、哀れなことであろうか。

その驚嘆すべき証を少しだけここで述べておく、自分の目と直観をたよりに己の手と頭を用いてその委細を調べるがよい。

≪縦×横のマス目を持つ図を作る(どんな図でもよい)、そのマスの中に『ひふみ‥数序』、すなわち123456780123‥を入れる。するとそこには驚くばかりの奇跡が起こり、貴方に誰も知らない「大いなる神の秘密」をひそかに囁くであろう。そのマスが9ヶを過ぎると更なる『神の秘』、すなわち(9＝0)が姿を現わすのである。すべては「10進法」を否定し、その間違いを明らかにする決定的な「数の証し」である≫【詳細は『神の方陣』上級講座(4)参考】

＜例図＞　　＜例図＞の計算　(1＋1＝**2**、2＋0＝**2**、3＋8＝11→**2**、4＋7＝11→**2**、5＋6＝11→**2**)、 中心を通る対称位置の数を加算する。するとすべては同じ数に導かれ収束しているのがお解かりであろう。それはまさに天意の発露であり、共鳴同調数の確たる姿である。未だかって誰がその存在を予告した者がいただろうか、否である。　疑う方は同じ手法で(3×4)、(4×4)、(5×3)(6×2)の図、あるいは思いつくままの如何なる数図でも可である、作って試すがよい。　すべて は同じ単数の形に収斂し、共鳴同調の大いなる数場と化し、無限のエネルギーを生み出すことにより永遠の存在を誇っていることが分かりになるはずである。

1	2	3	4	5
6	7	8	0	1

(5×2の図)　　(3×4の図)　　(4×4の図)　　(5×3の図)　　(6×2の図)　　(何でもよい)

≪お分かりであろうか**、『ひふみ‥天地の言葉』とはまさに天地、宇宙を震わす(共鳴させる)天地言霊であり、自然宇宙を貫く神の哲理文言**＞であった事が、それを証するものがこれらの数図表である。また、これは神道にある「表裏一体」との言葉の真の意味でもある。「表裏一体」、別の言葉で言えば「陰」と「陽」は共にあって一つの象に化すと言うことである。そのあたりの正しい解釈を踏まえてこそ真実が明るみに出てくるのである。ある宗教の大祖は「宇宙には無限絶大の音声が鳴りて、鳴りて、鳴り余りつつある」と述べてそれを**アイウエオの五大母音**としているが、本当は**『ひふみ‥』の言葉**、すなわち**九大数詞**が正しいのである。それにしてもそこまで喝破できた御仁が過去にいたとは！、大いなる驚きであり、ただただ感じいるだけである。この図はまた、『ひふみ‥九九算数』の始源の正しい由緒を謳うものでもある、それを探すのも

一興であろう。ただ分かるのは不可思議千番な『数のアヤ』を見出す度に、ただただ何故の疑問が頭をよぎり、我々の脳の程度の低さを思い知らされると言うことである。この、『ひふみ‥九九算数』の不思議な「数理」の正体を考え、あらためて『数』の真実を追い求めてみたいと思う方は是非ともこの資料（『神の法陣』上級講座あたりを請求してその「数のミチスジ」を検証してて戴きたい。それはまことに簡単なものである、しかしその中には『宇宙普遍の「数」のアヤ』がしっかりと開示されている古今無類のものであり、「素晴らしい自然叡智」の確たる存在そのものを謳っているものである。現代西洋学問はそのあたりのことは一向に知らず、ただただ人間知の延長線上のものを発掘しようとしているだけである。【地球の振動リズムは「シューマン共振波」と呼ばれる**9ヘルツ**前後の波動である、また人間の脳波も**9ヘルツ**前後の波動である。動、植物の最も欲しがる遠赤外線の波動も**9ヘルツ**付近である。これらの事実の存在を祝詞『ひふみ‥の歌』が開示し、語っているのである、それがすなわち**定石数（9）**と言う自然象の存在であり、その証言葉そのものであろ。すると祝詞『ひふみ‥天地のの数歌』とはすべての自然万象は母なる宇宙波動（9）と共振、共鳴している事を高らかに謳いあげている世界で唯一と言うべき偉大なる言葉であり、我々の祖達がその事実をしっかり掴んでいた証拠言葉と言うことになるものである。それはまさに驚くべきものであり、遥か現代知を超えた自然物理の極みとも言うべきものである。更にはもう一つその証を示すものを紹介しょう、それはすなわち超古代文献（ホツマツタエ）に記載されている次の言葉である、「宇宙の中心から**九つの波**が押し寄せ、ヒトの呼吸や水面のさざ波となって現れている」。さあ、考えて欲しい、本当の知的先覚者とはどちらなのであろうか、我々現代人か、それとも遥かなる古代人なのであろうか、？？？。 我々は余りにも西洋科学知に踊らされ、盲目な状態に陥ってるのではないのか！！！。≫

どんな図でもよい、中心点から対称点にある二つの数字（陰と陽の性をもつもの）を加え、その答の数を一桁化する、するとそこにはすべてにわたり同一数が姿を現し、図全体が一つの共鳴音律を奏で、貴方の心を完全に魅了するであろう。これにより宇宙自然体とは相互補完による共鳴同調が基本であり、同一響きにより成り立っ『大いなる波動世界』である事が分かるはずである。また、それは「妙なる神の業」、すなわち人間の未だ知らない真実の「数の理」がしかと存在している事を示すものであり、同時に現代物理学が切り開いている量子力学の方向が正しいものであるとの証明でもある、何故ならば、量子力学の別名こそは「波動力学」と呼ばれている波動物理であり、波動世界の秩序、法則を求める学問を意味するものだからである。 諸氏に是非とも知って貰いたい事はこの≪「場における波動共鳴現象」とは『ひふみ‥』の数序、及び（9＝0）の定理を用いない限り、決して成り立たつことは無く、ただただ無明の複雑とカオスに導くだけの「トラップ」、すなわち『神の罠』に陥るだけなものである≫。この自然構造場における『共鳴現象』とは人間のつくった「10 進法」などでは到底夢想も出来ない神妙な「神の業」であり、厳しい「自然の妙理」そのものの発現である。また、この数序にあればこそ初めて『宇宙自然の響き』に共鳴可能で、「宇宙自然の構造」と合致同調し無限の妙力、神業を発揮できるものである。これこそまさに宇宙自然の示す「真実の数理」であり、私の奉じている『神の数学』の真髄とも言うべきものである。あえてもう一度繰り返したい、古神道の奥義祝詞『ひふみ‥天地の歌』とはまがう事ない「天地の神理」、「神の摂理」を厳かに謳い上げ、奉伝しているものであり、まさに今の世にあってもこの古代言葉は世界第一級の真理啓示を示すものでる。同時にこれはまた神道の拠り所として古来から人々の心に深く刻まれ、日本の真実を代々語り継いで来たいわば日本の『宝』とも言うものである.。この事実をしっかり確認し、大いなる誇りの心をを持って戴きたい。【〝敷島の大和の国は言霊の助くる国ぞ、ま幸くありこそ〟、〝そらみつの大和の国はすめ神の厳しき国　言霊の幸はう国と語り継ぎ　言ひ継がひけり〟、〝天地（あめつち）も動かすばかり　言の葉のまことの道をきわめてしがな〟】、【詳しくは《数学幻視考》古神道（1）、さらに詳しい次元性についての詳細は『神の方陣』上級講座（4）参照のこと】

類まれな直観力、洞察力のある方は何十、何百という『神の方陣』の中に生き生きとした躍動感、すなわち無限の規律性と天妙な美しい形象のあるべき姿（同心円をもって描かれた、まさに原子の電子軌道図と同じもの）を見出す事であろう。それは『神』は意思をもってこれを創り上げた厳然たる証拠であり、「神の手になる万象の設計図の姿」と言えるものであろう。またそこに込められた確たる『神の意思』の表示であり、我々に挑戦を促し、見事それを引き出すべしとの誘いのようにも思える。しかし、それを見出すことは今の人間レベルの知では中々容易ではなく、ましてや西洋科学知の権化である大学者達はは拒否反応、すなわちそのような恐ろしいことはあり得ないとばかり怒りだし、反発を強めることは必須であろう。一旦科学常識知に染まり一つの観念が形成された者の「知の規範」を改めて修正しなおすのは大変困難であり、余程のショックがない限り恐らく不可能なものであろう。まさに「知の領域」には次元的差異があり、その者の持つ知のレベルにより解釈反応が異なり、その答さえも当然変わってくるのもやむを得ないことであろう。ひょっとしてこれらのメッセージは我々人類に対してのものではなく、もっと高度に進化した宇宙の知的存在に対してのものかも知れない。　私が「神の数学」を学んでいるとそこには何か現代科学では感じられぬ生き生きとした神の息吹が感じられて仕方がないのである。それは歓喜に満ち溢れ、躍動感を持ち、永遠を謳歌しているもので、決して衰えぬエネルギーを発散しながら、「何でいまさら」、「もう遅いは、今更とり返しがつくものか」と叫ぶ神々のどよめきとシュプレヒコールが聞こえる、そんな気がしきりにして仕方がないのである。＜真摯に理解しょうと思われる方は表記宛にご連絡の程を、『神の方陣』の解き方の案内説明書を差し上げます、ただし送付切手代くらいはもって下さい、必ず貴方の知の次元が変わるはずである。＞

このあたりを是非検証し,真実を知って欲しい、このように」上記、『神の方陣（ひふみ方陣）』の中でで開示されている「天地の理」,[宇宙の真実」は私が見出したものだけでも約50 項（考）以上あり、『神の数学』全体では数百項にのぼることをしっかり知ってほしい。すべては人知未踏の『超知』であり、『超々知』でもある。 それは深い直観と鋭い洞察力をもってのみ見出されるものであり、「宇宙普遍の哲学」、「大自然の持つ数理」の実態を如実に描くものである。願わくば、大いなる才を持つ諸氏のご参加、ご助力を是非お願いし、もって更なる「宇宙普遍の真実」を突き止めてみたい。それが私の残り少ない余生の夢である。私はあえて言いたい 『神の数学』は新しい力を我々に与え、励ましてくれるものであり、我々を新しい未来、正しい未来へと導いてくれる羅針盤的存在性をもつものであると。【仔細、詳細は『神の方陣』講座、及び『神の方陣』中級講座を参照のこと】

「現代数学」は物質を扱う数学《物質数学》であり、『神の数学』は意識を扱う数学《意識数学》である。（また別の名では「形而下数学」と『形而上数学』でもある）　心ある者は威儀を正し、心を無にして学び、そこに示された「『数』のもつ本質」をしっかり学び取って戴きたい。

たとえ虫の息でもいい、ここまでしがみ付き頑張ってこられた諸氏に対し、その労をねぎらう意味を込めて新たな「大いなる知」、我々の祖の残した「輝かしい大いなる知」をこの後披露申しあげることにする。すべてはここにおいて初めて公開するものであり、今まで誰も想像もしたことのない「隠されていた大いなる日本の秘密」である。心して考察検証を行い、いささかでも了として戴ければまことに幸甚と存じる次第である。教科書の記載をそのまま信じるのか、それとも歴史の真実

を自らの眼で考証すべきなのか、大いに心は揺れるであろう。さあ、貴方はどちらに動こうとするのか、まさに正念場の一瞬であろう。

果たして真実ととるか、たわ言をとるかは諸氏の心、知の程度次第ではあろう。しかし一つだけは信じて欲しい、古代の日本の歴史には大きな改竄があり、隠蔽があったことを、そしてその背景となったものは大規模な大陸人による日本の侵攻であり、占領である。縄文末期から弥生にかけて大陸からの敗残兵や戦乱難民が数万～数十万人単位で日本に押し寄せ当時10万足らずの人口であった日本純民族を殺戮、或いは放逐し奴隷同然な仕打ちを行っていたのである。そのあたりを正しいくだりが「竹内超古代文書」にはしっかり記されているのである。『古来の日本文化や文字はすべて禁止抹殺され、彼らはすべての分野で指導階級となり、公用文にはすべて漢字が使用され漢字を知らない者は奴と呼ばれ奴隷身分とされたのである』と。これが縄文文化が弥生文化に突然移行した本当の理由である。何故かそのあたりは歴史年表には記されず、ただ空白になっているのは諸氏もご存知であろう。信じられなければ年表により当時の中国の人口の増減の状態を調べるがよかろう、国が滅亡するたびに人口が数千万単位で減少したのである、恐ろしい事に前漢末には4千万人、また後漢末には四千八百万人が消滅し、人口は僅か八百万人に減少しているのである。果たして彼らは何処に逃れたのであろうか、ただ殺戮されたには余りにも数が多すぎる。ちなみに当時の日本は蓬莱の国、神仙の住む国として中国の人々には知られ、憧れの地であったと中国の歴史書には記載されていたことを知って欲しい。また彼ら侵略人の数は当時の縄文人人口の9倍から25倍であったと東大教授の埴原和郎氏は述べている事も注目すべきであろう。また、大陸から日本に渡航するのは簡単で、ただ船を浮かばせるだけであいいのである、後は海流が日本まで運んでくれるのである。三日か四日もあれば十分であろう。逆に日本から大陸に向かうのは大変至難の業なのである。それを知らぬ歴史家達はそんな古い時代に日本目指しての渡航等はありえぬといきまいているのである。何と単視眼的なものの見方しか出来ない者達であろうか。ただ哀れみをおぼえるだけである。

あとは貴方の真実を察しょうとする慧眼だけであり、非凡な洞察力の走りにお任せするだけである。

【これらの詳細は《数学幻視考》No.1～No.14を参照して欲しい】。

≪数のぼやき≫記述〔3〕「『数（ひふみ‥数法）』が開示する恐るべき『日本古神道』の真のあや」　Dec. 8. 2005.

なぜ、「現代数学」は自然に対して無力なのか、それは自然そのものを平面的なもの、すなわちユークリッド平面でもって解決しょうとしているからである。 本来自然とは射影空間的に考え、射影的な発想で当たらなければならないものである。射影空間とはプラスの無限大とマイナスの無限大が同じものと見る、すなわち、最初と最後は同じものである立体的ホログラフを意味するものであり、すべては立体的循環態である事を意味するものである。 要するにそれは『神の数学』で言う循環態の概念と同じものであり、そこにおける「数のめぐり」の表れ方そのものである。そこにある直線的な数の置き方、それはユークリッド平面的なものであり、循環的な数の置き方は射影空間的なものと考えればいいであろう。 それは『神の数学』では全般的に出てくる自然象の最終的な姿でもある。 またそれを知る事により、陰陽の表れの姿、その仕組みが分かり、無限循環で初発から無限に収斂する際に現れるシンクロニシテイの正体も分かるのである。 また、それは同時に古神道における祝詞「ひふみ‥‥天地の数歌」のあらわす意味、《宇宙自然（天地）はすべて「ひふみ‥‥」の繰り返しで解ける》,すなわち、≪祝詞「ひふみ‥‥」の九数こそが宇宙自然の基本態であり、それを用いる事により宇宙自然のすべては解き放される≫との驚くべ

き御宣託であり、その見方の正しさを改めて痛感させられるものである。それに比べると現在の我々日本民族子孫のあまりの見識の無さ、真実に対する無知蒙昧な姿にはただただ恥じ入るだけであり、まさに慙愧にたえない思いがあるだけである。 我々も「そんな馬鹿な」、「あり得ないたわ言である」と言わず、「あっ、そうか」、「そう言うことであったのか」とただただ素直に胸襟を開き、真摯に古代に学ぶ事が必要なのである、自然知に至っては我々は学ぶ側であり、教えられる方なのである。ただただ反対、無視を繰り返し、無意味な気勢を上げるのは学者達に任せておけばいいのである、なぜなら、彼らが認めると言うことは今までの彼等のやってきたことが無になることを意味し、無駄な学識を説いていたことを証する事になるからである。彼等が反対し、攻撃することは無理も無いことであり、当たり前なのである。そのあたりはあまり気にしないで我々の見出した「正しい道」を歩けばいいのである。

さあ、今回は『神の数学』の基本であり、母体である古神道の大祝詞『ひふみ・・・・天地の歌』に隠されている真の姿、正しい意味を改めて紹介し、そこに展開される驚くべき「宇宙自然の仕組みの表れ」、「神が創った大自然の実体」をかいま見ることにしよう。それを知ることにより諸氏は改めて古神道の偉大さを知り、超古代に存在した「日本大文明の叡智」の確かさを十分に捉えることが出来るはずである。また同時にそれにより、外国に対しての今までのような卑屈な態度、すなわち西洋に対してのコンプレックス感は捨て去り、堂々と胸を張って世界各国を闊歩し、大いなる交流を果たすことが出来るはずである。またそれを知ることにより現代日本の大いなる発展進歩や民族の知質の優秀さは超古代日本に存在した大文明そのものが温床の役割を果たし、それがシンクロニシテイ的に今出現し、日本を大国にのし上げていることが判るのである。それがルーパト・シェルドレイクの「形成的因果作用」、すなわち過去に起こったことは、「形の場」となってこの時空に保存されていて、何時かはその「場」に似た形が形成された時に共鳴が発生し再び同一的な場が現れるのである。それが過古再現の法則であり、時の奏でるロンドの旋律である。すべての象は「循環の仕組み」をもって流れ、「因と果のめぐり合わせ」により再現され、そして移り行くのである。その事実、真相が『神の数学』の中では「数の流れの姿」,そして「数の表れの姿」ではっきりと開示され、その真実を告げようとしているのである。
【詳細は《数学幻視考》(古神道)No4、『真実の数理』講座No7参照】

、今までの西洋の宗教家達や西洋かぶれの日本人は、古神道の大祝詞、「『ひふみ・・』の天地の数歌」を評して、「まことに原始的な数の表れである、なぜならそれは現代的な数の概念を持たなかった「未開人の算法」であり、それを崇め奉っている日本神道は明らかに原始宗教である」と評し、軽侮をあらわにしていたのである。 しかし実際は彼等の目こそ次元の低い哀れむべき存在であり、見る目を持たない低意識な存在であったのである。本来の日本神道、すなわち古神道とは一段高いレベルの次元知性をもつ『自然物理的な知』を秘めた存在であり、『神の知』、『神の仕組み』の真実を物語る古代の驚くべき超知の数々を封じ込めた偉大なる伝承道であったのである。それが真実であり、事実であることの真実証明として、 ここにその内容とその詳細を少々掲げておくことにする。それを学ぶ事により、超古代日本には「超意識的な文明」が栄え、その「意識の高さ」と「知の素晴らしさ」を世界に誇った時代があったことを是非知って欲しい、恐らくその年代とは知る人ぞ知る「カタカムナ超文明」のあたりではないかと推測するのである。 なぜなら、

共に超意識物理的感を抱かせる同一の匂いがするからである。 そのあたりは洞察力の鋭い貴方にも直観的に十分感じられ、心に共鳴の波紋が広がっていくはずと思われる。
（詳細は《数学幻視考》古神道の部を参照されたし）

古神道の奥義祝詞である『天地の数歌　ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、ここ、たり』は宇宙次元の展開をつかさどる「尊い原理」を表すものでもある。その証拠となるものが『神の数学』の中にある「神の方陣表」である。 試みにそこにある1次元体、2次元体、3次元体・・・・9次元体までのその表内のすべての数を加算するがよい、1次元体は1、、2次元体は2、、3次元体は3・・・・9次元体は9または0の答が現れるはずである。それは『神の数学』の手法を知らぬ者にとっては甚だ難解であり、至難なことではあるが「知」に覚えのある方は容易なものであろう、是非試みるがよい。また動きが取れなくなったら表記宛にご連絡戴きたい、その時は必ず教えて進ぜよう。我々日本人がこれを理解せずして誰が理解出来るであろうか、我々が理解し、それをこなしてこそ初めて世界の人々に発信できるものであり、同時に次の世代に大切に伝えることの出来る世紀に誇る素晴らしき「大いなる日本の叡智」と言うべきものである。貴方が信じようが、信じまいがそれは確たる事実であり、「数」がそれをはっきりと明かし、教えてくれるのである。 「数」とは真実、真理の本性をもつ表象ゆえに、そこには虚偽、作為、誇張などは一切ないものである。 『数』、それはまさに自然の大いなる知の担い手であり、自然の全てを掌握統括している尊い存在である事をしっかり学んで欲しい。　私に言わせれば「数を極める者は現代文明を制す」と言ってもいいものであり、それほど今にあっては大切なものである。そのあたりをしっかり次の章あたりで確かめ、検証して戴きたい。 まずは「天地の数歌」の大いなる意味、古代人が密かに古神道に封じ込めた「言霊的な意味」を最初に明らかにしておくので、それをまず調査検証し、偽りの現代常識により閉ざされている貴方の心を開く拠り所にして戴きたい。 このひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、ここ、たりの「古代の数詞」が示すものは遥か古代にあった日本文明が持っていた大いなる『叡智』であり、その真実を伝える言葉の証（しるし）でもある。またそれは現代文明とははっきり形態が異なるものであり、その精神性、意識的な「数物理的概念」においては現代の西洋科学文明知を遥かに上まわっているものを持っていた事が分かるものである。すべては『神の数学』の中でのみ証言され、謳われている。

古神道の祝詞「『ひふみ・・天地の数歌』の持つ正しい内容仔細は次の通りであり、それは天地神明の文言言葉であり、世界最古の伝承言葉でもある。

≪謹んで読み解き、その内容、時代の真実をつぶさに調査し検証して欲しい。これこそ疑いの無い日本の誉れであり、『知の至宝』である。

まさにこの祝詞『ひふみ・・』の数詞言葉は「聖書」の最初にある『神の言葉』」と同一儀であり、同一内容を持つものなのである。それは神道発生爾来三千年、誰も知ることも叶わず、この世紀末になり初めて『神の数学』により解き放された驚くべき古代歴史の真実で

ある。それにしても余りにも奇妙な一致ではないか、大いなる海を隔てた最も遠い西と東の国の神事（カミゴト）において、神を祭るための最初の言葉がまったく同じものとは！、そこには間違いなく同じ言葉が祀られ、語られているのである。考えるがよい、そこにはどのような経緯があり、何が秘められ、何を囁こうとしているのであろうか、！。そしてこれから何が始まろうとしているのであろうか、！！。　≫

ひ（日＝光）、ふ（風＝空気）、み（水）、よ（世＝地球自然）、いつ（出っ＝現れる）、む（虫）、なな（魚）、や（鳥）、ここ（毛々＝獣）、たり（ここまでという完了を表す言葉）。

『ここ』は「毛々」の転訛、　『や』の古代言葉の意味は「鳥」である。（「日本超古代秘資料」（吾郷清彦著）‥‥162ページ『天地の歌四十八音図』より）

【詳細説明は《数学幻視考》（古神道）No1、No3　参照】

天

地

　すなわち、第一次象としてもたらされたものは光、空気、水と言う自然の創造（世＝よ）体であり、そこから第二次象として出現した（出っ）ものが虫（三葉虫）、魚類、鳥類、哺乳類である と数によせて厳かに謳いあげているものである。まさに至言と言うべきものであり、隠された言霊（ことだま）の妙理、そして天地と言う言葉の真実内容さえその中にはしっかり秘めているものである。まさに世界第一級品としての隠し言葉（言霊？）でもある。そこにある言葉の真髄真価を見せつけられた者は誰しも感動し、心を打たれるものであろう。ただ惜しむらくは「ひ＝１」の前に何も無いことである、しかしである、しかるに、よく考えて見ればそこには何も無いと言うことはそこには『０＝無』があると言うことと同一義でもあり、無いほうが自然でもあることも分かるのである。その手法、すなわち１の前に０（神）を置くべし、それが諸発の元であると『数』で述べ表しているもの、それが古神道の失われた言葉「カムナガラの道」の内容であり、失われた『日本神道の真髄』を語るものであったのである。それは「ひふみ‥」と「アイウエオ」の相関仕組みにより完全に隠され、それにより長い間不明とされ、失われたとされてきたものである。それが今ここに『神の数学』手法を用いることにより再び甦ってきたのである。要するにそれは「現代数学」手法では解明不能で、『古代の数理』手法だけがその真実を解き明かすことの出来るものであったのである。それはまさに古代日本民族の『知』の高さを示すものであり、我々をしてただただ唸らせ、敬慕の心を起こさせるものでもあったのである。【「カムナガラの道」の詳細は『古神道』5の①参照】

　また、『神の数学』では『０』は神、創造神をあらわすものと考え、計算で必要でない限り何も置かず、数として必要な時だけに０を置き、対極の一方とするのである。するとすべては繋がってくるではないか、例えば、今まで動かなかったもの、呼吸もなかった仕組みでも『０』、『神』をおくことにより息づきはじめ、大いなるエネルギーの循環が始まり、生命ある

如く生き生きとした姿で動き出し、回転を始めるのである.。【詳細は詳細は《幻視考》古神道（3）参照】
　現代の学者達はそのあたりの知識が全く0であり、欠けているのである。心ある者は『神の数学』を紐解き、その姿をしっかり学ぶがよい。『神』の実際的な存在を見出す、ここが一番大切な所であり、我々のこれからの未来を決める正念場、乾坤一擲の時とも言えるものである。そこにある事実、姿有様とはまさに驚異の連続であり、畏怖すら覚えるものである。このような肝心極まりない重大事を現代西洋科学は完全に見過ごしてきているのであり、その罪は大変重いものと考えなければならない。果たしてこの先どのような決着をつけるのであろうか。この事実をしっかり押えて重用しない限り、現代科学文明には明日はないと知るべきである。言葉だけでは信じられないのはよく判る、が実際はそんなものではない、更に不思議、更に妙理が働き、言葉には尽くせぬ「神妙な数の表れ」に徹して「神の理」は展開されているのである。【詳細は『神の方陣』中級講座（8）参照】
　まさに驚動天地とも言うべき「数」の示しである。 そのあたりの仔細を語って止まないものが『神の数学』であり、そこにある「数の流れ」の姿である。驚くべきその姿とその仕組みを『数』が開示し、『神の数学』の中で語り継いでいるのである。 それはまさに驚くべき光景であり、驚嘆畏敬すべき自然真実の現れの姿である。また、それは「現代数学」にはあってはその姿の一片、いやその匂いさえ一切感じることも無いものである。

　驚くべし、この『ひふみ・・』の言葉こそは「聖書」の最初にある有名な言葉そのものであり、まったく同じ言葉を示しているものである。それは旧約聖書の創世記冒頭にある「神は叫んだ、『光よあれ』」と言う件（くだり）である。

　古神道にある「天地の数歌」とは≪創世の経過順序≫を『数』にことよせて謳っているものであり、聖書の「創世記」とまさに同一同儀とも言うべきものである。 また次の「ひふみ・・」とは自然開闢時にそこに現れた「天なる自然の姿」とそこにおける「地なる生物」の発生順序を伝える数詞であり、その序言葉を謳っているものである。 まさに日本こそは人類知の発祥地であり、世界文明の宗主国なのである。

　聖書の冒頭にては最初に『神(0)』があってそれが事を起こし光（ひ）を生み出し、それからすべては順を追って始まり、（空（風）あれ＝ふ）、（水あれ＝み）、（よ＜世＞、あれ）、と続き地球自然界（世）の仕組みの事は成り、次に虫、魚、鳥、動物あれと再び叫ぶことにより、そのそのすべての姿は完成し、最後に至り人が創られたのであると述べられているもの

である。これらの事実こそはまさに夢想もしなかった驚くべき一致言葉の出現であり、歴史さえも左右せんばかりの言葉の発露と言えるであろう。今だかって誰かこの由々しい事実を口にしたものはいたであろうか、Noであり、皆無である。また、この言葉が明かす真実とは自然万象とは『神』が生み出したものであり、『神』こそがすべての初発元、すなわち創造主であると述べているものである。 その裏を返せば「若し『神』の存在が無ければ万象は顕現不能であり、すべては始まらなかった」と言うことである。それらの言葉は『古神道』の祝詞と全く同様な意味と形式をもってその初頭に置かれ、そこからすべて同じ言葉が語られはじめ、描かれ始めているのである。 何たることであろうか、偶然にしては余りにも出来すぎているではないのか、それら二つ、すなわち、『聖書』の最初の言葉と古神道の祝詞『ひふみ・・』はまったく同じ構図を持ち、まったく同じ意味を表すものであるとは、！ しかもそれは東西共に「最も大切な言葉」、「最も真実を告げている言葉」として数千年の間、『神』に真っ先に捧げられ、奉じられていたものであったとは ！。 一体この事実は何を示し、何を語ろうとしているのであろうか ？。

《祝詞の言葉明かし》 → 日本人は古来より言葉は「神妙な力」が宿るものと信じ、その言霊（ことだま）をもって神さまに奏上申し上げ、聞き届けを願ったのである、それが祝詞の言葉の姿なのである。それは厳然たる真実を持つ言葉であり、決して嘘、偽りの無い事を証するための確たる前奏言葉として神前で用いられたものである。すなわち、これから奏上する祝詞は真実の言葉そのものである、そしてその次に申し上げるお願い事も祝詞同様に嘘、偽りのない真剣なものであるので、どうかお聞き届けていただきたいと言う計りである。、諸氏もここに来て初めてその意味、その正体がしっかり理解できた事と思う。それにしてもおそるべきは古代日本の知者達の力であり、それを統べていた智である。我々が解く事が出来なかったのは彼等の「知のあり方」が我々のものより数段勝っていいた、と言うことであろう。

知に敏い人は言うであろう、旧約聖書の言葉には『神』があるが古神道には『神』が無いではないかと。しかし、驚くなかれ、それはある「神道の言葉」の中に封印され隠されていたが、今では行方不明とされている言葉を見い出せば分かるはずである。のである。その封印され隠され、そして不明となっているもの、それが「カムナガラの道」と言われる神道の奥義を表す言葉なのである。はからずも私はそれを見出し、その秘密を解いたのはすでに述べてある通りである。そこにはしっかりと「１の前には0がある、その《0》こそ『神』の現れである」と謳い、それが「本当の自然の道」であると語っているのである。その仔細とは『アイウエオ五十音図』を連れて『ひふみ・・』を起こし、そこにはめ込むことにより偉大な『カムナガラの道』とは自ずと姿を現すのである。【更なる仔細参照は 『数学幻視考』古神道篇参照】

そこにある聖書の言葉とは古神道の祝詞『ひふみ・・・・』に示されている内容と全く同一義、同一内容を持つものである、それは遠い過去の何時の時代かに古神道の『ひふみ言葉』の言葉移しが外っ国に伝わり、彼の地の「秘伝文言」となった事を物語るものである。この聖書に記されている事実、すなわち『神』が最初の存在であり、すべての母体であるとする言葉内容は世界最古と言われている日本の古神道の中にもしっかりと存在しているのであるが、その事実を今までに誰一人として知る者はいなかったのである。それが古神道の『カムナガラの道』の隠されていた内容の真実であり、失なわれたとされる「神の本質真理」を表すものである。それは失われたのではなく、事情により千八百年前あたりに故

意に隠されたものである。それは祝詞『ひふみ‥』と『アイウエオ』の相関的アルゴリズムの手法をもって見事に隠され、一部の者に秘伝として残されたのであるが、 しかし、その解き方さえも数千年と言う長い間ににはすっかり忘れ去られ、今では内容不明とされているものである。学者達は『神』は無いと言うが、彼等はその検出法を知らない、存在証明ができないからその存在を認めようとはしないのである。これらをして余りにも唐突、余りにも白昼夢的と言うことなかれ、世界の歴史史観では白人種こそ現代文明をつくりあげた開祖と称しているが、とんでもない、彼等はそれ以前にあった優れた文明を侵略し、占領した文明簒奪者なのである。その証拠に歴史を見るがよい、彼等は欲にまかせて人種の異なる国々を次々と侵略し、領土化して勢力を広げているではないか、歴史は繰り返されているのである。要するにそれ以前も同じことが行われていたと言うことである。例えば世界最古の文明とされるメソポタミャ文明を築いたとされる東洋系のシュメール人についてである、彼等は突然歴史の舞台から姿を消したとされるがそれは他民族の侵略により一瞬にして国を奪われたとするべきであろう、最近の調査によりシュメール人とはどうも縄文日本人あたりとされているようである。その言語、文字体、風貌、習慣あたりがすべて一致するからである。また地中海の最古の文明ミケネー文明も同じである、何故なら彼らの持っていた文字がすべて古代日本文字で読み明かされ、意味もしっかり解明されている事からも判るのである。それこそまさに最古の西洋文明とはすなわち我々の祖である縄文日本民族が造り上げた文明であるとの何よりの証拠であろう。古代文明の担い手は決して白人種ではないのである、彼等は単に文明を簒奪して歴史を書き換えただけである。面白い事にこれらの事実は西洋の学者の指摘であるが、当の日本の学者達は他人事のように知らん顔、我関せずの態度である。どこかおかしいと感じるのは私だけであろうか。

まず、我々はそれらの事実をしっかり見極めて改めて歴史を検証すべきである。すべては西洋が主流であり、西洋から始まって東洋に至っていると言うのは西洋歴史家の独断と偏見の弁であり、押し付けの論理である。我々おとなしい日本人はそれにのせられ、そう信じて踊らされているだけであり、まさに詭弁の歴史であり、真実に反した虚偽の歴史と呼ぶべきものである。今後彼等はまたしても言うであろう、「日本人は古い時代にあっても「聖書」から言葉までも盗んでいた」と、何をか言わんやである。それが彼らの長年用いてきた常套手段であり、我々と異なる国民的体質(利己的正義主義)を持っている事を物語るものである。果たして、どちらがハッキリした由緒文言をもつものであるかか、また、どちらが正しい整然たる脈絡、意味を備えているかは上述した事柄から判断出来るものである。またどちらが「親言葉」、「最初の言葉」であるかはその言葉の内容と成立年代(爾来三千年)、そして民族の成立過程やその言葉の推移などを考えれば自然に正しい答は出て来るのである。これらのを称して古代の「言霊の業」、「言霊の知」というべきであろうか、それとも単なる「隠し言葉の業」とよぶべきものであろうか。とにかく、『隠し言葉の隠しアヤ』(言葉の中に隠されている真実と、それを解くアルゴリズム的手法)として、大変な歴史的な意味を提示してくれていることは確かであり、古代の祖の「知のほとばしり」の証(あかし)と言うべきものであろう。 【詳細は《数学幻視考》古神道(3)参照】

それはこの「『ひふみ‥‥』の数歌」だけではなく、他にも『神の数学』の中には数多くの数の「恐るべき知的振る舞い」の存在があるのであり、それらが日本の誇るべき「叡智」の確定的な存在を示し、証拠だてているものである。それはまた同時に、日本における「八百万の神々」の確たる存在を示す証を示し、同時に「八百万の神々」の言葉の元(もと)と

なっているのである。疑う方があれば資料を手にして自らの手でそれらを確認し、検証して欲しい。そこには誰も知らなかった日本の神々の姿とその息吹が「数字」をもってしっかり表されているのに仰天するであろう。私はここで声を大にして心から叫びたい、「日本人よ、いい加減に目を覚ませ」と。これらはまさに「数」が開示した奇跡であり、有り得ない事実の一つである。 まさに、「事実は空想よりも奇なり」を地で行くばかりの顕れと言えるものである。 ここで一つだけヒントを出しておきたい、それは図において『神』を求めるには視線を90度変えた位相上で改めて見直し、探索しなければ見出すことは出来ない、それが宇宙普遍の真実法則であるが人類はまだその手法を知らないのであり、これから学ばなければならないものであろう。

【詳細は『神の方陣』中級講座（8）参照、そこには信じられない『神』の見出し方が整然とした形で記されている、それを貴方は如何解釈するか？】

これをして偶然の至りと言うことなかれ、なぜなら、偶然にこの言葉が並ぶ確率は10の！（階乗）、すなわち362万分の1である、やはり意図して作られた言葉の並びであり、人間の手になるものと考えるべきであろう。そこに示されたものはまさしく生物の進化過程であり、生物の発生歴史過程を語るものである。 その事実の示す意味は『祝詞』とは古代人の残した大切な「知のメッセージ」であり、「遥かなる伝言」と考えてしかるべきであろう。これはまた、我々日本民族の祖は現代人以上の知的頭脳と言葉の暗号化の業（アルゴリズム）を持っていた証となるものである。それはこの『ひふみ・・・・』に止まらず、『アイウエオ五十音図』、『だるまさん・・・・』、『いろは・・・・』にしてもしかりであり、すべて言霊的アルゴリズム(?)を持ち、大真理を世の中に伝えている『知のメッセージ』なのである。 それらはすべて日本語と言う高度な言語とその中の構図仕組みをもって密かに隠された「古代の叡智を伝える伝言」と言うべきものである。 ただ日本の学者達は余りにも古代人を未開人、知的未熟者として過小評価するあまり、「そんなものは無い」、「そんなものを持っているはずが無い」とばかり初めから否定的な態度を見せ、はなからその存在を考えようとはしなかったのである。また神道研究者達の書いた「神道書」には祝詞『ひふみ・・』の姿を誤った数の形、すなわち1～10までの数字で描き、いたずらに意味を持たぬ愚言となっているだけであり、ゆえに誰からも評価されず無為の所業となっているものである。正しくは1～9までの数を用いて描く「数の理の道」、それが『神』に直結する自然本来の数の並びである。それを謳っているのが古神道の祝詞『ひふみ・・』であり、それを用いてのみ解かれる『アイウエオ五十音図』の示す驚くべき『神の啓示物語』である。すべては古神道から現れた現代知を遥かに超えた「未来の超理」の姿であり、「神の心」を示すものである。しかし、西洋科学の呪縛にかかり、その最大の追従者となってしまった今の日本人には中々信じられないものであろう。

ところで諸氏の歴史的な認識知は少々遅れてはいないであろうか、一つ確めて欲しい。今や日本歴史の歩みは2，30年前とは打って変わり活発な変化を遂げ、歴史ストリーは活発な展開を見せ、ややもすれば日本歴史は大きなリボリューシヨンを迎えようとしているのである。 30～40年前までは「縄文時代」のスパンは四～五千年と考えられていたが、今ではそれが一万五千年以上と言う広がりに変わり、学者達を困惑させているのである。

それとは別に「日本の古代遺跡」のあるものは世界で最も古い78万年前のものと断定され、最古とされる「ジャワ原人」や「北京原人」よりもまだ古い原人の遺跡と言われ、世界

中を唖然とさせているのであるがご存知であろうか。（高森遺跡、上高森遺跡）。 また、日本の古代土器は世界で最も古いもの（一万六千年前のもの）とされ中国や中東で発見されたものよりも群を抜いて古い事もご存知あるまい。まさに日本の歴史は大きな変革期、歴史維新を経ようとしているのである。どうもその立役者は専門家では無く、一般の市井の学者であると言うのも、また面白い見ものである。まさに明治維新ならぬ歴史維新の始まりである。

今までの学者達の持っていた日本歴史観は西洋人の歴史基準の下で培われたものであり、世界最古の土器が発見されても、「エジプト文明」と比肩する長期にわたる世界最古の「縄文文明」が見出されても日本の歴史学者達は批判と否定に走るだけであり、西洋人の作り上げた歴史のみの妄信を繰り返すだけである。考えて見るがいい、当時の古代人と今の我々は本質的には同じ民族のはずである、我々は明治以来僅か百年余りで世界に冠たる国を築き上げ、いままさに世界をリードしょうと頑張っているのである。それと同じ民族である我々の祖が一万年以上かけて何らの知的開花、意識文明知を持たなかったと言うのはまことに解せない話であり、有り得ないことではなかろうか。しかし彼らにはこの当たり前の話でも通じないのである、すべては彼等学者達の封建世界を守るためである。例えば「神代文字」が実存したことを証明するだけで彼らの作り上げてきた歴史世界は一瞬にして崩れ去るのである。いわんや古代人が『神の数学』を知って知を磨いていた等の言はまさにい許しがたいことであり、いくら真実を説いても到底承認できないものであろう。歴史は日進月歩解き明かされ真実が次々と明るみに出てきているのである。、彼等がいくら否と言おうが喚こうが真実は真実であり、如何ともし難いものである。現に歴史以前に記され誰も読めぬ世界各地の古代字を日本人が神代文字で読み解いているではないか。また世界中の石に刻まれた古代文字を読み解き、古代の世界は日本語で結ばれたワン・ワールドであり、日本が世界文化の中心地であったと主張している世界的な日本人学者もいるではないか。これらはまさに日本及び外国の古代文献に記されている「古代日本の真実を伝えている文言」そのままではないのか。

これらの事実を鑑みると、まさに今の日本の歴史の行方はは世界が注目する台風の目である。これからが益々面白くなっていくであろう。

また、意識遺産とも言うべき形を持たない歴史遺物には諸氏もご存知の古代の物象物理を記した「カタカムナ」古文献があり、また一方には古神道から現れた物象物理数学「神の数学」も姿を見せているではないか、共に「現代科学」を遥かに超えた驚くべき『超科学の世界』をかいま見せ、我々に希望と励ましを与え勇気づけてくれるものである。どちらも世界に類の無い日本の誇るべき「古代の叡智遺物」のはずである、 しかるに、それを一生懸命否定し、頑強に無視しているのが日本のインテリと言われる人々であり、学者と言われる人達である。 何ともの悲しく、そして道理に合わぬ、そしてそれがまかり通っているおかしな国、それが我々の国この日本である。面白い国と手を叩くべきであろうか、それとも真摯にそれを憂い、ならじとばかり真面目に立ち上がるべきなのであろうか。

古代祝詞の双璧の一つである『アイウエオ五十音図』の見せる思いもよらない驚嘆すべき内容、今でも私はただただ畏敬の念で眺めるだけである。そこにある古代の祖達の持っていた驚くべき言葉の「韻結びの秘密」、それらは世界の暗号史にも残る素晴らしい姿を持つものである、なぜなら、我々の常識を越える知的アルゴリズムを持ち、まさに唖然とするような驚くべき働きを持つものだからである。 さて、思うままに知の才が溢れると自負する方々よ、ならば、見事に『アイウエオ』に含まれる祖達の悲痛な叫びの声を解いて見

るがいい。そこには『アイウエオ』で綴る「顕幽の世界」（あの世とこの世）の姿内容がしっかりと描かれ、その明白な意味さえ記されているのである。 それは一般に知られている「いろは」歌の持つ暗号言葉「とがなくてしす」などの個人の叫びではなく、もっと奥深い日本民族の「悲痛な魂の叫び」であり、真実を伝えようとしている意味ある叫びでもある。それはまた神代文字を消し去り、漢字導入が強制的に行なわれた際に密かに仕組まれた「隠された古代言霊」であり、支配者達（大陸からの侵攻者）の目を欺いて作り上げた「隠し言葉」そのもの姿である。更にそこにはもう一つの真実、すなわち『ひふみ・・・・数歌』により導かれる『あいうえお』五十音図の秘密の存在である、なんとそこには驚くべき方法で宇宙次元の実相（3 次元）が描かれているという事実があるのである。それはまさに驚くべき「神の仕組み」の表れであり、『ひふみ・・』の心、その真髄を知らなければ到底解けるものではない。まことに畏敬すべき「隠された事実」であり、まさに世紀のスクープとも言えるものである。またそれは古代の数の理である『ひふみ』を打ち込んで初めて開錠されるものであり、『ひふみ・・』と『アイウエオ』の二つの祝詞を相携えて解かなければその姿は決して現れないものである。 それを経てはじめて「正しい答」、「数が示す驚くべき答」が見い出され、我々を唸らせるのである。 それこそまさに「不思議な事象」と「神妙な数の理」であり、少なくとも『神』の智恵の関与無くしては不可能と思われるものである。 まさに不思議の世界であり、不可知の世界である、　　【詳細は『古神道』⑤参照】

それはまた先に解いた『カムナガラの道』とはまったく異なるもので不可思議な「神の答」とも言うべき「数による大いなるメッセ-ジ」である。私としても現実問題として、どのように扱うべきか少々途方に暮れている現在である。『ひふみ・・』手法に乗せれば確かに簡単に結果は出てくる、しかしその答を手にすると現実的には苦慮、苦悩するものである。何故なら、今の科学的見地をもってではそれを十分に解し、検証することは叶わず、果たして真偽の判定が可能であるかどうか悩む『答』を示しているからである。要するにそれは、現代科学の及びもつかぬ貴重な「叡智」を持つ『未来の図語』であり、鋭い知のほとばしりを持つ古代人の「熱いメッセージ」と言えるものなのである。 して、その仔細等はここでは紙数の限りあるので述べるのは無理であり、私としては大変心苦しい。関心のある方、もっと真実を追究してみたい方は別途、表記〔『神の数学』・佐藤〕に問い合わせて該当資料を請求し、十分に閲覧の上で御検証戴きたい。

さて、次には『ひふみ・・・・』の天地の数歌があらわす「天地創造の仕組み」、すなわち自然は「陰と陽の二元」により創られている真実を覗いてみよう。それは『神の数学』による宇宙の本質哲学的なものを正しく解析し、正しい視線を加えることにより簡単に見出され、そこにある意味はすべて明らかになるはずである。まず、その前に『ひ＝１』の前にあるべき数　≪０≫　を置き、正しい数の並びをつくらなければならない。それを解き明かし、証明しているものが失われた神道の真髄『カムナガラの道』であり、そこにある驚異のアルゴリズム（解き方手法）なのである。　【そのあたりの詳細は《数学幻視考》（古神道）№5参照して欲しい,、そこにあるのは驚くべき叡智の発現である】

その仔細のくだりは『ひふみ・・天地の歌』、すなわち　0123456789なる正自然数数列が持っているのであり、その事実を次の「数仕組み」により明確な形をもって記しておくことにする。 それはすなわち、すべての宇宙具象の初めには必ず《０》（神）を置き、そこから解き始めなければ本性は見えない事実を我々は知らなければならないのである。《０》こそすべての数の母体、すなわち１～９までの数の生みの親であり、同時に最終到着点として還る（収斂する）べき原郷なのである。ところが今の西洋科学文明全般には「その

表れ」、「象徴」、すなわち0（神）がまったく無く、その基本たる概念が最初から完全に欠けてしまっているものである。だから現代の西洋科学文明は「神無し」の欠陥文明であり、ゆえに『神』を第一義に置くことにより開ける「自然の理」はまったく解けないのであると私は常々申し上げているのである。 また、0123456789の「ひふみ‥言葉」は次のように第一次象（天）と第2次象（地）に分けなければならないものでる、何故なら、それは「天（陰）」と「地（陽）」の合一した「完全自然象」であり、『神の心』を表す『自然数の妙絵図』と言うべきものだからである。【『神』の正体、『神』の仕組み働きなどはすでに「数」にて表されている、参照、『神の方陣』中級講座（8）,、『神の方陣』上級講座（3）】

≪数のぼやき≫記述〔4〕

古神道の祝詞『ひふみ‥天地の歌』に秘められた≪自然が謳うその秘密≫とは！

……（その秘密のすべては「数」が語ってくれるのであり、その一切を「数」が教えてくれるのである）……。

次に示す「数のあや」は今まで誰一人として知らなかった尊い『祝詞（「言寿ぎ」コトホギ）＝永遠にかわらぬ真理言葉』であり、『言霊（数）の語る秘密』と呼ぶべきものである、私が史上初めてその真実をさぐり、その核心を『数』から教えて貰った者であることをここに宣言する。この事実は史上初めての「数の言霊」による祝詞『ひふみ‥天地の歌』の持つ真実内容の開示の姿でもある。またそれは日本古来からの伝来としての由緒正しいものであり、数千年間神道の中に封じられ、今ここに初めて姿を現したまことの「自然の理」でもある。すべては『数』の表す自然の本質であり、自然数とは相対的な自律性を持ち、宇宙の仕組み（陰陽の二元性）を表す尊い心さえもっていることを示すものである。また『神」は自然万象を現し秩序づける為の因子として『数』を用い、かつそれを言葉として用いてすべての『神の知』をひろしめている事を私たちは是非知らなければならない。それがすなわち『神の数学」と呼ばれる由縁であり、古神道から現れた『日本古代の叡智』の姿である。それはまことに簡単な真理を謳い込めている簡潔な姿であり、簡単な言葉ではある、しかし現代科学体系には「その理」の類は全く見当たらず、その少しの影さえも見られないのはまったく残念なことである。

（是非、ひふみ‥数列を紙に写し取り次の説明どおりに数を置き、数のあるべき姿、真実の姿を何回も、何回もなぞって見て欲しい。そこぬは世界が驚くばかりの数の聖なる「秘密の証言」が現れるであろう。）

天　　地　（天＋地＝0）を表す、≪現代言葉に言い換えればでは　陰（マイナス）＋陽（プラス）＝0≫

0，1、2、3、4　と　5，6，7，8，9　の合一は0である。　祝詞　『ひふみ‥‥（　天　と　地　の数歌）』より。

これにより、自然とはすべては「0の世界」、「無、空の世界」、「太極の世界」であるとを謳っているのである。これが古神道に隠されていた秘儀であり、現代人を遥かに超えていた古代人の持っていた「叡智」の揺ぎ無い真実の姿である。　それは今の理論物理学で証明された『宇宙の本質は0である』そのものを示すものである。　ここにも「現代物理」と古代の『数の理』はまったく同じ答を持っている事実が顔をだしているのである、信じられるかな。

すなわち、前半の一次象は01234で「陰の性」を示し、後半の二次象　56789は「陽の性」をあらわす「陰陽の自然生成象」を開示しているのである。. また「陰の性」とは一つの波動態であり「陽の性」とはそれとは全く正反対の波動であり、「陰の性」を完全に打ち消す波動態である。よって「陽」と「陰」は合一すると0、無になると言うことである。現代科学でも最近になりやっとその理が認められ、現実的に使われてきているのはご存知であろう。

（誤解があるようであるが「数」は人間のつくったものではなく、自然の神（宇宙意識）が宇宙創成の時から用いていた神の道具である。人間の作ったのは単に数を表す数字であり、一つの認識記号、パータン文字というものである）。　ここで、数列の中心から分断して2つの数列、陰（天）と陽（地）の数列に分け、その上で計算を行うのである。また「陰の数列」と「陽の数列」における対極数(中心から同一位置にある数)を見出すと、それはすなわち、4と5、3と6、2と7、1と8、0と9、であり、.それらの陰陽の対数（つい数）のそれぞれを加算合計するとすべてに9が現れる事に気がつくであろう。また9の数の表すものはとは、すなわちその自然象の持つ本質が≪0≫であることを示し、なおかつそれは『神』につながり、かつ『神』と共鳴してその心を共有すると言う宇宙の偉大なる「基本態」の姿を示すものである。　何たること、「『ひふみ・・』天地の歌」が示す（4と5）、（3と6）、（2と7）、（1と8）、（0と9）の対数（伴侶数）の正体とは宇宙の意識（神）の奏でる大いなる天の計り事に用いられる『天数』そのものであったのである。何と言う不可知極まりない天意の表れであろうか、これが大祝詞『ひふみ・・』の真実の姿であり本来の姿なのである。それはまた不思議にも先述した米国からの報告書、すなわち「墜落した空飛ぶ円盤」の中で発見された彼らの数手法（システム　オブ　ナインズ）と全く同一のものなのである。驚くべし、三千年前の『ひふみ・・数手法』と現代に姿を現わした宇宙人の数手法が全く同じとは。貴方は信じられるかな？。果たしてこれは何を意味するものであろうか、私には今でも信じられず、ただただため息をつくだけである。今まで誰がこの「数の真実」を明らかにしただろうか、到底現代知では不可能なものである。しかし、この事実は今は理解されないかも知れないが、何時かは未来の人類の為の試金石、また栄えある日本民族の所持していた輝かしい知の布石として改めて必要とされ、評価される時がくるであろう。　そのためにここに留め記し、後は未来に託そうとするものである。　何時の時代にか必ず偉大なる『知の金字塔』として人々に評価され、歴史に刻まれることになるであろう。すべては日本に残され、日本民族にその秘密を託そうと計られているものである、我々日本人が解かずして誰が解き得るであろうか。　さあ、知に自信のある者よ、自らの手でこの事実を確め、古神道に残された古代の数の本来の姿、自然数の仕組みの素晴らしさに感動の涙を流すがよい、その上で改めて更なる深部を探り『神の秘密』を見出し、自分の心の糧とすべきであろう。貴方が「現代知」に失望し、あるべき『未来の知』に望みを賭けようとするならばである。【このあたりの詳細は『神の数学』講座（9＝0）参照】

、また、各「陰」と「陽」の対極数そのものを単体同士、複体同士で加算しても、すべては9

になり、0（無）に還元帰一され、同一結果になることを証明してみよう。例えば上で述べた天数（陰の数列01234）を加算すると10、地数（陽の数列56789）を加算すると35　となり、それらをそれぞれ一桁化するとすなわち1と8を得る事になる。そしてそれを加算すると、すなわち「陰の数列」＋「陽の数列」＝1＋8＝　　が現れ、太極状態（宇宙の本質）に還ることが示されるのである。　では正自然数列（陰と陽の合一した自然象）である　0123456789　を合計加算すればどうであろうか、それは確かに45になり、一桁化すると9（0）が現れる、それにより祝詞『ひふみ‥』とは「完全な自然象」を物語るものであり、理路整然とした流れで「自然の理」を謳っているものであることがお分かになるであろう。すべての「陰性」と「陽性」の対数を加算したものは等しく9になり、＜0（無）に還る=　　＞　になる事実はまさに真実実相の表れであり、自然のあるべき実相本質の姿を示すものである。　要するに古神道の祝詞の言葉、≪天地≫とはすなわち、自然界の持つ＜陰と陽の二元＞の相対的存在があり、すべてはそれにより開象されているとの『古代日本の叡智』であり、自然とは相対的な二元から成り立っていることを表す世界初発の言葉であったのである。そこにある真実の如何、顕れの如何とその真実については上記の数の表れを見れば万人誰でも納得するはずであろう。　しかし、残念ながら今までにこの「数の表す本理、本筋」を解した者は誰もいなく、二十世紀末に私が呼び覚ますまで「ひふみ‥天地の数歌』は三千年という長い間、古神道の祝詞と言う名の最高位の褥（しとね）の中で眠り続けてきたのである。　　【このあたりの詳細は『真実の数理』講座（7）参照】

その後『アイウエオ五十音』を連れて『ヒフミ‥』を起こし、その両者の力を借りることにより『カムナガラの道』が姿を現すと言う、まさに不思議極まりない経緯がそこにはあったのである。　またその二つ、すなわち『ひふみ‥‥』と『アイウエオ五十音図』は「古神道」の双対祝詞として「鍵」と「錠」の関係であり、一つのアルゴリズム的な仕組みを持って対峙していたものである。　その驚くべき手法をもって古い時代のある時に闇に封印され、隠されたものが『カムナガラの道』と呼ばれる「神道の神髄」である。それは今まで人類が求め尋ねあぐねていた「神の姿」の真実をかいま見せる古代言葉であり、同時に自然界における神の役割を示す言葉でもあったのである。　それは『ひふみ』と『アイウエオ』の相関仕組みによる正しい解法を知らない限りは決して解けず、その片鱗さえも見せることの無かったものである。神道関係者は言う『カムナガラの道』の真実内容はとうの昔に失われ、その内容が不明になって幾久しいと、その理由とは「解法の知」そのものが長い歴史の中のある時期に知者達により隠され、それっきり埋没し、そして忘れられてしまったことである。そのあるべき内容を見出し、手にした時にはさすがの私も信じられなかった、なぜならそれは余りにも「大きな知」であり、現代科学哲学の向こうにある隠された『叡智の姿』であったからである。　自分の手で見出そうとする方々には一つだけヒントを進呈しておくので、是非その意を解くがいい。それは『アイウエオ五十音図』を連れて『ひふみ‥』を起こし、そこにはめ込むことにより偉大な『カムナガラの道』とは自ずと姿を現ものであり、その逆、すなわち『ヒフミ‥』を連れて『アイウエオ五十音図』にはめ込めば、何たること、そこには愕然とするばかりの『アイウエオ』に秘められた驚くべき『神の業（秘密）』が現れるのである。しかもそれは現代人には信じられない形、不可思議な姿を持って現れるのである。それこそ到底人間業とは思われない「超知の数仕組み」を持つものであり、「神の関与の知」としか言えないものである。それは同時に古代の祖達の生々しい「知の響き」と、その「神業とも言うべき知の本質」がひしひしと感じられるものである。　是非とも、そのあたりを十分調査検証すると同時に貴方の類まれな「心の琴線」でその真実を汲み取り、熱い思いに浸っ

て戴きたいと思うのである。若し、貴方の直観が何事かを感じるならばである。

貴方が大衆の前で『古神道』を説く者であり、実践している者ならば、せめてこのぐらいの『古神道』の真髄秘事を弁え、心に余裕を持って人々に接すべきであろう。今の神道関係者達には余りにもそのあたりを知らずに、ただただ先人達が残した道にのみ固執し、ただ空事を述べているだけで事を済まそうとしている。それが神道を益々斜陽化させ、その衰亡に拍車をかけている一因になっているのを知らないのであろうか。一言で言えば長年にわたる勉強不足の結果が今のような事態を招き、人々の心を神道から離れさせてしまったのである。そもそも『日本神道』とは世界に冠たる「科学の法」であり、「哲学の法」であり、「宗教（神の教え）の法」であり、『大いなる自然の道を語るもの』である。学ぶ事はまだまだ山ほどもあるはずである、それを忘れ、ただ事終われりとばかり門を閉ざして蟄居を決め、社会に奉仕することを拒んでいる姿はまことに片腹痛し、笑止千万、不届き千万と言うものである。それこそは己の身を己の手で責める所作であり、永らえる事を諦めた姿、あまりにも無残な希望を失った姿と言えるものではないであろうか。是非再起のほぞを固め、大いなる決意を持っててていただきたい。
今はその大切な一番、乾坤一擲の時であり、その場でもある、今を失えば、神道には最早未来は無いであろう。是非奮い立ち「大いなる神道」の復活に一団となって心を合わせるべきであろう。古い視座はかなぐり捨てて、自らの手で現在に叶う新しい「神道の道」を模索探究し、再び大衆と共に、いや世界と共に歩むべきであろう。【その解法手順、答の検証などのすべては《数学幻視考》（古神道）No1～No5に詳しく記してある。是非御参照願いたい】。

願わくば、前述、『神の方陣』（10）で示されたように「自然の数学」では8の次は9ではなく0を示していることを是非とも確認し、検証して欲しい。それはすなわち数の本質においては《9＝0》が成り立つことを表す証の一つである。要するにすべての「相対する極における「陰と陽のあらわれ」の合一は9（最大）であり、同時にそれは0（無＝最小）を示す」ことであり、要するにすべては0（無）に還り、エネルギー関係や発生したエントロピー状態もすっかり新しくなり復元状態にあることを意味するものである、それが正しい自然の答であり、宇宙の大律の基なのである。 またそれは最近の宇宙物理学者達の「宇宙の本質関係は0である」、「宇宙の定数は0である」との理論計算とも合致し、同一の答を見せるものである。するとこの《ひふみ・・・天地の歌》は「宇宙の仕組みの本質」を表しているものであり、その意味から言えばこれは最小の形の『宇宙の縮小モデル』を表すもの考えるべきものであろう。すると祝詞にある「天地」とは宇宙自然を指すものであり、「ひふみ・・・」とはそれを貫く「法則」、「律」と考えるべきであろう。（自然の理である「元素周期律表」を見るがいい、そこには一つの軌道には8ケ以上の電子は入らないのである。すべては8をもって完了を示し、次は0に移り、また1から新しい軌道がはじまるのである、『それは見逃すことの出来ない一つの宇宙規範でもある』）。人間の計算だけが8の次は9であり、つぎは10を示し、1ケづつ無限へと進んでいるのである。古神道の「数の理」を見るがよい、8の次は9であるが9は0と同じものとしているではないか。自然の「数の理」を採らず、自然にそぐわない計算法である「十進法」を用いている限り、人類の更なる発展は無いものと諦めなければならない。まことに人類の前途は多難であり、今のところその未来を伺い知ることはできないものである。 【更なる〔天地の数〕の詳細は《数学幻視考》（古神道）№4、及び『真実の数理』講座を参照のこと】

（0=9）の発想はおかしい、あり得ないと考えるならば、それは貴方がおかしいのである。私は宇宙具象は射影空間（ホログラフ）的に考えるべきと冒頭に述べてある、そこでは最初と最後は同じであると述べ、ホログラフ的（循環的）に見なければならないと記してあるはずである。 では貴方に尋ねたい、日常的に用いている時計の針は12時であると答えても、0時であると答えても差し支えないではないか、貴方方は 12 時から 12 時までをして半日と称しているが、正しくは0から 12 時とすべきものである。すなわち（0＝12）と考えるのである、 それが循環的手法の意味であり、知らず知らずに使っている日常の茶飯事の一つでもある。今まで誰も疑わず、誰も疑問すら持つこともない矛盾した言葉では無いのか。 また、全方向循環とは立体を指すものであり、ホログラム的な象を意味するものである。（これは初心者向きの蛇足と思って欲しい） すべて宇宙的具象は平面的では無く、立体的、ホログラフ的に考えなければ答は出て来ないものである。例えばである、日本人お馴染みの宇宙の大法である『九九算表（上述）』、それを立体化し、数字合わせを行ってみると、そこには確かに宇宙の形をしている超円筒形が現れて貴方を魅了するはずである。 また同時に、それはまさに現代の宇宙物理学者達が描いている宇宙の姿、ドーナツの形をした次元体の形であり、同一の姿であることに貴方は驚愕し、知らず知らず感嘆の声を上げるであろう。 【詳細は『超物理の世界』〔10〕参照】

さて、さて、少しは理解がいったであろうか、ここにおける『神の数学』はまだまだ入り口を覗いているだけであり、中を密かに伺い見ているに過ぎないものである。現代人の知らない「数の理」はまだまだ奥が深いものであり、生半可な好奇心だけでは到底立ち入ることは出来ないものである。それは「宇宙の真実」に立ち入ることにより、そこにある「神の領域」を覗き、その正体を見て、その業にまでタッチするものであるからである。そこまでいってはじめて『神』、『神の存在』を確かな目で確認できるのである。そこで初めて『神の存在』こそがこの世の森羅万象の具現化に必要であり、必要不可欠であることが判るのであり、自然の確かな真実に涙するのである。 『神の数学』は自然の軌範を踏んだ本当の「自然数学」であり、『数』が導く自然の「大哲理」を表すものであることを是非とも知って欲しい。そして、それが今の人類には最も必要なものであることを しっかり知り真摯に取り組んで欲しい、それが人類に新しい未来を授け、新たな文明を構築するためには必要不可欠なものである。

今まで誰か古神道の祝詞『ひふみ・・』からこのような上古代の言葉に秘められた「大叡智」、そして『数』の持つ真実を完全に究めた者はいたであろうか、No、皆無である。日本民族のすべてが西洋科学学問には盲目的に従うだけで、『数』を人知の下に属する単なる奴隷道具としか見ず、『数の特異性』や『数の本質の存在』等はまったく知らなかった、すなわち、そこには元型に類比できるような相対的な自律性を持ち、意識に先行して存在していたことを見抜いた者は誰もいなかったのである。 要するに古代の祖達の残した「遥かなるメッセージ」に気がつかず、ただただ外つ国のきらびやかに見える異文化に憧れを抱き続けていたのである。何と言うことであろうか。何と言う愚暗な行為の繰り返しであったのであろうか。ここにある『超知』のすべては「古神道」が発信元であり、貴重なる日本の超知財産とも言うべきものである、日本民族である貴方がた、特に縄文古人の血（霊、DNA）が流れている方々には特に強く申し上げたい（それは特にこの『神の数学』が心に共鳴的な作用を及ぼし、心に強く響く方々を指す）。 是非、これを元に更なる展開を進めることにより真実を見出し、我々人類に寄与することを切に希望するものである。個人的に使用し、真実を求め、世に出すのは大いに結構で望ましいことである、是非ここにある「数の理」を大いに利用し、

新しい発見があれば貴方個人の名前で登録し保持していただきたい。しかしこれらを団体あたりが私物化し、権益をむさぼる為に他人を圧迫する行為等は許されないものである。なぜなら、この発見者、そしてその展開者である私がこの内容とこの事実を 10 年前（平成8年）にすでに書に記し、出版社から出しているので、これらの著作権等はすべて私が有しているからである。

私のこのHP（ホームページ）における記述については、すべて「数」が開示している真実に立脚するものであり、虚偽、妄想、または幻想等によるものは一切無く、すべては数に裏打ちされた現実的な証（あかし）を持っていることを申し上げておきたい。それを語るものが今まで述べてきた「自然数が語る諸問答の姿」であり、「数が明かす宇宙自然の妙」である。それらを束ね、確たる証拠となるものがそれぞれの証言としての100編近くの『数が語る実証レポート』の存在である。 ここに述べてあることは、まだ序の口の数物語であり、本題にはまだまだ驚くべき「未知の大真実」、人類の頭では到底発想不能な「神の真実」、そして理解し難い不可思議な「数の理」がまだまだ数多く見出される事を伝えておきたい。それらのすべては前述したアカシック・レコード？あたりと接触し、感応受けない限り決して取り出せないものである。 しかし、そんなに難しいものかと問われれば、別にそうでもなくよく考えて見れば甚だ簡単なものであり、当たり前のことなのである。但し、現代知識に裏打ちされた諸氏側から見れば、そんな馬鹿な、あり得ない、聞く耳も持たないと血相さえ変え、抗弁したくなるようなものであろう。 要するに見方次第、知の培われ次第で同じものも異なった形、奇妙なものに映りるのであり、それに対して反駁し、排斥を試みたくなるのはこれ当然の成り行きであり、人の常と言うものであろう。反駁、反証大いに結構、私としては大歓迎である。

例を出して見よう、日本には勿体無いもの、出来すぎたものとされる古代の「知の業」が三つあることはご存知であろうか、しかもそれらは日本人にはとうの昔に見捨てられ、今では誰も関心さえ抱く者とてないと言う姿を持っているものである。 それが今まで述べてきた古代からの伝承言霊（数も含む）、すなわち①《『ひふみ・・』の天地の数歌》、②《アイウエオ五十音図》、そして③《九九算表》の三点である。私が冗談にこれらが超古代日本の「三種の神誼（器）」であると申し上げているものである。（『誼』とは古代の言葉で「正しい筋道」、「自然の道理」を表す言葉である・・・・広辞苑）。 今までの三種の神器の鏡、剣、玉ではどうあっても世は開けないのである。これについてまた誰も知らない『神の秘密』を披露申し上げることにする、これは大変重要なことがらであり、貴方方が間違いなく「そんな馬鹿な」と異口同音に叫ぶも事は疑いのないことであろう。 ただ心配なのは私の稚拙な言葉での表現をもって記してあるので、果たして十分に納得のいくような説明になり、伝えられるのか、それが大変気がかりである。 今後も追々加筆、追筆を加えながら、意味内容をもっとハッキリした全容にしていくつもりである。まづ、上記にある①、②、③の概要を一応簡単に説明しておくので、、諸氏の意見も是非戴いて、更に内容を煮詰めていきたい所存である。

① 『ひふみ・・』の言葉は平面上における一次元的な象であり、直線から円（循環体）に移行する基本手順（1 次元から 2 次元象？少々不明でもある）を示しているものである。それが両端にある0である。またその移行により新しい「数世界」の秘儀が見出され、真実の数計算式がもたらされるのである。【その詳細は『古神道』（4）参照】

② 『アイウエオ』五十音図においては『ひふみ・・』で開示されたものと同じ手法、すなわち

両端にある同一語を重ねることにより縦と横の平面2次象から一段上の立体象（3次象＝筒型）に転化変身を遂げるものである。しかし、そこにおける「数の手法」、それは『神の手』でなければ表記不能と思われる「大いなる仕組み」である、何故『アイウエオ』五十音図に神が関与し、手を差し伸べたのか、それともすべては偶然の産物なのであろうか、それにしては余りにも秩序立った偶然が重なる過ぎる、一体これは何であろうか。 誰か「知の溢れている方」、「神の知にタッチしたい方」、「神と頭脳比べをしたい方」、是非挑戦し、解き明かして欲しい。それはまさに不可思議の一言に尽きるものであり、ただただ驚嘆と畏敬に終わるものである。それは我々の母国語である日本語の生い立ち、すなわち日本語はよその国に起源があるのでは無く、この日本に原派生したゆかしき、そして尊い言葉であり、『神』の関与の下で創られたものであるとの証明が確たる方法でできるのである。 【その詳細は『古神道』（5）の②参照】

③ 九九算表（宇宙次元原理表）においても①、②と同じ『ひふみ・・』の手法を用いることにより横、縦の平面2次象から二つの操作により、超立体象（4次象）が現れるのである。それが上述の『宇宙次元原理表』にある宇宙の形、すなわちドーナツ状の形である。それはまた、現代物理理論の先端をいく「トーラス」の形（ドーナツ形）と同一のものである。まさに不思議、不可解の極みに尽きるもので、これ以上の解釈は今の私にはどうあっても無理である。（数にて論証済み、図解検証すべて可、） 【その詳細は『超物理の世界』〔10〕参照】

④ 『アイウエオ』の初期漢字文字が綴る「顕幽の世界」、すなわち「あの世」と「この世」の姿内容の真実。ただこれを知るだけでも超古代の意識文明の確たる存在が窺われるものである。（初期漢字文字「アイウエオ」により容易に検証可、後期漢字文字である「アイウエオ」ではそれが消されて意味の無いものとなっている、何故なのか？） 【『古神道』（5）の②参照】 日本の学者諸氏よ、あなた方は日本には漢字渡来以前には文字は無かった、神代文字などは後世の戯れの文字、偽作文字であったとするあってはならぬ「安易な道」を選び、真実からの逃避を計り、虚妄の歴史をつくり上げているのであるがが、それはただ外国の歴史家たちの日本軽視の風潮を駆り立て、国の威信を傷つけているだけである。次々と真実が現れ始めた今、今度はどのような逃げ口実を見つけ、どのように我々を丸め込もうとするつもりであろうか、貴方方学者のそのような態度が日本の歴史の窒息状態を作り出し、真実の歴史を見えなくしているのである。また己の住む世界を自ら小さくし、活路の場を閉じ、自らの仕事を絶とうとしているのでもある。そろそろ新しい真実歴史を見出し日本のために気を吐くべきではないのか、材料はいくらでもあるではないか、例えば中国前漢時代に作られたとされる多くの古代鏡に何故無いはずの神代文字が彫られているのか、時代は漢字が日本に渡来するおよそ500～600年前である、おかしいではないか？。また、世界にまたがって散逸している誰も読めない古代文字が日本の神代文字で読み解けるのは何故か？。しかもその先鞭者は外国の言語学者であり、日本人ではないのである。まさに無能と言う恥を世界に振りまいているとしか言いようにないものである。（ケンブリッジ大学教授のジョン・チャドウィク氏によるクレタ＝ミケネ文字の日本語解読）。またおかしいのはそれらの真実考証に対して日本の学者達はただただ無視を決め込むだけ、知らない振りをするだけである。まさに日本の歴史家の唱える「日本歴史」とは矛盾だらけ、不思議だらけのおかしなおかしなストリーの連続である。

信じられないではあろう、しかしこれらすべては日本の古神道という「古代意識的遺物」

から見出されたものであり、すべては今、「数」により明らかにされ、導かれたものである。これらには「古代日本の叡智」のすべてが網羅され、明かすべからずの秘め事として隠されていたのである。でも今は数千年の時が経ち時代はすっかり変わったが、相変わらず埋もれたままの姿と言える。そこに鎮まる真実を見出し、共に覗いて検証して見ようではないか。ここまで読み解き、ここまで達した今の貴方なら十分に考察検証できるはずである。それはまたその手法さえ知れば誰にでも簡単に自己検証が出来るものであり、望めば更なる奥舞台への踏み込むことが出来、「数」が開示する深遠なる『宇宙普遍の真実』に近づくことができるのである。 またここにある「基礎数理」を十分に理解咀嚼すれば、このあとは『神の方陣』と言う宇宙磐石の「神の仕組み」が貴方を待ちうけ、貴方を更なる夢幻の「天上数世界」にいざなってくれるのである。 そこにはしっかりと『神』が鎮座し、すべてのものを導いている事実が数によりやさしく示されているのであり、とても現代西洋科学では考えられない不思議な始末の数々がまかり通っているのである。 貴方がしっかりとした考えと小、中学生並みの頭脳、学力を備えているならば易々と理解検証でき、新たな感激と大いなる希望を生むものである。 しかし、そこで『神の数学』は終わりになるのではない、すべてはこれから始まるのである、これらはすべてプレリュードであり、新たな幕開けの初幕でもある。是非、今までの古い衣は脱ぎ捨てて新しい衣類に身を包み、本当の真理を携え、人類文明の行く末に関わって見ようではないか。

最後にもう一つ解せない話を申し上げる。今まで世界のいずれの科学、哲学、宗教も持て余していた『神の存在』を『神の数学』は綺麗な、そして明細な形で表すことが出来るのである。まさに整然とした数の証言により『神の存在』の事実を小学生にでも分かるような形で開示されているのである。貴方方には『神』は見えない、見ようとしないから無いのである、しかし在る、見えるものであると確信しそれを探せば見えないものも見えてくるのである。そして強烈に人の心を引っ張っていき、否定するにも一切否定出来ない形をとって現れているのである。『神』は在るのである、歴然と存在しているのである。そして数図的な方法をもってその形と、その働きの一切を目で見ることが可能なのである。【そのあたりの詳細は「神の方陣」上級講座（3）参照して欲しい】

更に深い洞察を試み、意識を天外に飛ばし、新たな真実を掴みたいと思う方は『神の数学』の参考資料を基に『本当の自然真実』の存在を学ぶ事を勧める。、そこには驚くばかりに人知未踏の『叡智』が数多眠り、知を求めて訪れる人を一刻千金の想いで待っているのである。その中には恐らく、ここに示した内容の百倍も二百倍もの不思議なアヤを持つ真実の数々が余すことなく記されているのである。そこにあるのは紛れもない「日本の純知」であり、大陸佛教文明や今の西洋科学文明に汚染される前の驚くべき古代日本の『大叡智』の数々である。 誰か今までこの事実に気がつき調べた者はいたであろうか、NO である、気がついた者は誰もいない有様である。 ただただ大陸文明、西洋文明に目が眩み、その姿を追いかけるのに汲々するだけであり、足元にある巨大な『神の知』の存在には誰も気がつくものはいなかったのである。何とした民族の失態であり、何と言う不様な大醜態であろうか。ただただ恥じ入るだけである。 ここにあるのは私のもっている全体知の恐らくは2～3%にも満たぬものであり、初歩的とも言うべき『知』であり、数計算手法である。もし、それさえ解しえぬと言うならば、もはや何をかいわんやである、神道もこれまで、日本の未来もこれで終わりであろう、ならば私はただただ黙するのみであり、口を閉ざすだ

けである。

完

（『神の数学』こそ新しく世を開く「数の学道」であり、まことの「自然の理」である、そして我々の心を奥深くから鎮め、慰めてくれるものである。）

（疑問、質問には何時でも応じます。表記連絡先までどうぞ。ただしここにある「『神の数学』の手始めを少しでも理解ができ、心に目覚めが現れたあとに願いたい。

ここに記されたどの内容でもよい、関心のある内容の資料をお知らせ戴ければただちにお送りする用意があります。 ただし本気で調査研究を望む方のみ。）

これらのことは大げさに聞こえたかもしれない、しかし古神道に隠されていた秘密を紐解くとそんな独りよがりの我々の「知のプライド」なんかは完全に吹っ飛んでしまうのである。今必要なのは お互いにもっと素直な気持ちをもち、事あるごとに自然の言葉である数を用いて自然と語り合い、真実をつかむことである。我々も、もっと大きな心を持って胸襟を開き、お互いに素直に語り合い、手を取り合い真実の探求に努めるべきではないのか。『神の数学』はその自然の言葉を学ぶ場でもあり、語るべき場でもある、そのあたりをしっかり胸に秘めて『神の数学』の秘髄を解き明かし、もって世の中に知らしめるべきであろう。

—

http://jbbs.livedoor.jp/study/2491/#1 (6)

See → （回文と魔方陣‥‥）、＆ （‥‥何でもコーナ）！ ！

数学

→